



增補俳諧歲時記原草

江戸 藍亭主人纂輯
藍亭青藍增補

夏

漢書 曆志
太陽者南方、南任也、陽

氣任養物於時為夏、夏假也、物假大

乃宣 炎帝

帝淮南子南方火也、其帝炎
帝其佐朱明執衡而治夏

祝融

神禮月令夏月其帝炎帝其神祝融
祝融顓頊氏之子曰黎為火官正

者 昊天

纂要天曰昊
天言氣浩汗

朱明

爾雅夏為
朱明一曰

長贏註氣赤而
光明故曰朱明

燕炒

韓文自從五月困
暑濕如坐深甑遭

燕炒說苑湯之時大旱七
年雒拆川竭煎沙爛石

四月

仲呂

律月令律仲呂高誘註曰陽散在
外陰實在中所謂振陽成功

立夏

孝經緯穀雨後十五
日斗指巽為立夏

踴躍

通俗志作
踴躍廣義

夏



躋躋ハ四イ月名也、小満ちゅうまん

于^コ此^ニ少^シ得^ル
盈^{テイ}滿^{マン}也、
余^ヨ月^グ

五陽決退一陰陰復
而爲純陽乾天也

陽月ひがしづき 為正なりただし 己月みづのき

夏なつ、孟まう夏なつ

故ニうのち月と云、又
畧して、卯月と云、

花のうり月
後鳥羽院
とことハのふ
得鳥羽月
えりハの

五月
癸賓

五月
芒種
節

之穀可き夏ゲ王一

也、極至
仲夏

林 茂
ト
泉
月
月 余

之氣也。五月建焉。而辰有鶉首者。星名。鶉首月之畧乎。

いふところづから月の名とていふて
まづ昔のちいせうに家隆
月えぬ月

空より今月より月と
さる
つゝもめなん 顯昭
早苗月

六月
林鍾

也、位於未、在六
鐘、裏也、白虎通

小暑節
五月令

夏

躋躋ハ四イ月名也、小満ちゅうまん

于^コ此^ニ少^シ得^ル
盈^{テイ}滿^{マン}也、
余^ヨ月^グ

五陽決退一陰陰復
而爲純陽乾天也

陽月ひがしづき 為正なりただし 己月みづのき

夏なつ、孟まう夏なつ

故ニうのち月と云、又
畧して、卯月と云、

花のうり月
後鳥羽院
とことハのふ
得鳥羽月
えりハの

五月
癸賓

五月
芒種
節

之穀可き夏ゲ王一

也、極至
仲夏

林 茂
ト
泉
月
月 余

之氣也。五月建焉。而辰有鶉首者。星名。鶉首月之畧乎。

いふところづから月の名とていふて
まづ昔のちいせうに家隆
月えぬ月

空より今月より月と
さる
つゝもめなん 顯昭
早苗月

六月
林鍾

也、位於未、在六
鐘、裏也、白虎通

小暑節
五月令

暑 同上 小暑後十五日斗、**李夏** 礼記李

日在抑字彙九、**瓜期** 左傳齊侯使連稱管至父戌葵丘瓜時而住及

未月、日、李月、**瓜** 京雅六月為且疏云六月 **遯月** 易

且月 得已則曰且且于余切 **遯月** 本

義 遯退避也為卦二陰浸長陽 **年浪草** 陽

增山井 六月の異名とす、礼記曰朔月少牢五進 **陽**

冰 年浪草云增山井土疑らくハ誤、按、陽、賜、小作

伏之日 以賜大臣又 **風待月** 蔵玉松ヶけ床居

待月 の交の **鳴月** 同上 **常月** 同上 **定家**

月 同上 **常月** 同上 **定家**

四月 虎杖競 朔日 舊鑑論 貴布祿の御神

稻荷祭 紀事 四月卯日ニあるハ初

夏 同上 **小暑** 後十五日斗 **李夏** 礼記李

奉一北の方大宮通りと経る、五条松原、龍頭（龍頭）、俳諧歳時（記云羽倉家）

より、五条の橋と過ぎ、大和路、本山へ、譜、桓武天皇御宇の人荷田氏の祖、山城国稻荷祭の時、神楽の

とくわく、面と龍頭太と、その外の祭の假面、王の鼻と称す、龍頭太、田中の社の神職、この面則ち龍頭

太が作る、と云く、ち名づくる、と云く、伊勢神衣祭（伊勢神衣祭）

十四日、公事振源、神衣祭、神祇令のせ、神服部、潔齋で、三河の赤引の神調の糸と云く、神衣と云く、又麻績連と云氏

人麻と云く、和奴荒奴と織る、神明、忌やす（忌やす）、祭の条

小奉る、神衣の祭と云く、延喜式、和漢三才圖會、江劔三井寺の山中、苗の高サ

出、岩梨、二三寸、葉の大サ、瓢樹の葉の如く、失り、地、小撮る生ず、二月小白花と云く、虎耳草花に似く、三

月実と結ぶ、青大豆の如く、四、数顆、攢り生ず、楊、梅の様、葉の交り、裏、外色青く、内、覆盆子

紫黒色、小児皮と云く、食ふ、味微酸く甘、本草、蔓、鈎刺あり、一枝五葉、葉小く、面皆青く、光

薄く、毛あり、白花と云く、四五月実の、子と成る、蓬菓、小く、稀疎に生ず、ハ黄く、熟すれば烏赤

一、本草附注、子、覆盆の形に似く、故名之、蓬菓、覆、盆子、蕪、樹、蛇、苗、和漢三才圖會、莞花、俗云、以

小、五種あり、石藤、花葉並、藤に似く、三、月花と云く、紫色、或ハ白花、又草藤、上の説のと、紫花

白花の二種、三月ハ四月至る花と云く、又一種、夏藤、黄白色、蔓、葉花あり、紫藤に似く、中、馬蓼

山州山科の近道、往く有り、四月花と云く、本草、木草、凡物の大なるもの馬と云く、名く、日本、ハ、相

似く、名く、と云く、犬蓼、犬山椒、犬黄楊、と云く、いぬ蓼、ハ、葉、芋の注、秋部、紫羅傘

小黒点あり、芋植る、紫羅傘、葉射干に似く、花の色紫碧、抽で、ず、其根と、馬頭と云、菜入る、○犬馬尾ハ、蕪子花の類、

花早く、石解花、或ハ石解、小作、本草、石上ハ、白花と云く、叢生、其根糾結、甚く

繁、莖葉生、皆青色、乾くと、黄色、紅花と云く、節、の上、自ら根鬚と生、亦折下りて、砂石と云く、裁之、或ハ物と

夏、

盛り、屋下、掛頻、澆、水、以、寸、年、と、經、く、
死、た、俗、稱、一、く、
蘭、花、
本草、虎、鬚、草、一、名、燈、心、草、
千年、洞、石、薺、と、す、
即、竜、の、鬚、の、と、い、ふ、

但、一、竜、の、鬚、ハ、堅、小、ナ、ク、瓢、実、ナ、此、草、ハ、稍、粗、ナ、ク、瓢、盛、
ち、白、く、吳、人、裁、之、時、瓢、を、取、り、燈、炷、と、す、
及、び、蓑、と、織、る、和、名、抄、蘭、和、名、爲、年、色、立、成、云、路、馬、尻、刺、
世、諺、同、登、今、日、童、の、小、弓、と、持、て、い、ん、ち、
何、の、故、と、云、答、む、し、左、右、

五月、印、地、打、
の、馬、場、中、馬、を、騎、て、弓、射、る、こ、の、侍、と、い、ふ、こ、の、目、を、
も、や、は、是、ホ、や、始、と、い、ふ、
紀、事、
見、童、柳、の、木、と、い、ふ、
大、小、の、刀、と、作、り、こ、を、首、蒲、刀、と、い、ふ、男、兒、こ、を、腰、に、横、に、
頭、巾、と、着、り、山、伏、の、体、と、い、ふ、
鴨、河、の、辺、と、い、ふ、
左、右、に、列、り、礮、と、擲、り、相、戦、ふ、是、と、印、地、と、い、ふ、
守、官、
江、東、佐、木、の、社、の、祭、礼、五、月、廿、五、日、印、地、打、を、
武、帝、記、
端、午、の、日、守、官、と、取、り、飼、ひ、丹、砂、と、以、て、体、
と、赤、く、画、を、次、の、歳、此、日、搗、之、人、の、臂、に、塗、り、犯、す、
生、玉、の、流、鏑、馬、
五、日、神、社、啓、蒙、生、
子、守、官、と、い、ふ、
五、日、神、社、八、橋、津、田、

東、生、郡、天、王、寺、邊、に、い、り、祭、る、處、の、神、一、座、天、生、玉、神、と、い、ふ、
社、家、註、進、明、應、年、中、本、願、寺、の、僧、こ、の、所、に、來、り、寺、院、と、
い、ふ、の、神、地、と、掠、り、境、内、に、接、し、こ、を、や、り、神、の、不、潔、
と、思、ひ、か、の、僧、と、罰、を、僧、に、お、し、て、神、殿、造、替、の、宿、禱、と、い、
ふ、
僧、の、病、愈、し、遂、に、神、殿、と、今、の、旅、店、の、廻、り、に、迂、り、奉、
其、後、信、長、の、兵、火、に、焼、け、灰、燼、と、な、り、
後、に、神、坐、と、別、所、に、迂、す、慶、長、年、中、秀、吉、城、郭、を、築、
の、刻、今、の、地、に、迂、し、紀、事、追、加、今、日、午、の、刻、流、鏑、馬、を、門、外、
に、し、鳥、居、の、方、へ、馳、し、其、裝、束、腹、帶、陳、列、織、と、着、り、只、一、
人、と、い、ふ、
今、日、今、
○、山、城、國、愛、宕、郡、紫、野、に、
止、む、
祭、る、所、牛、頭、天、皇、諸、神、記、
正、曆、五、年、六、月、廿、七、日、疫、神、と、船、里、山、に、安、置、せ、り、長、保、三、年、
五、月、九、日、疫、神、と、紫、野、に、迂、座、せ、り、
京、師、の、衆、庶、御、灵、會、と、行、ふ、
紀、事、
午、時、神、輿、二、基、相、殿、の、官、各、
旅、所、に、出、づ、相、殿、の、官、ハ、一、説、愛、宕、の、官、に、古、く、愛、宕、權、現、座、馬、
峯、に、あ、り、此、社、と、今、の、愛、宕、山、に、移、り、一、条、院、御、宇、勸、請、す、
愛、宕、平、社、地、主、神、と、故、に、社、と、守、神、幸、の、日、鉾、十、三、本、あ、り、凡、

夏、い

鉾に出すの町所あり別當供奉一氏子相從ふ神幸小川
通りより元誓願寺大宮通りと過船置山の北の林麓と過て

本山
六月忌火御飯
江次第 忌火御飯 六月十五日
以御臺盤一脚供之次供御飯

御菜四種和布御汁一坏下、公事根源内膳司より奉まる
と大床子の御座より供まる、景行天皇の御時より、
忌火とて火と思むる、神事あるの時、不浄の火とて、
ふらふらとや、八月次神今食の御神事を今日より始め

嚴島祭
五日藝州佐伯郡官島あり祭る所の
神三座市杵島姫神田心姫神湍織

津姫神、或書云、推古天皇の御宇、播磨国の住人内舎人佐伯の鞍
職、當国に左遷、恩賀の島あり、時、紅帆の船来る、船の中、
瓶あり、瓶の中、鉾と立赤幣と着、うちに三女あり、容粧端
正告て曰、我皇祚守護の為来現も、よく、宝殿と恩賀
の島と造る、時、推古天皇二十二年正月、嚴聞、達し、
社と當、嚴島大明神と号し、始の名、恩賀の島、後、市杵
島の神号と用ゐる、或、地景の美とて、称、當社、
後、深山前、蒼海、左、原野、右、松原、その野、水あり、神洗

井と名く、蓋、當社ハ山上あり、廻廊ハ平地より、海潮
より、廻廊より、乾、八十、五十、町あり、
毎双の絶景、今通、宮島と号、池の御前、同国
安藝郡あり、嚴島と号、神休、毎年六月十七日の夜、
一の神輿、船舞樂と奏し、此、渡、清會と、平相
因清盛、灵驗と、建立、其後弘治二年、陶晴賢
滅亡の時、兵火より、回祿、毛利大膳大夫、元就
再興、廻廊、周、百十八間あり、例祭、六月十五日、十七日、
至る、先、神前、御池、管絃の船を組む、舸三艘、舸、
座と張渡、藩と結び、竹、樓を作、花と灯籠を釣
、前後挑灯、数多、飾、十七日、御船、濫申の刻、件の舟
と大鳥居の正面より乗出、管絃を奏、外宮、押渡、酉
刻、管絃を、供僧、伽陀并舞樂、畢、御船と嚴島、漕、
、長濱の沖、奏樂、亥刻、頃、大鳥居の、漕入、
六月上旬、諸方の商人あり、十五日、群集、

町入、
伊勢祭禮
十六日 延喜神祭、六月十六
十七日 日度会、官と祭、十七日

太神宮と祭る、其儀、十五日、黄昏以後、祢宜、諸内人物忌、率
夏

々々神の御雜物と陳列し説く、亥時夕膳と供し、丑時朝膳
 と供す、祢宜内人亦歌舞と奏す、十七日太神宮に参る、其儀
 一度会ふ同し、○外宮十六日内宮十七日を行へ、京師
 御奉納の神室と、神主神殿、捧ぐも、官殿の御戸と開く、
 是と拜せんとし、諸人群参す、十人の祢宜其外、廣前にて
 松明とて、祝詞と捧ぐ、今日出家四頂の者と許る、
 恭詣る、
 泉雅水の本と源といふ源と泉と云 泉泉名
 泉殿瀧殿、○泉水の辺、瀧の辺、造る殿舎とて、
 嵯峨の大覚寺、栖霞寺とて、瀧殿とて、

神泉苑瀧殿、源氏松風集、井戸替、井礼伐、漢各

志夏至井と浚へ水と改め、冬至み鑿て火と改め、
 瘟疫と去へ、○さし井へ、六月井と浚ると云、夫木松が根

蘭外の秋とて、定家、蘭此草、備後、国小多し、
 川と席とす、委く八月、白麻和漢三才圖會、蘭麻

蘭花の条とて、日向薩、多し、

九洲の上の産、其葉微、胡麻葉に似たり、大く鋸齒とて、
 小本草個目、桐葉に似たり、六つ、精、三餘
 齋曰、予遠州の種と得て、種る、一年、其葉胡麻
 の葉、或、椶櫚葉の葉の如く、花黄なり、其実茹み似、
 る、又翌年その子と種ま、則生、葉桐の葉の如く、黄
 花とて、杖、花の如く、実ハ半磨形の如く、是雄
 雌、此、和、三、説、も、小、説、と、す、
 標の花、時珍云、二種あり、
 一種ハ實と結む

六月六月會、或ハ傳教會、長講會
 六月六月會、或ハ傳教會、長講會
 六月六月會、或ハ傳教會、長講會

○山家説云、六月会ハ、弘仁十四年始て行へ、建曆三年ハ、
 勅、御齋会ハ、准ぜらる、宣命使、〇、最、登、姓
 ハ三津氏、近江滋賀郡の人あり、神護景雲元年、生、弘

仁十三年六月四日寂す、年五十六、貞觀八年八月、勅して傳
教大師と謚す、此令八、飯山の谷、論議、会場一院で年番

あり、土月天台、**四月 鼻高祭**、大和名所記、毎年四月八日

南都興福寺中門、仁生会とて、伶人舞樂あり、其舞
の中、陵王の舞と奏す、其面の鼻高きとて、俗に此法会と呼
ぶ、鼻高、**花御堂**、か部、佛生、ハナゴ、か部、戒祖堂
祭と云、会の条ニ注ス

花供、高野の花供、**梅天**、杜甫詩、南京西浦道、四月、熟、黄梅、湛、長

江夫、冥、細雨来、**嚴維詩**、梅天一雨清、潜確

类書、唐人成都とて、以て南京とす、則蜀中、梅雨乃ち四
月、在、是、四月の梅雨と云、本草、春、初、果、黄

又熟、梅天、黄梅、天、葉柳、と生じ、即ち黄蕊

花、開、春、晚、至、**葉櫻**、オナ呂一派、ハ、葉櫻と春

く、葉長、成、す、とす、蕉門諸流、八、四月とせ

夏、首夏の新緑、**見草**、如花の異名、蔵玉、つみ
を賞するなり、とす、よき、め、小、時、鳥

左田の山の里、**花柚**、大和本草、一種花柚、と云、其、実、小、
小、鳴、け、く、多、く、と、の、酒、あ、る、と、云、美、味、あ、る、故、に

名、で、味、大、柚、小、ち、れ、**白丁花**、和漢三才圖會、花、白、く、微、
い、も、又、賞、す、が、丁香の氣あり、故、小、俗、ニ、れ

と名、で、小、樹、高、二、三、尺、枝、莖、勁、く、葉、ハ、狗、黄、場、に、似、たり、四
月、小、白、花、と、な、り、大、サ、三、分、を、一、種、千、葉、の、もの、枝、莖、と、折
す、す、**挿之**、活、一、叢、生、す、、**牆籬**

除限の爲、人家、擔、滴、の、下、に、種、と、植、**牡丹**、牡丹、**花王**、白氏文集、牡丹、花、開、花、落、二、日、

名、錢、魯、公、嘗、て、曰、人、牡丹、と、謂、て、花、王、と、す、今、姚、黄、ハ、真、に、
其、王、と、い、ふ、**花宰相**、芍薬、と、云、**本草**、**群花品中**

紫、ハ、乃、其、后、也、牡丹、と、い、ふ、才、一、く、芍薬

と、云、二、と、す、故、小、牡丹、と、謂、て、花、王、**蓮**、蓮、の、莖、**同上**、**莖**、ハ、

穿、て、白、藕、と、成、入、即、ち、莖、ハ、嫩、弱、竹、の、行、鞭、の、如、く、長、く、
と、の、丈、余、に、至、る、五、六、月、嫩、り、時、水、が、没、び、く、取、之、蔬、と、な、り、

夏
は

茹ふぐ俗藕絲菜と呼ぶ
和名抄菰 若波知須之波比
蓮の浮葉 荷葉清明の
後初て水貼

飛蟻 和漢三才圖會 蟹ハ羽ある蟻ハ人家の古き
浮葉ハ 松の柱の間ニ寄生ス其蟻細小白く罌粟

子の如く黒点ある処頭へ尋て黄赤赤變り翼を生じ再び
黒く變りや群飛す奈何にもするもあらず相傳ふ咒

いの奇と書て其柱に粘りてハ蟹こしく除去るをむく
試み驗す其奇誰人の詠あることとあべハありと八山不

住べきものある一里へ 初松魚 東医宝鑑 松魚性
出るこちのあやまり 平み味甘く毒

肉肥色赤くして鮮明あま松の耶のて故に松魚
と東北江海の中を生す 天和本草 相州鎌倉或ハ小田原

の辺に生すを釣て江府に送るこの早く生るものと初鯉と
称し賞味す 〇鳥帽子魚 鯉と云ふ部よりみざる

兼三夏物 和漢三才圖會 麥と炒磨て細末ナ飛
羅て冷水に浸し身を味る砂糖

和して愈佳 〇 早鯧 是又一夜鯧と云ふハ此製
俗に麥と云ふ 眞貝の數種と細く截て醃

す故に神鮓と云其熟すこと
とや依て早鮓一夜鮓と云

のそく鯧是 蠅 本草 夏出く冬蟄又暖と喜び寒
鯧に似る魚と 蠅と惡む其蛆と胎く蛆と生ズ灰中

入る蟻化して蠅とある蚕蝎の蛾化 蠅虎 同上 小蠅
す如く水に溺て死し灰を得て活

蠅と捕へ喰之 方目鳥 和漢三才圖會 鵲正字按
是と蠅虎と云 大鵲の外ハ黒色短尾

尖まる嘴本紅く末黄く脚長く正青く常田沢を
鳴夏月鵲を以て上饌とす味美く又大鵲ハ形ハ鵲

似く大ハ形色少し異 余雅集註 鳩ハ即ち護田鳥あり
人々も時ハ鳴く主の官と守るに似るあり故に名之

茗草 蘇頌曰根叢生と作す窠毎三十莖莖莖
赤く黄く七月黄花と云 〇陶弘景

曰莖苗と取 水馬 け部競渡 梅雨 さ部五月雨
と掃帚と云 〇 条に注す 〇 条に注す

半夏生 本草 半夏一名守田礼月令曰五月半
夏生蓋當夏之半故名守田月令廣

夏は

礼記疏ニ反舌
と蝦蟇と云、
博多百合
和漢三才圖會花黃白色
背赤斑の文理あり云々

花菖蒲

白菖の属、其葉水菖蒲より、色淡青、水陸
小宜、共に叢生す、五月一莖と抽で、莖端より

花を生ず形状燕子花の如し、紫淡紅白木の數色あり、最も
愛觀すべし、水草蒲子似く花をむく故に花菖蒲と云

紫羅襪花

本草 白菖二種を、一種ハ池沢に生ず、根大三寸、葉白く、節跡ハ赤いもの、白菖と云ふ

俗ニ是を泥菰蒲ふやめと云、一種、溪間うすた子生、根瘦赤節、稍密あやめ、

この漢孫之俗是と水菖蒲とを和漢三才會に白菖ハ葉花

皆燕子花に似る、瘦しく、其花紫色、

又白花あるあり、淡紅あるあり、
古来

論多く、但一八雲御抄童蒙抄其外頭注（密勸）の諸と

菰のふとせふ姑くくくくく又田字草のこもくと説ふ

物の絵様は四出の花とくねまど、むきど
と云、是ハ田字草のくまど、くねまど、
初蟬 セ・部・蟬
条中可具

羽拔鳥とけり 羽拔鴨はねけり

凡諸鳥、五月羽毛脱落あくるも
つる
禿頭のどろ、こまを羽抜鳥と云、

新六 夏草の野沢がらの羽ぬけ鳥

六月
博多祭

日 十五

子にみとあふべ
 あるが身多
 家為

○博田擲田の神社ハ、筑前国那珂郡中々桑る所の神、中殿ハ

拂稻田姐余、或說三、大君子余、勸請天平室宇元年、右

殿、祇園牛頭天皇、勸請天慶五年、左殿、天照皇太神宮、

勸請年月詳あづべ件之三神相殿、正月八日正大般若と

修、六月十五日祇園会、十一月二、知日新嘗会、今六月十五

日祭礼を行ふ古（八十六）
日十七日永享四年六月十五日始て祭之作山

六基^六京師祇園会の山は四倍と云く右山次第ニ上張りふ

組くみ上うへて階かゝ上うへ丸まる百ひゃく人にんと居ゐらしむゝ一い基きと引ひくゝの丸まる千せん人にんを

う木偶人子鎧を着て階上かみに立て其甲冑かむろも皆姓名

と書おし、すく故に領主の家臣我をくじと美と令で

神與三基、共奉の行装人おこころ安んじ、云

此五田風土記丹後國海部郡吳の方々連石里あり、

長江大奇、長江二百三十二里、廣江二百三十二里、
 長江大奇、長江二百三十二里、廣江二百三十二里、

夏
は

橋立名づゑ久志濱、久志之渡と名づゑ、拾芥
 智恩寺ハ是切戸文殊安置の道場なり、天竜六齋
 灯明を供ス、紀事追如六月廿五日丹後切戸の文殊会、同橋立
 祭ニ、文殊会、橋立祭同事ニ、○天橋山智恩寺ハ延喜四
 年甲子勅、山号寺号なり、莊田賜ふ、このころ四百
 余年と云々、嘉暦年中、嵩山禪師住持ス、是禪刹の始ニ、
 夫より三百余年、住侶詳あり、寛永年中、国主京極高
 廣別源禪師を請、住持セリ、是より洛の妙心寺
 子属す、寺領五十石余、文殊堂ハ異向、明暦年中、改造
 堂内ニ延喜の勅額あり、云々、○橋立明神ハ、本社豊受太
 神と祭ル、左ハ大河大明神、右ハ大竜王と祭、○伊祢浦
 名所ニ、伊祢ハ惣名あり、九日出、亀島なり、入江の裏
 向ニ、丹後郷ニ、此所なり、鯨ありと云々、○天
 橋立ハ、与佐の海中ニあり、長洲ニ、長サ三十六町、土人浮島
 と云、誤あり、松樹並木のやうに連なり、碧海中央
 六里松と作り、詩人六里松と称ス、社の近処樹の茂リ
 たる所と濃松といひ、むつとある所と淡松と称ス、云々、俗
 云三保ハ捐、橋立ハ、枝をうとつと云々、云々、

あつと、二町をうの舟渡あり、是と九世渡とも、廿切渡の
 文珠とも是、云々、内外濱、子日の時、萬代の濱あり、此
 橋立の別名あり、○竜灯、松ハ洞、
 磯の辺あり、松樹蓋の、
 半夏草、
 半夏、二月

苗を生ズ、莖、この端、三葉五、浅緑色、頗る竹の葉に似
 たり、○此の和産と相同ト、花ハ夏の末、秋に及ぶ、云々、
 蓮花、
 余雅、荷ハ芙蓉、其莖ハ茄、其葉ハ荷、その
 花ハ菡萏、其実ハ蓮、其根ハ藕、其中ハ藕、
 の中ハ薏、注、曰、芙蓉ハ總名、別名芙蓉、菡萏ハ蓮花之

○愛蓮説、蓮花之君子者也、○池見州、露塔草、水
 塔草、
 蓮実、
 貞徳曰、蓮ハ花ニ実と具、てある故、
 の具名也、
 蓮の実も夏、蓮の実麗く秋あり、

草、
 あ部麻の
 四月 日光祭、
 十七日

○十六日例幣使野洲日光山へ参向、拜礼の儀あり、申の尅神
 典三基、御官と止、奉、新宮の拜殿に辻幸、
 宮、三仙堂の前、於て、例年の舞と奏ス、翌十七日、刻
 子、柳旅所、渡、奉、次、御祭礼供奉の行装あり、新
 夏

煮酒

祭礼ハ三月三日あり

夏月のふ宜しき、是本邦の

煮酒にうは似にたる名目と挙るし、本邦ほんくわありハ、夏日酒かじつしゆの氣味と失
るゝる爲ためふ、煮酒にうしゆの法はふを用ふ、京師きやうしあり是と酒煮しゆにうと称なづく、
此日酒肆このしゆざい親おやと疎とほとをえゝば、す價あたい下くだるゝべ、恣しふ酒しゆとのよ
しひ、是と酒煮しゆにう
の祝いのちといふとぞ、
兼三夏物
煮冷あざやう
の条ニ注ス
煮取あとり

兼三夏物

煮冷

の条ニ注ス

煮取

初

三

分

五月入拘

と部五月雨
の条ニ注す

忍冬花

金銀花○弘景

曰、此草藤生ス冬ふゆと凌しのぐ凋しれず、故ニ忍冬しのふゆと名づ。○時珍

曰木の附く蔓延す、莖微く紫色く節は對て葉と生ず、

葉薺 へちま 葉似く青く、牆毛五、三四月花と變々く長寸

[illegible]

絶
望
を
變
ず
る
子
白
魚
三
日
を
経
て
黄
わ

石を
新田
目下
女金
限色
上并
が気
甚ど

口出 シテ 打 ヒキ 映 ヒキ 寸 ハナ 由 ハナ 金 ハナ 釘 ハナ 花 ハナ 四 ハナ 子 ハナ 今 ハナ 甚 ハナ

鳥の浮巢
大和本草 鴛字巢云好

忍冬
可好
豆
良
上

俗_ニ鳩の字と用ふ万葉以下の古歌に

鳴鳥とて是は水上に浮巢と掛く風を隨てたゞ

毎名抄 祐盛法師曰、鳩の浮巢を云ふは、こゝろの浮巢を、

やまをあらうべしとてあまのついでに海を朝あさへむらむらとある

鳥の巢とて、人の心の中を

古惠
朝

上り、故に其の意を人々に見せしむるは、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

上平 仙翁記 今年湖水

の渡りたるは一隻の舟裏のありともなくさるの望もと

夏江

瓢と去り塩を搦し暑熱の石上を晒乾し六七日の間能く乾きしと磁器に収め用る。鹹水を洗ひ去り切し酒に浸し引飯同上。搦乾飯を糯で用い飯を煮て晒乾し粗く磨り頭末を去り中等のものと取り夏月冷水に浸し饅之。

奥明仙臺道明寺に作る如最も佳く。○常道明寺と云

三夏物 蛇の種類最多し。李ハ本草に云ふ。多識篇金蛇古加新銀蛇赤呂加、水蛇最良、蝦蛇倍良、本草蛇皮蛇殼童子衣。

五月 蛇衣脱 蛇の種類最多し。李ハ本草に云ふ。多識篇金蛇古加新銀蛇赤呂加、水蛇最良、蝦蛇倍良、本草蛇皮蛇殼童子衣。

或ハ大飽 紅藍花 未摘花 同上 紅藍其花紅色。葉ハ藍より故ニ藍

の名あり人家の塙園に種る如冬月熟地の子を布く春

に至る苗と生ズ夏花あり花の下に採葉を以て刺多

し花枝上に出る圓くを米を米りやむき復出づる

に至り止む株中に実と結ぶ白顆小豆の大か知りその花

を曝乾し真紅と赤又胭脂と作す。和訓義解咲花初より開

次第本ハ咲く咲く随く 六月 糸瓜の花 秋部 四月

摘む故に未摘花と云ふ。十五日の揚助東生郡天王寺南大門下土塔塚の前土

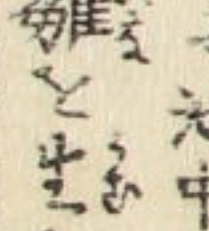
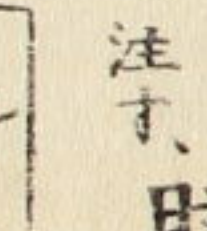
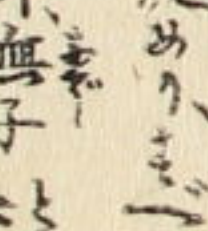
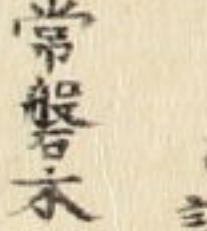
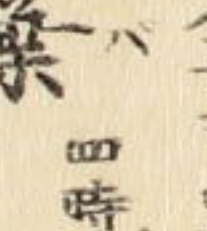
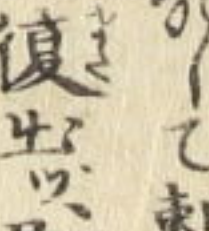
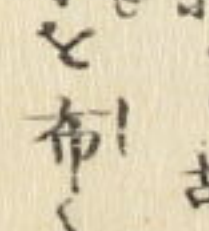
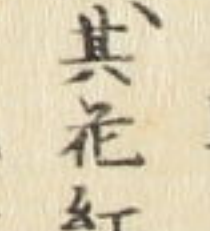
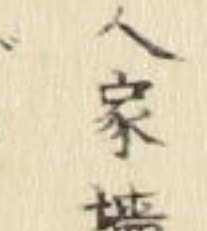
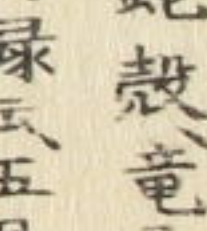
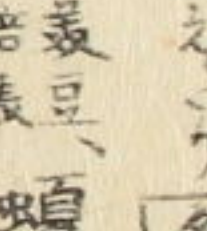
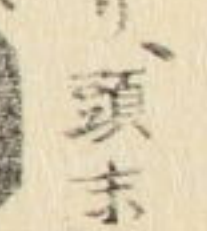
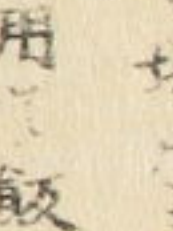
土塔會 塔の宮を穿り神牛頭天王古ハ毎年四月十五日大祭礼と

行ふ今他領も多し大祭礼絶えなく其合に於て天王寺の僧堂

司示人催木土仕神事を行ふ次第四時 常盤木の落葉 四時満

法用仁王経法則舞示す是と土塔會 新葉生じて後古葉の落るを年浪草多く松のとき常盤木と哥

りし松の落葉ハ秋と云ふ松の外の冬木と云ふハ泥めりし松



とらふも、尺二三分落葉す、四五月細き白花とむる子と
結式正四、熟すは紅色、攢り生る、其木の皮を剥て
水に浸し、爛るく、是と流水に漂く皮渣と去る、麴筋
の好し、甚稠粘る人用、鳥雀と粘る、是と糲と云、

心太 和名抄大凝菜、和名古留毛波、俗用、心太二字、云古
古呂布止、〇本州、稻枝、本朝式、凝海藻、閩書

石花菜、海石上生ず、性寒、
夏月二三日煮て凍とす、
ち **四月地主祭**

九日 **庚富記** 文安四年四月九日庚午、清水地主権現祭、
神樂午刻還向き、其後獅子舞す、田樂ホの舞了る、〇
雍州府志、地主古八旅所、白山通五条の北を、今石地蔵の

存る所、祭日暫し神樂と経書堂の前、居是旅所の
義を表す、**清水縁起** 祭、神田村將軍の灵、
弘仁三年四月延鎮奏し、清水寺の鎮守とす、
苔

莖 田園家園多、栽三四月莖を起し、莖肥、中空、
脆し、身を折ぎ、白汁あり、葉毎、莖と抱へ
相重り、又と分つ、四五月黃花とむる、初て徒、野菊
のそ、一花子とむす、**鷓鴣**の子のむる、云、

茶挽草

和漢三才圖會、雀麥、茶挽草、田野、おのつ、生ず、
穂粒と爪の上、載き、旋回す、
茶磨を挽き、依る名とす、
五月重五 義五

月五日故 **粽** 菰粽、角黍、錐粽、菱粽、秤
重五と云、
鮑粽、九子粽、芦粽、笹粽、

鈴粽、飾粽、字彙、粽、投、同、一名、角黍、風土記、端午、
かき、**粽**、驚を烹、筒糰を造る、一名、角黍、菰の葉
を以、粘米、栗、栗と裹、灰を以、煮、熟せ、蓋し、
陰陽包裹、未、散せざるの象と云、
月令廣義 九子

粽、八角黍、唐の時、歲節端午、粽の名甚多、形制も一
あり、**角粽**、**錐粽**、**菱粽**、**筒粽**、**秤錘粽**、或ハ秤錘
粽、ハハ、

索粽、**九子粽**、續春諧記、屈原、五月五日汨羅、お投す、
楚人、こゝと哀、此日、至る、お竹の筒、以、米、貯へ、
水、お投し、祭、漢の建武中、長沙の歟、白昼、一人と云、
自ら、三閭大夫と稱し、回、謂く、曰、祭、こゝと甚、但、
蛟竜、竊、こゝと苦、ひ、今、こゝと惠、お、粽、の葉、以、
こ、其上、と塞、五、絲、の糸、を、以、こゝと縛、こゝと二、物、蛟

夏 **ち**

菴の畏る、所々、今の人糍とつゝ、絲糸及び棟の垂と帯ぶ
 蓋その遺風、**本草**古人菰芦の葉を以て、黍米を以て煮
 る、尖角をもた、揆、桐の葉の心の形を如し、故に揆とい角
 黍とも、近世多く糯米を用ふ、今俗五月五日節物とて
 相おふ、或云、辰原と祭る、為こきと作て、江に投ず、こ
本朝食鑑 飴糍ハ糯米を用ひ、蒸熟し、搗き餅とて
 楕円形とす、外に楕円形とす、薄く、酢の中へ蒸熟し、こ
 出、楕円形とす、剥き、こき、ハ黄白の色なり、飴の色を如
 し、故に名づ、味美し、微く香あり、もて糍の類、市人道
 喜と云者、巧みと造る、故に道喜糍と云、今京師の
 市上、車に此糍を以て、贈送の物とす、○飾糍、かき、
 糍ハ天福本伊勢物語に、かき糍、注、五月五日、糍とい
 ろ、の糸を結ひ、こき、**拾遺集**十八の詞書、さうりち、
 と云、今も大内、ハ五色の糸を飾、糍と云、
 ○今按、伊勢物語、かき糍、とある、本ハ、さうりち糍の
 写誤とつゝ、こき、此段ハ大和物語にも出て、かき糍と云、
 又伊勢物語、大さの糸、かき糍とあり、ハ、此さうりち糍と
 云、名目ハ削て去へ、**鹽菰抄** 糍の形ハ蛇に似せ、巻

是と服、毒虫、**長命縷**、續命縷、辟兵縷、
 と殺す、と表す、五絲縷、朱索

條達、風俗通、五月五日、絲縷を以て、辟兵、
 辟鬼、人、と瘟と病を、一名長命縷、一名辟兵縷、一名五

色縷、一名朱索、初学記、北人端午、ハ難縷を以て、合歡索と
 結び、手の臂に纏ふ、一名條達、又條脱と云、難物と織組、相
 贈遺る、及び日月星辰鳥獸の形、文、金縷、帖画と云、
 献す、○是本邦の系玉、同く、部系玉の条通りと云、

竹酔日、た部、竹植る、**六月 竹生島祭**、
 日の条に止す、十五日、神社、
 生島の神社、ハ半賀御魂神、聖武天皇天平三年辛未、竹生島

の神現形ス、**神社考**、竹生島、ハ江洲の湖中なり、其、巖、石、水、指、室
 珠多、本朝王奇異の其一、傳云、孝灵天皇四年、江洲の地
 漸、湖水始、湛、駿河富士山忽、出、景行天皇十年、湖中、
 竹生島、初、涌、出、昔、行基菩薩、此島、来り、神女現形ス、
 行基、寺と建、辨才天の像と置、**記事**、例祭、六月十
 四日十五日、是、法華会と云、湖上、舟と浮、音楽と奏ス、神
 輿の船湖上、浮ぶ、毎年正月十日、社僧の中、頭人を撰む、

夏、ち

○社僧説曰此祭ハ江州浅井郡の中より、豪富の人と撰り、頭人
 と定む。旧記云、神龜三丙寅年、天照皇太神宮、祭主廣見と
 神勅あり、岩倉山太神宮寺と云額と送り、札所觀音と
 宝嚴寺と云、同年六月十五日、聖武天皇、攝諸兄、房前大日、兩
 勅使と云、蓮花会と修せしめり。今、この寺に
 至り、祭祠絶ず、毎歲頭人兩人と定め、神事と司り、浅井
 郡、惣氏神あり、故、四民共、差定す。往古、近江國中、差定せし
 む、按ふ、この島、殿山、屬、山門、由緒あり、の、是、場、あり、と
 近江一國、預り、と疑へ、此祭ハ、先ッ、六月初日ニ尊天と、
 頭人の家、神幸し奉る。新傳、是、假屋ニ安置し、十四日、迎と
 御旅と称す。此日、島、於、舞臺あり、見、四人、舞之、十五日、新造
 の天女の尊像と、神輿、送、還幸と催し、頭人供奉を、神
 輿と、早崎の一の華表へ立、供物と奉詣の人、施し、とふ、夫、
 島へ渡御、神輿、船と鳥、船と云、金翅鳥と粧ふ、故、名、
 太鼓ふ、難、大船二艘と舳ひ、大竹ふ五色の幣とて、
 幕と張、神輿、船と飾り、頭人夫婦供奉、管絃、船、警固、船、
 大船十艘、潜列、移、島渡り、是、と法華会と云、神事の法会、
 多く蓮花と用ふ、故、名、と云、又三月三日、心經会と修、俗、是

と島、縣、別、記、

茅輪

菅貫 神社考 素盞島

竹生島妙覺院登前記

尊、兒童、し、時

牛頭天と号す、又武尊天神と云、或時、南海の女子と通ひ、日の暮
 め、会、宿と路の傍、借る、二人あり、兄と、藤民將來と云、
 巨且、將來と云、兄ハ貧し、身ハ富り、神宿と巨且、乞ふ、聴ふ、
 宿と、藤民ハ借る、藤民、と許す、粟、箕と坐し、粟、飯と
 献ず、其後八年、神其ハ子と將り、藤民ハ家ハ来り、その
 徳と報せんと欲し、藤民ハ教、茅の輪と作り、其、夜、天
 下疫病大、行り、人民死、との其教とあり、唯、藤民ハ家の
 免、得、是、於、武尊天神告て曰、我ハ是速須
 佐雄能神、今、已後、疫、起、必、藤民將來ハ子孫
 あり、茅の輪と作り、其、災、脱、御湯殿記
 晦日、夜、へ、輪、入、ち、が、や、く、調、入、や、のこと
 麻の葉と長、一尺斗、二、三本、低、つ、持、尤、の、足、
 入、右の足、出る、以上三度、此時の奇、和泉式
 孫、麻の葉と、く、く、く、く、く、く、
 ち、輪、一、と、二、と、三、と、今、中、と、
 上、杉原、く、包、き、き、く、く、七月朔日の朝、荒神河原

夏 ちり

抱竹奴書奴和漢
三才圖會

竹夫人

抱簾俗竹几こゝろ夏月の夜こゝろ抱こゝろ涼を取
劉熙歟名

竹几又竹夫人トモ山谷詩趙子充示竹夫人詩蓋涼

寢竹器イ憇イ臂休膝イ似非夫人之職予爲曰青

奴 雜 詠 拙
和 侶 竹 と 以 る 簞 と 作 る 二 圃 あり、長 十 五 尺

短きもの三四尺圍も又小きものを晝夜卧寝

の時、身^ニ抱て涼とする、名づけく抱簞と称す、

五

廿三日○江洲下坂本_ニ社あり、下坂本_ニ唐

權現、北ハ酒井大明神、例祭五月廿三日、神輿ニ基遊行す。
土人産土神とす、山門悦蔵坊、代々両社の事ヲ預る、両社修
造の爲ハ、因縁あるを以て、
六月、木禽（マキノ）和漢三才菴会（ワカンサンサイアンカイ）

和漢三才圖會

藝州の国主ふ宮やういそ、

縄ななの痕あとの如ごとく徐しゆく熟じやくく半青半紅、味あじひ淡あはく甘

一 微酸く脆く羨あり、俗に云、頻婆果なり、

鳩ハト
鴿カ
の
舌ゼツ

去 ぜろ 零凌記 鸚鵡 ねえ 八人多く養之 うづ 五月五日其古の栄 いさ こと

とあるも、○時珍曰、其舌、人の舌
の如く、剪剔すと、人言を作す、

舌

舌

四月大

神^{その}祭^{まつり} 上^{かみ}卯^う 神社^{じんしゃ} 啓蒙^{きもう} 大神社^{おほいじんしゃ} 大和国^{やまとのくに} 城上^{じやうじやう} 郡^{ぐん} 在^あ 祭^{まつり} 所^{ところ} 一^{いち} 座^ざ 大^{おほ} 己^み 貴^き 命^{のみこと} 公事^{こうじ} 根原^{ねはら} 先^{さき} 旦^{あした} 日^ひ 使^{つか} 令^を 大^{おほ} 原^{はら} 野^の

の如し、此祭ハ冬ハ寅日使^ハら^レ其故ハ夏ハ卯日の時冬ハ夕ふ

祭^る故^に大神^とハ、大三輪^の神^とハ、大物主神^の御事^とハ、三輪^と

本縁ハこの大物主神、活玉依姫とと女のまゝへ、まのふかふかせ、

女は、志ある人ともありき、その女懷妊^{くわいにん}に及びて、父母

さふひつやうむ女をもて、神人の来よりとむ時、亦の

るふくろくし針を付て衣の裾はけしむその糸うと

上亥○四官神社、江州大

三輪山
津の田の言ふあり

夏
ゆるを

元和七年紀伊賴宣卿の勸請、山鉾其外相撲流鏑馬おあゝ又城下の土人太刀と佩さるゝと摺、躍踊をかすゝとや雅賀踊ゝ今日神事必用の食と薬膳と利刀の如く切あゝ一方常の如く味噌と用ひ一方大豆の粉を付く、家、**和清天** 白氏文集四月天氣和且清緑、**和清天** 槐陰合沙堤平又同詩、孟夏清和月、東都同散官、**若葉の花** 貞享式古式、**和清清和** 木若葉ハ夏

草の若葉ハ春とわ、青葉ハ冬と雜とせ、**若葉** ちと或はハ花と若葉の二所、若葉ハ花を信びハ春もつハ夏もいつ、何故か決せぬ、今按ずハ月花ハ風雅二卷の飾あは、**若葉** 新樹 和哥題林抄新、**若葉** 樹ハ四方の梢、**若葉** 青とわ、木ハの色ハ薄とわ、**若葉** 徒然草 如月やうりの、**若葉** 和名抄 雞冠木、**若葉** 其葉岐あゝ、蝦の手ハ似ゝ故、**若葉** 病葉と云、夏山、紅葉の如く赤とわ、**若葉** 綿時、**若葉** 和漢三才圖會 相傳、往昔蚕綿の外ハ穀木と云、衣服とす、是と本綿と云、中古、草綿始と云、本朝桓武の朝、即ち類聚国史、中華ハ宋の才中華先と云、九二百年、**若葉** 此の種と下す、早晩、早と云、ハ十八夜以後、麥苗の際、**若葉** 大底、枝葉花、黃蜀葵、**若葉** 延喜内膳式 五月五日、山科の園、早瓜、**若葉** 棒と進、**若葉** 花根と献、**若葉** 忘草、**若葉** 和漢三才圖會 石專、海藻、和名、**若葉** 俗、和布の字と用、今云、和加米、鹿布、**若葉** 紫苔ハ似ゝ、色青、**若葉** 夏

其葉岐あゝ、蝦の手ハ似ゝ故、**若葉** 病葉と云、夏山、紅葉の如く赤とわ、**若葉** 綿時、**若葉** 和漢三才圖會 相傳、往昔蚕綿の外ハ穀木と云、衣服とす、是と本綿と云、中古、草綿始と云、本朝桓武の朝、即ち類聚国史、中華ハ宋の才中華先と云、九二百年、**若葉** 此の種と下す、早晩、早と云、ハ十八夜以後、麥苗の際、**若葉** 大底、枝葉花、黃蜀葵、**若葉** 延喜内膳式 五月五日、山科の園、早瓜、**若葉** 棒と進、**若葉** 花根と献、**若葉** 忘草、**若葉** 和漢三才圖會 石專、海藻、和名、**若葉** 俗、和布の字と用、今云、和加米、鹿布、**若葉** 紫苔ハ似ゝ、色青、**若葉** 夏

其葉岐あゝ、蝦の手ハ似ゝ故、**若葉** 病葉と云、夏山、紅葉の如く赤とわ、**若葉** 綿時、**若葉** 和漢三才圖會 相傳、往昔蚕綿の外ハ穀木と云、衣服とす、是と本綿と云、中古、草綿始と云、本朝桓武の朝、即ち類聚国史、中華ハ宋の才中華先と云、九二百年、**若葉** 此の種と下す、早晩、早と云、ハ十八夜以後、麥苗の際、**若葉** 大底、枝葉花、黃蜀葵、**若葉** 延喜内膳式 五月五日、山科の園、早瓜、**若葉** 棒と進、**若葉** 花根と献、**若葉** 忘草、**若葉** 和漢三才圖會 石專、海藻、和名、**若葉** 俗、和布の字と用、今云、和加米、鹿布、**若葉** 紫苔ハ似ゝ、色青、**若葉** 夏

其葉岐あゝ、蝦の手ハ似ゝ故、**若葉** 病葉と云、夏山、紅葉の如く赤とわ、**若葉** 綿時、**若葉** 和漢三才圖會 相傳、往昔蚕綿の外ハ穀木と云、衣服とす、是と本綿と云、中古、草綿始と云、本朝桓武の朝、即ち類聚国史、中華ハ宋の才中華先と云、九二百年、**若葉** 此の種と下す、早晩、早と云、ハ十八夜以後、麥苗の際、**若葉** 大底、枝葉花、黃蜀葵、**若葉** 延喜内膳式 五月五日、山科の園、早瓜、**若葉** 棒と進、**若葉** 花根と献、**若葉** 忘草、**若葉** 和漢三才圖會 石專、海藻、和名、**若葉** 俗、和布の字と用、今云、和加米、鹿布、**若葉** 紫苔ハ似ゝ、色青、**若葉** 夏

其葉岐あゝ、蝦の手ハ似ゝ故、**若葉** 病葉と云、夏山、紅葉の如く赤とわ、**若葉** 綿時、**若葉** 和漢三才圖會 相傳、往昔蚕綿の外ハ穀木と云、衣服とす、是と本綿と云、中古、草綿始と云、本朝桓武の朝、即ち類聚国史、中華ハ宋の才中華先と云、九二百年、**若葉** 此の種と下す、早晩、早と云、ハ十八夜以後、麥苗の際、**若葉** 大底、枝葉花、黃蜀葵、**若葉** 延喜内膳式 五月五日、山科の園、早瓜、**若葉** 棒と進、**若葉** 花根と献、**若葉** 忘草、**若葉** 和漢三才圖會 石專、海藻、和名、**若葉** 俗、和布の字と用、今云、和加米、鹿布、**若葉** 紫苔ハ似ゝ、色青、**若葉** 夏

六月 綿花

和漢三才圖會 四月種と下入莖弱

三尖あり、爪の葉の如し、秋入る花と曰く、莖の花の如し、
く小く、紅紫のものあり、実と結ぶ、此の種の下すに早晩
あり、花も又同じ、夏の末に花開くものを、大底
黄罍葵に似る、浅黄色、四月種とく、条見へ



月堅田祭

上巳日、或説、祭の日上の巳、祭る神詳
あり、但、冷海志云、堅田に、柳田の庄

云、又開演も、北と今堅田と、出来島、この地伊豆の三
島の風景に似る故、伊豆権現と勧請す、あれ、伊豆権現の
祭あり、今土人もこれをあつものなり、今土人本居神と
る、天文六酉年九月廿五日、江州観音山の城より、衣川に勧請
せ、天神の社は、四月子の日祭あり、今上巳日祭る所を
神田明神、堅田の城主二代江戸より誕生、故に神田明神と
此所を勧
戒壇堂開帳
花摘、江州比叡山より、
諸、帝王編年記弘仁
十三年六月、参議左大臣藤家業、戒壇堂を建て、
宣言と帶、登山す、傳教喜悅ふ、今、閏六月十一日、殊

勅詔を下りて、創り、戒壇と築、十四年四月十四日、修禪和尚
義真、始、受戒と行ふ、
常、叡山に登る、
の社に詣り、花摘と、花堂を作り、小釈迦の銅像と
安置す、此社、傳教大師の御母堂、妙徳婦人と祭る、
人存生の時、大師御對面の為、此処に登山し、今日女人の
祭詣とく、
賀茂祭
葵祭、御形日、
此遺意とく、
未、先、上卿陣、
日、使、近衛の中、
桂の髪とく、
て、
賀茂の別雷二の神祭、
身命の如し、
丹塗の夫、
屋根、
あ、
の児、

夏
か

午の日之別祭とあるべし河海秋加茂祭の前日垂跡の石上に於く

神事之御形と号ス今本宮の北一町をうふ在く御旅所之道の

西三岡、是と御生所の館と云、申冬忌、御取、

祭の日
飯殿いひどの所ところに建たて
神かみ祭まつり
神かみと寸すん

是加茂祭と云く。○或説云く。生とて祭と云う。云ハ加茂祭のことと云。

如茂ニよりて無名の祭と夏ニも故ニ祭ニ加茂連ニ奇ニ付ニくニ嫌ニ

あう 貞享式
そとや 四季ふくふくものハ祭と鷹とやの類るゐさきじハ

ついでに其季の名目とて、四季の差別とせり、なりとせり。

祭の一字も御祭ごさいとて秋あり御祭ごさいとて冬あり

く諸社の臨時えんりの如き名目ありとす。又、きんぎょきんぎょと云ふ。

祭の用とく々、貴賤さうり、寒暑さうり、礼さうり、和さうり

び、節供、節日の式々うも、俳諧ニ多用多きハ、是らハ一世の衆議

お及ぶず、其時其々の季を尋て、決して四季を用ふ、
中
畧

祭より鷹と云類ハ一句を奪てすといふハ夏と冬との名

目めく今式とも其通く。〇忌す
荻技折 卯月の忌す

すゝ八、賀茂の神事ゆゑ、竹まゝこゝろ、春の歸ることを

心ふくみ、神事をも人、身をも、松竹をも、こめ

〇 榊取
 後拾遺
 榊

夏
カ

夏
方

花の容婢みづかみ約ひかより故ゆゑふ和
俗良好草と名づい
垣見草
外花の異名蔵王時
鳥とりここみみここああななりりか

和漢三才志会 扇膏木 高廿二三
丈葉ハ海石櫛の葉の似て狭く

小、細、鋸齒、面滑、四月小白花、細子
と結ひ、旅、ハ九月赤く熟す、其木最も堅く、羽骨と
す、小堪、
故に名づ、
柳の花
注、秋の加部、
洗濯や衣、
薄之、
猿蓑集

々々花
 大之色淡々其花実とも白菖あやめに似て肥大

あり、紫色と正し。近ごろ浅紅なるもの白色あるものと生す。ふ
 変種し、五月と盛とす。又四時中花と咲くものと、参勃ハツ橋の
 産名と得る。○負う花蔵玉 多うその多さ中にも、
 花の袖やうと紫ゆるり。○負花仙覚万葉抄 か花ハ杜若
 只鳥の啼くと咲バウを花と云。万葉ニ負花とあり。ハツ橋の
 とを定めざるに、姉く仙覚の説にきく、載之。○か

花ハナ 蔓マツ 鐵テツ 線セン 之ノ 類ルイ 花ハナ 八ハチ
纏マツル 枝エ 壯サウ 丹タン 蔓マツ 艸ソウ 葉エフ 莖セイ 鐵テツ 線セン 之ノ 類ルイ 花ハナ 八ハチ
單イツ 葉エフ 蒼ソウ 碧ヘキ 色シキ 其ソノ 形カタチ 風フウ 車クルマ 似ニ 似ニ 又マタ 自ミヅカ

色あゝ三四月
花とむらゝく
かんこ鳥
和漢三才会 加豆古字鳥
正字未詳、疑らゝは是鄭公

和漢三才圖會
加豆古字鳥
正字未詳疑
是郭公

あゝん、状ハ杜鵑及び虫食鳥に似て、微赤色と帯ひ、腹白くして黒斑あり、脚の指も亦ニツ前ニツ後ニ、偽く杜鵑と云く、賣之、仲夏の後声あり、秋後色とともひ、其色大なり、
田亮、加豆古宇と云ふことし、毎ニ山林にもてゝ人家に近づく、○真淵翁ハ俗ニ云かんて鳥ハ、喚子鳥の字音ハ、唱へ誤るゝものなりといふなり、
天蟲、虫、孟夏

和漢三才圖會 繭の作らんと

すゝゝも、葭簾を用ゝ棚とす、こゝに放つふ業と食む
身白色ニ透明とを擇取く、櫛の中は投た、先づ
稍ある枯菁草と用く、縦さふ内く、蚕の寓居と
数千の蚕をくゝと作て蟄る、○原蚕 周礼註云、
原、再也。○一名晚蚕、こゝに二番蚕、春部よるをこゝに

○蚕簿、之

蟲子

蠶頌赤經 蟹類、今人以て食
品とす、佳味、
和漢三才圖會

擁鈕蟹、江海生、大なるもの味美、塩水に以て煮熱
する時、純赤色に變へ、甲と脱し、白肉を取り、食ふ、其黃

もその最甘義、山脇和易溪澗に有之、十月丑日毎、必
群生、土人其日と使ひ多く捕ふ、亦一異、大和本草、蝦魁

（嶺表録云、前、兩脚大なり、人の指の如し、長尺余、上、世刺
あり、鉗く、手と破、觸る、
和名抄、擁鈕、和名、加散

米、多識篇、蛸

兼三夏物

翡翠

時珍曰、大、燕の
如く、啄失りて長

く、足、紅、く、短、背の色、翠色、碧と帶ふ、翅、毛、黒色
青と揚る、女人の首物と飾る、
和漢三才圖會、鳩、俗云

比、世、形、小、池、川、に、在、く、更、と、捕、る、翡翠、俗云、比、形、大
く、山、溪、に、在、く、魚、と、捕、世、比、と、ハ、微、の、假、名、相、通、ず、
其、穴、小、窠、つ、る、を、横、入、こ、一、尺、も、う、其、中、に、雞、す、
庖、厨、本

艸、鳩、和、名、曾、比、○、此、鳥、魚、と、害、す、故、鳩、天、狗、水、狗、魚
虎、魚、師、お、
多識篇、蟹、蟹、如、仁、比、
和漢三才圖會

の、名、あ、る、
蟹、蟹、
三代史録、元慶三

年正月三日癸酉、撰津國蟹骨、陸奥國

蚊

蚊、社、事、文

類聚

鹿脂、以て、贅、と、く、御膳、奉、る、と、あ、る、
後集、秦、六、を、納、と、い、
楚、二、を、と、蚊、と、云、或、云、蚊、ハ、文、也、

人の肌、膚、ハ、文、ま、る、の、義、也、○、時、珍、曰、木、の、葉、及、び、爛、灰、の、中、
生、じ、子、と、水、中、の、産、み、子、子、虫、と、多、く、仍、く、變、じ、て、蚊、と

あ、五元集

蚊、柱、ハ、夢、の、浮、橋、か、る、
其、角

蚊遣火

蚊、火、と、云、月、令、廣、義、蚊、蟹、の、骨、を、煙、に、焼、
け、バ、蚊、を、お、さ、ら、死、す、次、ハ、鰓、鱧、の、骨、次、水、中

諸、魚、の、骨、と、煙、に、焼、け、バ、蚊、と、祛、く、
又、浮、萍、を、活、し、
同、く、焼、く、○、相、い、追、い、ら、う、と、遣、と、鬼、や、い、同、く、い、や

詞、に、
蚊、や、ら、う、と、い、う、
蝸牛

紀、事、此、月、の、五、
月、至、く、霖、雨

あ、る、
蝸牛、多、く、生、じ、或、ハ、床、に、登、り、又、壁、に、黏、り、高、く、登、
る、
其、涎、隨、く、盡、き、バ、隨、て、落、り、其、貝、あ、り、人、と、見、こ、
と、ハ、蝸、縮、ス、兒、童、聚、り、て、出、出、虫、と、い、ふ、
出、さ、る、と、ハ、金、と、打

破、ら、む、と、い、
此、虫、の、貝、と、俗、金、と、稱、ス、
夫、木、牛、の、子、ハ、
ふ、
蝸牛、角、あ、る、と、身、と、別、た、の、と、
寂、蓮、五元集、丈

七、
ふ、
其、庭、の、こ、つ、ず、
其、角、○、丈、七、ハ、髻、結、師、あ、る、

蝙蝠 時珍曰蝙蝠有人呼之仙鼠其形氣似鼠而色薄其肉翅如翼及尾連合二一の節也

蚊帳 夏生之蚊日伏一夜飛蚊故帳又蚊帳

芍藥 本草食鑑久葱春葱の二種也春葱ハ初生もの針の如く俗

醋味噌 酢味噌和すといふ

五月 賀茂の足

摘 其外武家願ひある人も亦假く其騎者

上賀茂の氏人其の北人と擇び各禄をり又端午

小騎ものもの壯年北人といひ各禄をり又馬負

北足騎者馬帽子淨衣を着す社司各持の外坐先一人

毎馬馬のり馳走その速速と考ふ執筆者と是とある

是後馬の速速同く是バ則二人をく衆りむ故ふ

足揃といふ荒手結馬場本來樹ありこの内於

く勝負と決せしむ拾見の鐘と撃ち執筆者と是と記

この樹と勝負の木馬場の本勝負の木南に櫻と是と

出馬の本も入其次一株を是と三鞭木と称す騎人

於て互声と揚げ鞭と挙ぐ見物の良賤群集く埒の外

並艾虎艾人 蒲人 荆楚歲時記艾虎

居 天師を畫艾といく虎の形とて

或ハ縁と剪て小虎を以て艾の葉小帖て内人争て是と

相戴く○同上五月五日人々百草と踏艾と採人を作

る戸上懸く以て毒氣と攘ふの蒲人金門記午日菖蒲

と刻人或ハ葫蘆諸物をつくり并戴く以て邪と辟く

五月廿日の祭、兵部を用ふ民家も又あり、藤森社、山側
紀伊郡、今人親王の祠あり、矢政所と称す、是く蓋其の蒙
古の蒙来りて、因て此の名を、**擲餅**、擲餅、五日米の粉をこ

藤森社祭の条見合す、**擲餅**、五日米の粉をこ
餅をこみ、中か餡と入る、合する、編笠の形の如く、擲餅
葉と以てつゝ、蒸し、餅をこみ、中か餡と入る、合する、
なり、**賀茂競馬**、五日、詞林采葉、或記云、祭初の日、

天皇の御宇、天下世舉、風吹雨零時、ト部伊吉若日
子命、勅し、トハ、乃チトハ、奏す、賀茂の神の
崇へ、仍く四月吉日と云ふ、馬鈴とつけ、人猪影と蒙
りて、駢馳して以て祭祀を、能禱祀せむ、因て五穀成
就天下豊年と、衆馬を、始り、**注進略記**、五月廿日の競

馬ハ七十二代堀川院、寛治七年、五穀成就天下泰平のため、
も、十番九足の馬料と寄らる、例年是と行り、
紀事、この日、音楽あり、午の時競馬あり、近衛院康治年中
始て行ふ、あつた、其始ハ臨時の執行、後世五月廿日、
あり、あや古へ諸社毎多く競馬を、今漸く絶く存する

処の稀に當社競馬の料あり、故に、今に至りて断絶せり、
今日、衆の、人、人、各冠の、纓と、纓と、付け、厄の方、
赤袍と着、右の方ハ黒袍と着、各、南の一の馬、外ハ
於て、馬、乗、馬場、の、馬場、本、至、先、一、番
と、左、右、一、正、毎、馳、是、と、空、走、と、之、の、後、各、
ら、馳、速、と、争、い、勝負と決す、古、い、ゆ、真、子、結
あり、文昌雅録、軍中、端午、と、以、

馬と走り、と、踏、抑、と、**帷子**、和漢三才圖會
用の衣、帷子と名づ、端午と名づ、看る、浅黄色を用ふ、
七夕ハ、開、ハ、帷子と用ふ、近代ハ、幾人、通例、帷
和名、鹿子百合、花、白、花、紫、あり、其、花、黄、白、開、

本、鹿子百合、紫、点、あり、ゆ、鹿子百合、と、名、
河原撫子、唐撫子、あ、部、瞿麥、**洋菜**、大、

葉ハ、厚く、光を、茎、水、上、花、
水面、根、大、夏、月、黄、花、と、秋、の、末、迄、一、茎、一、花
と、賞、**酢漿草花**、蘇、頌、經、酸、醬、草、嫩、時、小

す、地、、**酢漿草花**、児、喜、食、之、〇、時、珍、曰、一、名
夏、ね

上難波御稜

此社ハ生土の北より祭

神比賣古曾の神、本名、下照姫命、大國主命女
天稚彥命妻、始く天の磐

船のりて地を降るるを、高津其船初と、磐船大明神と号す

仁德帝都より近し高津宮と号し、當社神傳紛

失ス、當社を仁徳天皇の宮と云ふハ非ク、社本津川に在リ

襖を
買成、同じ
晦日 **紀事** 六月晦日の夜上賀茂

修す、
カ一方、
の神事、音あり、
被と修す、
地下

各茅の論と脱出ス、又枯麻の條と以テ、木偶人と作り、是を

川水ニ撒入、今日六月の能、丹波矢田太夫とつとむ。

御手代會と云、社司眞菜瓜十ヶ酒錫一雙、樂屋ニカ

とて、始る是旧例にこの能一座役者七人うつく其趣を

つむ故世七人猿くま、
神事次第 六月廿九日 小月廿八日

徳手代会 兼日 仮幄と儲、夜遊 神前においで 乱舞、中古

猿木女田示木の風流五〇今宵名越の神事

社司神人のくさきと被除一菅貫の論に入るを

唐崎參晦日淡海志唐崎大明神八女別當三大宮初

願の地ミ **紀事** 相傳ふ此神日吉の末社

社家樹下生源寺の祖神之説是佳吉明神より天智天

皇の御宇六月、祓と修禊、勉々今日、恭詣平日の千度、あ

形代

夏
か

狀日本紀 人形ハ所謂素盞烏尊の濫觴手足の爪と拔其罪

を贖ふ身の代り也、神祇式 大被御贖物鐵人形二枚、

○形代ハ人形、撫物と云ハ人形と撫、吾身ふく、

の災殃と移、流と云ハ贖物と六罪と贖ふとのふ、

則人形、川社、部夏神、雷鳴陣、西宮抄六月雷

度以上、大將以下、帶弓、箭、候、御前、孫、庇、額、間、左

右、兵衛、立、南、庭、敷、雷、鳴、御座、鳴、盛、時、分、陣、遣、后

殿、外、衛、督、佐、候、殿、上、者、風、薰、唐太宗詩薰風

帶、弓、箭、簾、中、候、解、陣、自、南、來、殿、閣、生

微涼、言、氏、春秋、東、掛、香、薰、衣、香、礼、記、内、則、衿、邊

南、之、風、曰、薰、風、皆、佩、容、臭、註

容、臭、ハ、香、物、也、形、容、の、飾、と、助、為、故、容、臭、と、云、纓、と、以、て、こ

ま、と、佩、ぶ、後、世、の、香、囊、即、ち、其、遺、制、源、氏、梅、枝、く、の、と、う

の、つ、す、が、む、る、ハ、又、百、歩、香、と、云、方、あ、る、一、花、鳥、余、情

百、歩、の、方、と、云、ハ、九、香、氣、の、遠、く、聞、ゆ、と、り、て、百、歩、と、云、ハ、

○薰、衣、香、一、名、黒、方、と、云、薰、衣、香、ハ、た、と、の、方、より、出、る、

あ、る、一、俗、言、曰、衣、袋、と、云、其、方、數、種、あり、紀、事、五、月、禁、裡、より

句、袋、と、諸、家、あり、是、夏、日、汗、穢、の、臭、氣、と、除、ん、が、為、に、羅、列、所

志、懸、香、ハ、香、劑、各、廉、抹、り、と、調、合、各、輕、重、多、少、の、謂、也、

と、云、と、淡、合、と、云、絹、代、盛、り、帯、川、狩、紀、事、此、月、賀、彦

の、兩、角、緒、と、着、て、衣、の、領、に、繫、川、高、野、川、八、瀬

川、嵯、峨、大、井、川、梅、津、桂、川、吉、祥、院、村、鳥、羽、淀、川、宇、治、川、所、

あり、良、賤、川、狩、も、押、細、或、ハ、扇、細、と、云、執、之、或、ハ、蓑、と、設

や、と、夜、入、く、炬、と、燃、し、魚、と、驚、り、く、執、之、是、と、夜、振、と、云、

或、ハ、鵲、と、放、く、執、之、是、と、鵲、川、と、云、と、云、川、狩、あり、と、云、

射、干、時、珍、曰、射、干、其、葉、最、生、横、鋪、く、一、面、鳥、の、翅

射、干、春、生、苗、の、高、二、三、人、葉、垂、垂、み、似、く、狭、く、長、く、横、み

張、と、翅、羽、の、形、の、と、云、葉、中、茎、と、抽、く、萱、草、に、似、て、強、く

硬、一、六、月、花、と、云、く、黄、紅、色、辦、上、細、文、あり、干、瓢、剥、

秋、実、と、結、び、房、と、云、中、子、黒、色、根、髭、多、し、干、瓢、剥、

新、干、瓢、和、漢、三、才、圖、會、乾、瓢、お、用、の、中、の、瓢、と、云、横、み、切

連、ぬ、と、云、一、二、丈、紙、紐、の、と、云、架、あ、り、く、晒、乾、す、眼、皮

と、云、雨、に、連、ふ、と、云、色、と、変、じ、く、佳、あ、る、

葉、剪羅より厚くして、円くばみ尖る。六七月花をむく、剪
羅花に似たり。刻齒浅く、其色肉赤色。俗説云、達磨大師九年
面壁の時、眠らざらんことを欲し、自ら上下の眶と剪入り、まこと
棄て地より此草を生ず、其花肉赤色。
以爲らく眶に似たりとす。因て眼皮と名く。
楮花
紙漣草

紙漣草

時珍曰楮^も、杼^も作^る、其皮績^ぎて紵^とす^るの故^も、按^ニ許慎說文曰楮穀^ハ乃^チ二種^ニ、た^ニ雌雄^トと糸^ズも[、]つ^ニ雄^ハ皮班^ウく[、]葉^ハ桮^アり[、]三月花^トと^ゞく[、]柳花^のと^ゞく[、]実^トと結^ブか^ズ、雌^ハ皮白^シて葉桮^又あり[、]碎^ツ花^とと^ゞく[、]実^トと結^ブ揚梅^のと^ゞく[、]南人皮^と剥^ギ持^ツ煮^ク紙^ト作^又緝^練く[、]布^トす[、]堅^クず[、]朽^ヤう[、]和漢三才圖會^{楮皮今多く紙造}布^ト織^ル木綿^と称^スす[、]○楮^ハ時珍^ノ說^の如^く、三月花^{あり}六月の說^とと^ゞり[、]故^ニ雜^ニ於^ニ花^トと^ゞり[、]楮^トバと^ゞり[、]季^とす[、]と^ゞり[、]さ^とり[、]紙^ハ常^ニ漉^ク季^とと^ゞり[、]殊^ホふ夏^漉ハ紙臭^氣あり[、]下品^ニ、楮^も種^類あり[、]大和本州^ハ山楮^と、一名ガシ^ヒ、又山カゴ^とと^ゞ、其木^も皮^も摺^ミ似^タり[、]葉^ハも[、]似^タり[、]四月^ハ葉^と生^ト、枝長^と高數尺^ハ過^ハず[、]深山^ハ中^ニ

花はもとの花に似て、黄く、夏の末に咲く、その皮
を剥て、楮の如く煮て紙を漉くと、以之夏とす。
蒲の穂

和漢三才圖會
香蒲かうぶの花の状よう頗なほ銚やうに似にたり故ゆゑに蒲銚かうぶやうと

是香蒲の穂なり
 芎うぐい
 扣名批うぐい芎、和名加良毎之
 ○あ部麻の糸ニ朱如
 韓うぐい

瓜うり
甜瓜あまうり似る大く、皮を剥き、あけて
味芳し、通俗志に、熟瓜と訓ず。
よ
四月

上
四月

浴佛とうぶつ
あ部、仏生会
の条ニ出づ、
 吉田よしか祭まつり
中子
 廿一社註式或人曰
 六十六代一條院永

延元年十一月廿五日申、今年始々祭礼、誓願よりて、公家の御沙汰と爲り、**江次第**四月申子、十月申、裏昏云、吉田祭

永延元年始之、山蔭中納言一家こゝを祭るべし、○吉田乃春日ハ、中納言山蔭卿の建立く、祭日、幣帛使、内侍の使お立ち、

倭舞わまをくち、江
次方ホト委し、
餘花よゝ
題林秘し 余花ハ春はるをちて独
咲ることあるも、山深やまふかをちて

餘花

夏の来るを待ちぬる草
さんざん
ようひ草
牡丹の一名に名義未詳
夜白艸の畧言や、夜白

よるひ草

牡丹の一名は名義未詳
夜白艸の畧言はや、
夜白

碧暮六深黃夜八粉白香艷各異之帝曰

やうくも 詞むんよ ちろのち 花さくらん 閑院大目

芦原雀、葭割

の条にていふごとく

五月蓬萊月

歲時記 端午小菖艾を刻ミ小人子こなご或ハ葫蘆こりのこころ

つゝとて、こまと帯をハ邪と辟に
荆楚歲時記 五月五日

いまだ鳴る時、父の人の形が似るものと采^とを攬^とてこれ

と反又病を灸す、甚驗あり、是らの呪より、屋の擔とふを

山ノ邊
 の
 ついでに
 乙日
 當山の邊
 まえが
 會

六月 吉野の蛙飛

也と云ふより、毎年蓮花を蔵王権現へ奉るゝ、この花と管

直ちやう表ひょうと云ふ、九く日の早はや且かつ小せう神かみ豊ゆたかと昇のぼるるて、山やま中なかつと持も

[illegible]

あつてゐる在家のまゝ子供を養ふ負ふ

と渡す、夜ふく、當山の僧徒藏王堂の前より行法あり。

其刻下づゝのふ、蛙の形を作らせ堂の後に入ちくそ

形典ニ蝦蟇カマツカのどくし行法をもちてハ僧四人拵扇カマツカ

先の蛙とよみけバ、堂後より飛出、四人の僧の膝とよ

めづる飛ぶ、是と強く祈り責ふ、とも父亦其の如く、堂内

冬、乃置役所、其後、坂下町にて

節節

堂外へ并生し湯水をかきむす
獲生スト云

晦日 公事根源ト部竹の郎と庭中席の上におく、節折の

婦、竹をとり参り、御ふけよりえりて、疾きの寸法をと

果て官主よりあてがせて、御後とつとむる、あつた

みづゝとて二度あり、二度あり録と云ふこと共生

の即ち舟の寸法を考へ、其屋を二間と爲し、

口禱の言はせしむる其禮をいふはたよきなりと

節折の節ハ竹のよく和名扱西節問云作○是即ち荒和

の御贖
て
胃
とが
買
二年
社説
江
初犬

物
大
四月
多賀
郡、多賀の大

八甲葬諸尊本地無量壽仏鎮座年整詳事列祭

月二、午日、祭祀當日、神輿本宮より其の方一里なる所へ來りて、

一、夫神宮、衣美不宮、見方一里、之界、

木の力富所 源和良奉行 裴鑑士 子祖興三 延祐宣四

子三人しん隨身しん六人りく神主しん三人さん馬上ばじやう其外そのほか氏子しし村々むらむら種々の造

花を生す凡六十本分り、遼物八年、思ふ所をいひて定

ふ、神輿三基渡御坤の方、賓臺の社まで、大社の御使と

夏
九

夏
た

雜談抄

この頭久と定るハ正月三日

よう、氏子の中家富のものと撰う、夜に入ぐ神慮といふ
 ひて定む、其頃ある家子神官棚を立る、其頭入神供味
 幾許とを捧ぐ、祭の日四位に準て、衣冠と着し、社々
 へ参詣、一族一門風流
 と尽して、さうふて、
 當麻祭
 上申○大和国葛
 下郡、當麻

當麻奈

上申○大和国葛
俗冬三
下郡當麻

都比古社二座、曆子王子命、比賣命、
公事根源、大和国三侍る社、午日使、
龍田祭、
黄瀬いづせ いふ部

龍田祭

しき
いふて
貴瀬

祭の祭子

鷹の埒入

和漢三才圖會 四月羽毛と易ん
すゝゝゝ 韋絙わいを解去とく鳥屋や

の内を放つ。餌食意を任す。日と逐く脱落く。新毛の生どく。七月中旬舊のく。〇斤鳥屋年初。兩斤鵲蔵

雁鳥百首抄 四月八日 鷹と鳥屋へ入る毛をむくさるる分

此時羽虫の菜を飼ふ、又餌をも食ふ是と云ふ小倉
と云ふ或ハ鳥屋踏、鳥屋ごとう、鳥屋鷹、毛と云ふ鷹鳥
をも夏へ又むら山、と云ふ板あぶ、皆此時のうへと云ふ、

夏も了し 同三百首抄 鳥屋へ入いりて、動氣の葉と羽虫の

其水取て置てとやうあうて紙をひいて置て後お用の

時、ふたつてつゝ、竹のとういふ溜り水も同く、身も
小壺の水と云ひむろ山と云ひ同敷、むろ鳥屋と云ひむろ

下行水と云、○とろ板、同抄、鳥屋の内み水と
流し、古き釣を洗ひ、あづかんためなり、
盧たちばな摘ちぎ

盧橘

日本紀 聖仁帝九十年の春、田道間守（うぢまもり）が命（いのち）を、常世（とこよ）の国へつり、非時の香果（かぐみ）と求（もと）ひ、今橘（いまたちばな）と云ふ是に、同九十九年、春

非時の香果ハ竿ハ縲^{ハル}と得て還来^{ユク}。本草樹の高ニ丈
余、其葉兩頭ニ尖^{トギ}リ、緑色光面、四月小花とむく、色白。

甚香り。古今五月やうもきくらむ外のうでわがひびきの
人の袖の香をもふ。○古く賞まゝとらふ橘其種詳し。
す、原大を吾、尤並子。

去年の實の、今年花より追落す。黄熟

夏
た

玉卷芭蕉 猶春のた部、橘の条併せしむる

玉卷芭蕉 時珍曰蕉葉と落す一葉舒る一葉枯る故ふる蕉と云○初夏中心

新葉と生トくつて死する是と卷葉 と云玉とく芭蕉と称するものハ是を

時珍曰筍俗筍作ハ非竹筍と筍と同性滑利多食 人ト浮せむ凡竹筍ハ淡竹ト上ト苦竹次之紀事

几筵ハ赤猪甚好食故ニ夜人ト追リハ 和名抄筍加無奈源氏横笛奏たうか

杜鵑と云万葉 橘の林と云む 和漢三才圖會按小青蓼二三月ハ

あどやと云声 と云めん大は

五月端午 五月五日端午の節端午初ハ古ハ

五日の謂 珊瑚釣詩話端五の号重九ノ同ハ後世五ノ

字と云く午と云ハ誤なり 風土記仲夏の五日と端午ト云

竹植日 竹酔日 晋書五月十三日竹酔日手亦竹迷

竹と種 ハ種と云ハ根より上二節発するものを

五月十三日 雨雲や竹 醉日の人おほめ其角

田植 田植歌 早苗取

若苗 紀事 凡五月の尾より六月の首至る苗種生長 玉苗民間や苗代と云ふを植んく先こまを抜を

早苗取と云農民男女混雜 再ハ苗と挿む是ハ田

植と云女子苗と種るものと云ふと云各音と揚と云

是ハ田哥と云或ハ兒童太鼓と云く 勸む凡苗と

種るハ半夏生の前より○若苗ハ 長ぜりといふハ

玉苗ハ王ハ称美詞、小山田ハ字ヲ玉苗植
てり、とめがこすめきそむつ、の、**袂百合** 和漢三才

百合花正白葩、大なり、上向ふ、或ハ横ふ、最可愛なり、
深山溪谷の間、生る、得る、種、下りて、つ

一株、袂ハ入る、種、上る、故
ハ袂百合と名づ、珍重す、**六月 鷹鳥習**

学ふ 月令 季夏鷹乃學習、注、學習、
雛のちを、飛ぶを習ふ、**滝殿** 泉殿

の条、**竹皮脱** 本神集解 時珍曰、土中苞華、各時を以て
出、旬日、籜を落、竹とある、**和名** 秋

籜 和名 箬乃宇波加波、**田草取** 本朝食鑑 種、後、二日
前後、田の雜草と除、

去、以て其根と固くす、發、田草と除、と、再、除、
の、芳、ハ、夏、秋、至、迄、三度、田間の、芳、取、是、と、一番、

二番、三番、**簞** 和漢三才 簞ハ竹、席、竹、以て、帝、す、
和漢三才、金、簞ハ竹、筵、暑、用、

鋪 和漢三才 簞ハ竹、筵、暑、用、
之、**抱簞** 和漢三才 簞ハ竹、筵、暑、用、
紅の納涼 和漢三才 簞ハ竹、筵、暑、用、

四月 鷹爪 和漢三才 金、列、株、の、樹、高、丈、ハ、稍
小、細、氣、條、と、生、緑、色、畧、是、葉、の、葉、ハ、

似、ハ、其、葉、細、小、ハ、四月、黄、花、を、發、ハ、状、微、録、豆、の、花、ハ
似、ハ、繁、葉、と、結、ぶ、と、似、ハ、録、豆、ハ、似、ハ、**大和本** 二種、

云、一種、木、の、属、是、と、鷹、爪、ハ、一種、草、の、属、と、云、
陶器 花、浅、黄、色、未、鋭、ハ、鷹、の、爪、ハ、似、ハ、ハ、

五月 天蟲豆 和漢三才 金、時、珍、曰、豆、莢、の、状、老、蚕、の、如、
ハ、故、ハ、名、づ、王、禎、農、書、

謂、ハ、其、蚕、時、始、ハ、熟、ハ、故、ハ、名、づ、ハ、月、種、と、下、す、苗、葉、と、生、
食、ハ、ハ、方、ハ、豆、中、空、ハ、ハ、葉、の、状、匙、の、頭、の、如、ハ、二、月、花

と、似、ハ、ハ、蛾、の、形、の、如、ハ、紫、白、色、角、と、結、ハ、連、綴、ハ、大豆、の
如、ハ、頗、ハ、蚕、の、形、ハ、似、ハ、**和漢三才 金、其、莢、上、向、ハ、故、ハ、空**

豆、ハ、ハ、嫩、ハ、莢、豆、と、取、ハ、食、ハ、五、月、熟、ハ、ハ、俗、ハ、この、熟、ハ、
ハ、ハ、取、ハ、ハ、**六月 相国寺懺法** 十七日 紀事 六

日、洛、の、相、国、寺、閣、ハ、ハ、ハ、懺、法、と、修、す、世、閣、と、懺、法
所、ハ、ハ、松、風、の、鉢、ハ、小、狐、の、鉢、當、寺、の、珍、宝、ハ、是、古、ハ、佐、ハ、木、氏

寄、附、す、所、ハ、ハ、ハ、寺、中、ハ、定、家、卿、の、墓、ハ、ハ、但、禅、宗、也、
夏、
れ、そ、つ

近江国坂田郡、筑戸の庄筑
戸社、祭祀、四月朔日、或ハ

初午日
神社啓蒙
祭所御食津神文德実録曰仁寿

年三月甲戌、江國筑戸神ニ從五位下と授く。按、筑戸の庄ハ

大膳職の御厨の地也故に當職祭所の神を以て此地に祀る

蓋この神ハ稻食と掌るに依り里女婚をあすとしてハ祭礼

不必釜鍋を戴く神ニ奉ず不幸なり少壯の間ニ嫁と

あるをハぢひをえすて改て嫁
再ハ嫁す者ハ

二枚と用ひ三つは嫁うものハ三枚と用ひし神幸の後ふ候

すも、中世業平の花詞より、里婦笑顔を鑑み、

教牧と重々艷態の故の爲に固小芦胡まへて

俊頼曰近江国了まの明神と申おもう守其神の徳

誓みく女の男もも教ふまひく錦とくひてみ奈

の日本へは男おやきと云ふ人からいふが、てふ奉

とあるを、其のおくでやむをいふは、
燕の子

名天川録
王孫、海西、川谷

王孫花
 各處丹金 三子ノ湯西川ノ
 及び汝南の城郭の垣下生

○每膽曰王孫ハシ和名ナニノミコトハシ八姓昔本朝タマカサキ明ら

けい、今識いましの如ごとく惜哉やいふ特とくに金毒きんどくの咄はなみ、療病りょうびやうの

功最大之今本邦の里俗王孫ウシムコ爲三良物ミタラモノ律リツ

花と稱するもの只証とちぎし、
無三事物 津波

頁
和漢三才圖會
師の小あしもの、五六寸のときと津波に

と名づゝ、西国よりハ和加奈と号、九月尺許あるものを

白と名く、十月二尺ふ近きものを
敷と名く、江東ふも伊太

太と称す、仲冬長三四尺なりとの、卿と名づる

毛吹艸 和名吉野のつばき 鮎八曲物 入蒸

金并魚 手を付る其形釣瓶の如、故に呼ぶ

鮎と鮎とと取とく鮎と、この曲うたをふ入いれく、吉野川の水みづ中

沈み置く熟する期をく出すを急ふ

月夜スラ 薩州府志 飯ずの一名と月夜と云六条家

製之。異名を月夜と云ふ其飯の精白と云ふ

五月
 徽雨、
 蓬粟花穴
 五月
 過

雨の余に漣

花
貞徳曰、一花は紅く赤き帷子の^{こゝろ}に^は八雲

大進物利傳抄 往御門院寛正六年八月將軍慈

身
一

院殿犬追物見物、射手、将衣、日記云、紅入、
辻の花の白帷子、三々、紅、深、拘、
六月

月次祭 十日 公事根源、六月、二年、一度、諸
社、御幣を奉らせり、弘仁年中、

始、**津島祭** 十四日、十五日、牛久天王の祭、尾張国海
部郡、門間の庄、藤波の里、社家傳習

記、欽明天皇元年、宗、祭、天王、始め、西海の對馬
降、後、尾張の海部に移、仍、其旧地の名を表、
津島と号す、嵯峨天皇の御宇、其初、立、始、初、八、柏
森あり、後、居森の地に移、更、初、と今の地に移す、
記、當社夏祭、この神島、鎮座の後、神民の夏日、堪、
と暗、あ、い、避暑の為、宵祭、より、一、論、
の笛、別調と神製、一、この樂の一成と車
樂舞、津島笛と喚初、世、車樂の説、臺尻大隅
と、この、十一、黨の武士、計策と、以、討取、
起、一、社説、否、前説と用、六月
二日、試、あり、八日、町毎の車屋、調、十三日、江口、

お、暗、の試、十四日の宵祭、十五日の朝祭、里俗
打、車樂、船上の挑灯、三百六十箇、一、歳の
日、数、象、真柱の挑灯、十二箇、八月の數、高、揮、四方の
灯、籠、三十箇、二月の數、宵祭を、奇、觀、又、翌、日
味、炎の祭もあり、この時、市、服、車と先、津島の車樂
山、車、その前後、博、輪、五、村、前後と論、五、村、八、米、座、
塘、下、後、場、今、市、場、下、攝、是、社、地、前、大、河、あ、り、岐、祖、川、の
ま、り、其、中、數、町、及、大、河、大、船、と、數、千、の、挑、燈
と、釣、其、影、水、映、拾、星、の、如、一、〇、の、神、樂、
社、家、注、進、記、毎、年、御、草、の、神、事、と、中、の、疫、疾、変

異、と、ト、津島社記、神祭式、の、御、樂、の、
す、社、説、御、草、の、神、事、あり、毎、年、六、月、十、五、日、の、夜、神、主、
行、極、深、秘、と、あ、り、其、の、為、と、
六、月、抜、の、余、風、牛、頭、天、王、の、修、法、あ、り、と、あ、り、物
ふ、ち、せ、旧、記、神、翁、一、人、草、の、葉、衆、と、浮、来、
その、名、と、づ、名、の、後、馬、津、の、居、森、の、窟、と、
と、の、神、縁、と、
露、涼、
露、ハ、秋、花、多、故、
の、神、樂、と、祢、と、
夏、
つ、
子、連、俳、通、

秋と守るは夏も又あり故

釣鐘草

こくがせ
花紫色

下より上まで鐘と釣貝をふりまわし、又白花
の紫のものをまき、葉は牡丹のまじり、



四月

練供養

紀事 十三日、十四日に至りて、大和国當廣寺に
法会と修入、十四日練供養を、僕射拱佩の女

中將姐の忌日、中將姐、尼とあり、善心尼法如と云、練供養縁起、この来迎引接の法事ハ、恵心僧都あり、物とあり、この

僧都八和州の良福壽村の人、種染の後、永觀中、叡山（たけやま）にてこの法會とせしめ、其後當寺護念院、本ハ紫雲菴といふ、法如尼章庵の旧跡、寛弘元年の比、僧都并寛弘といふ、此処來リ、本尊と廿五菩薩の假面とを彫て、同二年四月十四日、法如の往生の日と以て、迎接會と修し、是則、横川の花臺院々をも処し、○一説は、四月十四日ハ惠心僧都より、法會と修し、一日ありといふ、

兼三夏物

根芋

三才

和漢

兼ニ三夏物ヲ根芋ヲ

和漢

図会 戴イモ和名伊毛イモ加良カヲ一云伊毛イモ之俗云、
イモ根芋ネイモと称すハ芋イモ也

五月
合歡

花

神農經合歡盤忽草忘憂○箴曰其葉
暮至即合故合昏上云和漢三才圖會五月

花^{ハナ}、其花、上半^{ウペ}ハ白、下半^{カミ}ハ肉紅^{ニクベニ}、散垂^{サンチ}、糸^{イト}の如^{ゴトシ}く、
 和名^{ワナ}拙^{セツ} 祢布里^{ネブリ}乃木^{ノキ}、万葉^{マンヤ} あぶき、ゆふもも、あ

又、新六帖ニ
の花ともみえり、

鯢狩けいしう

照射 ともし
大串 やぐら
歎符 せいのう
これいふ

獸狩^しく、夏季^{なつ}とどろハ鹿^かを射^う。闇^{くらやみ}ある夜山^{よるのやま}の木
 うげに^{こゝろ}焼^{やく}或ハ小炬^{ことう}と串^{くわい}おつけてさす。是^{これ}は火串^{ひぐし}
 りふ、車^{くるま}あつ麻^{あし}、火影^{ひかげ}あつて寄り来^き、牝壯^{めいさう}目^めとえ合^あ
 火^ひとてきて、麻^{あし}の目^めの^のとてめくとめくと的^{たて}りて射取^う
 る。哥^かふも、兄^{にい}合^あす麻^{あし}ととあり、又^{また}は男^{おとこ}の福^{ふく}といふこと。
 まるごとこの待^{まち}とハあつて
 とそほつちうと云^いふ

六月

練雲雀

雪菫鶴

六月
練雲雀

雲莊集

○九六月毛とうしく旧とあゝむ。俗呼て練雲雀と称ス。
毛とうしくゝゝ其飛を速あゝず。故鷹と放しくゝゝ
と捕ふ。身と雲雀鷹鳥と云。○定家公鷹鳥三百首の内、
河内女がす引の糸のゆゑ雲雀一下より鷹とあをせり。云々
○或説云練雲雀とりつゝ喜入雲雀の畧悟あり。云々

夏
叔
子

夏羽織

草、おろいハ羅ホ
近來の俗服、

中山祭

神
社
啟
蒙

京三条猪熊の辺に依り祭る神豊石

臚奇石臚金

明徳記 今六角堂の南猪熊の東に在

座あり石上寺

二条大宮岩神（付）

中山大明神

神とハ是三井寺北の院より、新

羅明神

素盞
烏尊

公事根源

永義五年六月十六日

神社と建立し、同六年十月八日、後三位の神位と授

ちから、後冷泉院天喜元年四月より、あて官幣、

奉る。是四月の中の酉日、三井寺より

五月五日新宮祭と修ス夏ナツ木キ立タテ夏ナツ草クサ

是 新羅明神の祭なり

夏草曰蒹葭葭亦葦也

ふとう
ぐ
牡丹の一名
藻塩艸
昔ある女この花

名取草
と愛しく多くうゑおきて、眞終日

あゝ夜はよすぎらふ風を
撫ふことこそを
あゝさくらも

ふより、男、他の心ありとて、離別し、たゞあそぶ

夢野まゝで、元のどくすゑをめん、仍るゝ。
藏玉 ねん

人知と名取花
 一ふ
 一ふ
 一ふ
 一ふ

生
郎
常陸国誌
土人塩水と用く、莖乾し肺子、

生より美之俗に輕節と云毒貯る。○輕節

のいふまゝくゝて枯るとも
 茄子花
 時珍曰夏

絶とつ五ご目め連れん工こう交こう養よう
 秋あき至いたる

兼三夏物由由由

說文附贏、皆穀こくと負おふ蝸牛こくも

夏月

余情小
朗詠ナツメ
月照平砂ナツメ
夏夜宿ナツメ

夏の霜
この詩も、夏の月影を霜みくさとして

五月雨も夕立も、おそろしく夏の雨

夏田
あち、各一種の景物とあり、それで、ち

夏の雨ときき、其ながらめくめく、常の
夏更

夏の趣は、夏季のおどろき、夏夜

夏野の百草の茂きくさの專要し。○

稗列人と云ふの支那の弱

身
容

郭熙書譜 夏山 夏虫 身とふたふと云、即大城のこゝ
蒼翠如滴 蒼と雖とも古哥ふ夏む

夏野の席

宗祇抄 夏野の席ハ角生初、
短くして一束をうりあふむ

万葉 夏野去小牡鹿之角乃束間毛
妹之心乎忘而念哉 柿本人麿
五月 永

根

和歌ふあふと云ふはあやめのふし、根の水き
このふく、永承六年五月五日、あやめの根合ふと云
あふ、其式、哥合の儀のふく、左の根、一丈一尺、右の根、一丈
二尺のふく、古今著聞集ふく、是ハ後冷泉院の御時、
又郁芳門院の根合ふ

苗 南天花
た部、田種 南天花
の条ふ出

時珍曰五月小白花と云ふ、和漢三才図会 画譜ハ蘭天
竹と名く、其葉儼あして竹に似たり、子を生じ穂と云
す、紅くこと丹砂の如く、久く経るとして脱すこ
きと庭中ハ桂とバ火災を避へ、甚驗あり、近頃白子の
南天花と出す、以て珍しとす、元此樹長く、一丈と云ふ、
山陽の地ハ大水あり、作物土品のみ、長さ二丈余、周り一尺

二三寸あるもの、枕ふ俗、邯鄲の枕と云、
本神經目 南畑、文畑と名づけ、 瞿麥

和名抄 瞿麥 和名奈天之、
一名止古奈豆 草花譜 瞿麥、單午あふものと石竹

と名づ、千年あるものと洛陽花と名づ、 薔頃 苗高サ一尺ハ

うゝ、葉尖り小く青く、根ハ紫黑色、形ハ細蔓、善の如く、花紅

紫赤色、五月至て開き、七月ハ実と結ぶ、○大和撫子、唐撫

子、川原撫子、鷺撫子、藤撫子、ホの撫子、 采雅抄 花の姿

ちいさやうあつと云ふ、色ハ咲け、むと云ふ、名子と云ふ、
撫子と云ふ、又盛久しきハ常夏と云ふ、唐撫子ハ色この品

あり、大和撫子ハ紅梅色と云ふ、路鳥撫子ハ花の形あつて名

と、藤撫子ハ色あつてその名あふ、○石竹 和漢三才圖

会 瞿麥即ち石竹、今以て二種とす、共ハ葩の周圍ハ刺齒あ

りて切又あり、剪ハ紅紗に似る、ものを瞿麥と云ふ、切又あふもの

と石竹と云ふ、○かゝるあふものことハいふとあふすあふもの

のふくあふ、 本草 菊ニ夏菊、秋菊、冬菊の

いけけ後頼 分ちあふ、 菊譜 引花史曰、四月ハ

咲くものあり、張孝祥嘗て詩あり、五月ハ咲くものあり、陳

子高嘗て詩あり、六月ハ咲く者、符離王常詞あり、秋冬ニ

夏 天

生胡桃 博物志 張騫

夏望 胡桃の種と得る本草此果外 青皮肉あり

茄子 高丈許 春初葉生 長四五寸 兩相對 三月花と実 栗の花の如し 実と結

茄一名紫瓜子 杜宝拾遺錄 隋煬帝 茄と改て 崑崙

多識篇 水茄 今按 齊如 谷茄 黃山谷曰 茄の老と

の子堅 谷の如し 穀子茄と名 谷と穀 晉通

白茄子 時珍曰 銀茄と名づく

物 部形代 名越 後 暑語より 夏越の後と云

八雲御抄 名越と云ふは 邪神とある故に 此説

公事根源 節折式 晦日の夜 御贖物あり

和節 御装束 此大昇 江次第 亦あり 上 部 節折

の条 見合 夏越 名越 後と云ふ 惣名 荒和の後

節折 天子の御後 大抜 百官の後 部 大抜の

条 御後 大抜 形代 小幡 神事

輪 麻葉流 後草 頭の部 分ち入る

古今帖 月のあるの 後と云ふ 八千と云ふ 今の

夏後 夕後 夏後 夕後と云ふ 其時節 時刻

もの 夏後と云ふ 季と定め 夕後と云ふ 夏の夕

涼風と得て 修す 体 和哥と云ふ 読

夏神

川社 興儀抄 川社のと云ふ 川社のと云ふ 皆

もの 俄と云ふ 夏と云ふ 時 八と云ふ 川の

河の瀬 一本と云ふ 柱と云ふ 篠竹と云ふ

社 知人 川社のと云ふ 川社のと云ふ 俊頼朝曰 河

祝ひて 夏神 川社 河社のと云ふ 夏神のと云ふ 昔

此道の先達 只古と云ふ 見て心得

貫之集 四 又云 天慶四年三月 御祭風の事

あぬ ひと云ふ 又云 天慶四年三月 御祭風の事

夏

金葉集 心徳元年四月、三条内裏あり、庭樹結葉、
つるつるをよめさせり、いふに院御製、おゝあてこす

麥秋

○諸木の葉と葉と相交り結やうはぶきくるといふあり

礼月令孟夏月麥秋至註秋八百穀成熟的期此時

於ハ夏とらズ、麥刈ハ秋ニ故ニ麥秋ト云、禁邕月令章

穀ハ其初生と以テ春ニ熟ス
來冬ノ秋風

秋とす、故に孟夏を以て孟秋とす、

生ふ麦の秋風ともあそきて
麦むぎ蒔ま
和漢三才圖會大小

山時鳥志のいふごとく、俊頼
麥もふ九十月種と

下、皆四月黃熟す、其刈りとハ、立春より百二十日に至ると旬とす、

故ニ諺ニ云、麦六百日の中ニ蒔まべし、三日の中ニ蒔まべしと云、但一小麦

ハ、新収とぎ大麥より遲いそること十日なり、夫々五穀の貴と

す。○二年草、年越草ともいふ麦の異名を麦六年と隔て種る

故二名
夾はさ莖こ菜さい苗めい
同上
小麦稍厚く硬し小兒用て苗

と作りて世を吹くる世を喪くる世と

云、夫木　うあわとぐすく　いふ　あ　く　い　麦笛の
五月六日　萱

京師の警けい小せう書しよのの書しよ争しやう反はんハ

蒲 是五箇の夜に露と受て用皮金口上

申水の説むるの

室明神祭

三、是先客の上賀、後の夫人兩人、奉別口下、前にて申事、

其次、先^{いづれ}辰刻^{しんこく}装束束帶^{そうそくそくたい}す、己^この刻^{こく}の鐘^{かね}と鐘^{かね}、申^{まへ}主^{しゅ}フ

下生は、即拜殿の座つく、御鑰みかぎと祝いわひと人、社家ことと役す、

神主祝の式々なり
賀茂御三を完く
氏子素禰烏唱す
唐

表神前の左右に次神饌神酒と供ず、前事長神子神示と

次、主津の菟女棹の哥と發入、次、神主祝詞と申す。是

出貴松太田、若宮の社の御饗を献拜ス、神主祝内

入、齋饌を撤え、内陣の斎散神を生ず、三祝斎を閉じ、

幸、先ツ神船着岸の後、神主祝願宮イハヒノミヤの拜殿の座あり、而社人

幣種と捧て、太床に候下、次は渡御云、遊女十二人、三日潔斎

神事^ニ内^ニ五^ニ八^ニ男子の姿とあり、髪^ヲ剃^リ利^リ男^ヲ鬘^リ一^ニ金

の
社
祢ニを着、笛二人、鼓二人、大鼓一人、残リ七人、下髪こみげ残一人、天

戴ふと、萌黄の水干を着し、七人

こふ幣と揉る、こふ棹哥の役あり



玉拂 土用干 以月土用中、諸神社、諸仏寺、美室の玉拂とす、和俗六月土用中、天日の暗る

俟、衣服、兼書画の類、曝す、是と涼と取、土用干と云、書画、衣服の虫、執棄、土用中、

四月 卯花衣 桃花御説 表白裡青、卯、同、四月、こ、と、著す、

梅宮祭 上中 神社啓蒙 梅の宮、山城国葛野郡、王城、と、二里、と、ある、祭、神、四

座、相殿の神、四座酒解の神、大若子の神、小若子の神、酒解の神、以、祭、今、絶、と、土人、と、つ、こ、と、祭、の、式、

江、茅、と、也、橘、氏、の、祖、廟、と、也、世、俗、姓、娘、の、婦、女、當、社、の、砂、と、り、と、帶、襟、と、佩、と、也、延、檀、林、自、后、嘉、智、子、の、遺、

卯花 和漢三才圖會 按、楊、樞、數、種、あ、山、空、木、宮、根、卯、木、唐、空、木、三、葉、卯、木、と、山、中、介、

と、名、く、高、丈、丈、皮、白、く、肌、深、青、空、木、と、其、葉、円、く、長、し、四、月、小、白、花、と、む、く、族、と、う、く、愛、す、と、俗、云、

卯花、と、云、く、十、姉、妹、宮、根、空、木、と、訓、む、花、葉、と、十、姉、妹、似、て、同、く、と、云、く、と、也、京、哉、と、多、く、是、も、卯、花、

と、云、く、岩、本、空、木、岩、の、傍、咲、く、と、云、く、や、千、載、集、俳、諧、哥、の、花、よ、つ、で、と、云、く、一、か、け、鳥、の、あ、と、と、云、く、

岩、と、云、く、一、〇、異、名、と、云、く、草、垣、見、草、雪、見、草、と、云、く、頭、の、假、字、の、部、と、云、く、卯、花、と、云、く、八、雲、御、抄、の、花、と、云、く、

万、葉、三、春、と、云、く、卯、花、と、云、く、茨、花、と、云、く、和、漢、三、才、圖、會、金、機、子、と、云、く、山、林、の、間、に、叢、生、と、云、く、大、小、薔、

薇、と、云、く、刺、と、云、く、四、月、白、花、と、云、く、夏、秋、実、と、云、く、結、と、云、く、黄、赤、と、云、く、色、と、云、く、小、と、云、く、拓、榴、と、云、く、夏、枯、草、と、云、く、時、珍、曰、原、野、と、云、く、多、く、と、云、く、苗、

と、云、く、微、方、と、云、く、葉、節、と、云、く、對、と、云、く、生、と、云、く、細、齒、と、云、く、背、白、く、莖、と、云、く、端、と、云、く、穂、と、云、く、と、云、く、作、と、云、く、長、二、寸、穂、の、中、と、云、く、淡、紫、の、小、花、と、云、く、と、云、く、三、四、月、花、

と、云、く、と、云、く、実、と、云、く、結、と、云、く、亦、穂、と、云、く、作、と、云、く、五、月、便、ち、枯、と、云、く、和、漢、三、才、圖、會、夏、枯、草、穂、の、形、矢、筒、の、鞆、の、と、云、く、と、云、く、

故、俗、宇、豆、保、草、と、云、く、和、名、宇、流、木、是、と、云、く、鴨、実、と、云、く、和、名、と、云、く、故、俗、宇、豆、保、草、と、云、く、和、名、宇、流、木、是、と、云、く、大、和、本、草、吉、利、子、樹、和、名、宇、

久、比、寸、と、云、く、所、と、云、く、山、林、と、云、く、小、木、と、云、く、葉、と、云、く、山、踰、と、云、く、似、と、云、く、夏、と、云、く、

五雜俎 大明以前摺扇中、
多く團扇を用ひ、和漢三才図

俗云唐
宇知波
醫不似
物と打
ぐ故に
宇知波
と称

支考 團ぐん賛はんの序しよふくんとと云和訓ハ、いふなる故也。

宇治丸

鵜飼 鵜舟 鵜縄 鵜遣 鵜

和漢三才圖會
鷓鴣和名之万
豆止利今云宇乃
止利按和名抄

云俗云○弘景曰、此鳥、卵を生ず、曰ニ其雛と吐、○岐阜、長良

の鵜飼、六月避暑納涼の爲、近国より来り、具物ス、所謂
 上川七艘、下川七艘、合て舟数十四艘、長良の渡、小瀬の渡
 まで三里の間、上川と云、長良が川下三里と下川と云
 上川の點と上品とす、舟一艘、鵜十二羽、鵜遣一人、舳堂
 一人、舟の舳先、鉄綱と下し、篝火と焚、十二の鵜の縄
 と丸の手の指の股より持ち、鵜の魚を追ふ、
 へひ、その縄もほき、次々とけぐし、その時、並み、
 縄と、ぬき、持ち、縄のつづ
 解、帶と、と、點と十か、吞、鵜ハ、舳
 と、と、右の、魚と、又水中
 へ追入、その手先のつづ、
 次々と追ひ、甚ど、鵜縄長と一丈二尺、鵜の
 首、鉄と入、腹中に入らざるや、設、月の入、
 船と、月夜の、腰、暑、
 九三四月、め、八月三十日と限とす

と部騎射
の金とて
宇治祭
八日
官乃離

夏
う

社ハ山城国宇治郡宇治の里あり、祭る所三座、宇治旧記演平
鳥應神天皇、荒道推郎子、仁徳天皇、當社ハ宇治の北、
て、関白頼通公、平等院建立の時、離宮と南に移し、平等院
に向ひ、此寺の鎮守とす、神社啓蒙、離宮ハ祭る所の神
一座、藤原忠文、按、忠文、宇治民、父と号す、母ハ息長氏の女
あり、義平三年、秀郷貞盛ハ、將門、誅伐の功、以、恩賞、行ハ
る、日、小野宮左府忠文、以、賞、列、入、す、故、忠文、父、小野宮左
府、と恨み、遂、小宇治川、に、没、す、其、霊、志、を、崇、と、あ、り、て、百姓、と
斃、是、と、以、て、祭、て、宇治の離宮と号す、西、説、互、異、之、の、神
事、その、ち、め、頼通公、勅、し、て、天下太平の御祈、五月八日の
刻、九日巳の刻、至、り、て、こ、こ、を、平等院と修、太平の御神
事、と、云、青梅、首、の、兩、種、と、以、て、神饌、を、備、ふ、雍、劔、府、志、祭、の、日、
金銀の幣、と、奉、進、供奉の人、金銀の、鶉の巢、
幣、あり、と、誤、り、と、云、
先、板、の、諸、抄、と、
今、の、鶉、の、巢、
禮記疏、反舌、と、蝦、蟇、と、ハ、未、だ、是、非、と、ハ、
月令、反舌、每、声、一、
本、神、拾、遺、百、舌、一、名、反、舌、

羅 細布あり、めの細き布、越後宿の、
○す、薄織の、
萍の

花 吳晋本草、水萍、一名、廉、葉、円く、小、く、て、一、茎、一、葉、根、水
底、入、て、五、月、白、花、あり、○九、行、萍、の、類、其、花、水、面、に、実、

或、白、或、黄、
五、六、月、盛、
瓜の花、
花、黄、く、胡、瓜、越、瓜、の、類、と、云、
梅

漬る、梅干、梅剥、
梅剥ハ、皮、肉、と、も、剥、掛、晒、乾、
梅酸、と、云、

浮巢、
み、部、水、鳥、の、
巢、の、条、に、注、ス、
余、雅、注、蟪、一名、守、瓜、喜、て、
瓜、の、巢、と、食、ふ、と、云、和、名、抄、

守瓜、
渡、利、
和、ふ、ある、者、又、同、形、其、
う、つ、蟬、
世、部、蟬、の、
条、に、注、ス、
鶯

の附子、
貞享式、此、式、ハ、例、の、當、用、今、按、こ、こ、鶯、の、子、と、
春、巢、立、て、夏、飼、へ、六、月、の、間、も、替、て、冬、至、の、
こ、こ、鳴、習、ふ、と、云、鶯、の、子、鳴、の、字、と、結、び、て、冬、水、子、と、ハ、
あ、る、と、云、夏、ハ、聞、習、ふ、或、ハ、引、鳥、の、親、ハ、附、或、ハ、笛、と、
以、て、引、音、と、教、養、す、夏、の、間、も、ハ、附、子、ハ、
決、て、夏、と、ハ、笛、と、結、び、て、夏、と、云、

六月、打水、
夏、
う、の、

るハ中の **灌佛** ふ部仏生 **草茂** 元帝纂要夏

西の目也 **草の王** 大和本草 葉ハ菊ニ似テ大アリ

字景茂ハ州の **草の王** 一葉コレハ五ツハ分チ其分チ

豊盛の良 **乳柑の花** 和漢三才圖會 葉

と内ニ岐あり四月花 **杳手鳥** 新撰万葉 郭公鳴立春

とむく俗ニ草の王と云 **勸農鳥** 之山辺庭杳直不輸人

と〇花もよ **鳥の来る** 鳥の来るハ木の下竹の中ニかく

澄ハ似 **名俱伎羅** 契沖の説ハハ時鳥の梵語と云

哉住濫 **鳴く** 鳴くハ時鳥の異名ニ此鳥前生杳と作

賣々ハ百舌鳥 **知の子** 時珍曰按王安石字説云

鳥の来る **知の子** 一面の個と設け物觸後

と見 **五月** 五月の王 天曆

あハ此鳥農業 **五月** 五月の王 天曆

とや **五月** 五月の王 天曆

とや **五月** 五月の王 天曆

とや **五月** 五月の王 天曆

とや **五月** 五月の王 天曆

とや **五月** 五月の王 天曆

とや **五月** 五月の王 天曆

とや **五月** 五月の王 天曆

と禁日といひて、おの日一切の禁草と云ふあり、**荆楚記**是日
雜藥と競ひ採夏の小正云、禁と蓄て以て毒氣を止除ス、

宗祇抄ききふりするといふ、

萱草花

忘草 時珍曰、
萱本護

四五月小禁狩と云ふ也

に作る、護は忘あり、詩小憂思不能自遣故樹此草玩味
以忘憂也、吳人云と療然といふ、其葉蒲蒜の草の如く
て柔弱あり、新訂相代して四時青翠あり、五月莖と抽ん
て花とひらく六出四垂朝小開暮小萎、秋深小至てす
わづら盡く其花紅黃紫の三色あり、李九華が延壽書
ニ云、嫩苗と蔬として食へ、風と動く人として、自然と
醉るが如く、あらむ因て忘憂と名く、此も又一説あり、

清輔興儀抄忘草 萱草といふあり、兼名花小忘憂艸と

うけて、**大和本草**諸説と引て、本邦の萱草にあらず然とも

五月莖と抽んで六出四垂といふ、花の形相似くものあり、

一種朝鮮鮮萱草あり、葉冬も枯る

雲見草

棟の異
名〇古

其花紅黃色あり時珍の説に似る

山遠き軒端ふらるる雲見草、

栗の花

續圖經
栗の木高と二三

文華極めて、禁類四月花と開く、青

黃色條長よして胡桃の花に似る、**山梔子の花**

時珍曰、危ハ酒器あり、危子あり、小象に故ふ名く、俗小抱ふ

作ふ、佛書に其花と稱して落萵と云、謝雲通ニ云く、林蘭

といふ葉、虫の耳の如く厚くして深緑也、春榮秋瘁ハ、

夏よ入て花を開く、酒盃の如く、白き、**車**

百合

和漢三才圖會葉畧潤く對生して車輪の如く故
小車百合といふ、其花瓣卷轉横小垂る下野日光

山和列大峯の

黒百合

同上花小黒色のもの絶ては、
惟紺色愛をへ、本奥州より出

桑實

同上桑ハ蠶と養ひの地多くこまを裁實のつぎ
ゆのあり、俗に男桑といふ、其桑の穂ハ初音く白く

漸く赤色黒く熟く味ひ甜く、

水雞

同上龍鳥和名
久比奈、按るに大

其木堅實ふりて黃白の色、

鳩の如くふりて頭背翅皆蒼黒の斑あり、淡黄赤色と帶

眼の上小白き條あり、嘴蒼くして長く、頷胸の間白くして

黒白の斑あり、尾短く脚長く淡黄あり、夜鳴て且小連声

人の戸を敲くが如し、蓋水辺ニ在り晨と告ぐ故ハ水雞と

夏ハ、

名く本草多く田沢の畔に居る黒鴨 仙覺万葉抄黒鴨
夏至の後より夜鳴て秋後即やむ 一名わさのいふを

鴨のたぐひあり田舎の人ハ黒鴨といふ和漢三才圖會輕鴨全
鉢黒色頭の後小青色と帶光あり眼の上小淡白の條あり

黠黒くして喙端淡赤く白色より黒く 黒くも白くも
縦の紋一條あり脚掌より小赤し

と見え 梅雨中の空合とつゝ壁はかきうけて今も降
やうある空のうち小入あつてあるけしきを黒

と見えといふ又小雨よりあつて折こもるけしきある
と白くもといふやうく小暮るる空の一きり暗てあつて

六月 鞍馬に竹切 廿日 親長卿記
文明三年

六月廿日今日鞍馬竹切也夜小入て護法の儀あり云々今小至
て今月今日と修え紀事 紀事延鞍馬寺の主より夏五
月護法を修え日中大蛇北の峯より来る峯延毘沙門の咒を
誦も蛇おのづから斬て段とある此寺の本願人藤原の伊
勢人禁閑奏して役夫五十人と發しうけ蛇と静原山小井
俗其地と呼んで大蛇の峯といふ今小至て毎年六月廿日村

民衆師堂ふあつて大竹と縛り立て又別小竹二本と堂の中
間に縛り横へ法師廿人餘白き袴と着し山刀と佩庭上

出て一本の竹と近江と称し二本の竹と丹波と称し法師各十
人左右わたり同時小声と揚奔走して山刀と以てこと

截るその運速ふりて兩國の豊凶と占ふ速あるものと
豊と得るものとあつて後その竹と以毘沙門堂の前小来

てて又段ふりて截るものと竹切といふ是峯延蛇と斬
の遺意あり又夜小入て寺僧各毘沙門堂ふあつて其側

小僧達中間ふ一人と置各肝膽を凝ててこと祈る件の人
忽ち倒れしむらりして蘇生す是夜鬼を拂ふ法

僧達寺僧の外下輩あるものといふ縁起 松提寺鑑禎和
尚室龜中小居とつふトス雄雄の大蛇あり鑑禎持念一

蛇忽ち死す禎一蛇小謂て曰此山水多し水蛇をうへ蛇
誓ひて去俄より清泉涌出今の関伽井是也寺説

竹切の事具ハ蓮花會といふ是中興開山奉延和尚
咒法とて蛇と斬るの遺意やと奉延の遠忌會あり
夜の護法ハ開山鑑禎和尚の一蛇と

救ひ護法神とあせし遺意と云 雲の峯 杜詩奇
夏 峯突元

火雲昇火雲 陶潛詩 夏雲多奇峯 夫木 六月ふりぬ

えて大なるふあやうき峯の雲のいろう那、衣笠内大臣

薰衣香の部掛香 葛水天和本草 葛の花葛の粉 夏月

傷らに功尤多し 葛の花 藤領曰葛ハ春苗と生し 藤を引蔓一二丈 和漢三才

實もまご黄色豆の莢の如し 海月取 崔島錫食經海 月一名水母貌

割て海月の肉を包み塩を用 霍亂 傷寒論集成正 珍云夫霍亂の病

ハ夏月暑時飲食過度の致す所胃中擾乱上吐下 瀉者是也霍と腫と古字通用説文云腫ハ肉美 也大氏人の食の爲ふ傷る所肉食居多故持腫を 舉て一應食物と統る也凡人其嗜欲する所皆これと 乱といふ○青藍云俳諧歲時記ハ先板の諸抄香需散霍 乱ホと六月の季に出るといふもあて凡流ハ益ありと

息吹くも霍 乱の針、其角 や 四月 山科祭 上巳○社ハ 勸修

寺の南の境内往還路傍れ水の辺ふあると祭る所 醍醐帝の外祖宮路氏夫婦の天神やて勸修寺家の祖 たり寛平十年より祭は一まりて官幣ありて今 絶て只神饌と供するものこ今土人宮路氏の社ハ八番

の社と合せて本居神といふ九月廿七日こ祭る是こと 勸修寺祭といふ今の世ハ山科祭といふハ北山科諸羽明 神祭あり九月九日祭礼あり神体ハ大己 貴太王の二神ふりて本朝補翼の神也 八瀬祭 辰

○ハ王子天満宮兩社の祭あり天満宮の宮ハ愛宕郡天 脊の里ふありハ王子の社ハ天満宮の異二町むらの山腹 ふあり傳へハ菅家少年の時比叡山法性坊の室ふ入く 學文もその往來休息の處ふ後人社と建玉人祭の日大 竹と切てその枝ハ五色の扇挑灯ホと鉤り提て難しお から持ありくわりの其唱哥俚語方言といひ二興あり

矢脊一村九百軒をり、父老或ハ上る人との、又
吾をこゝてけり、此里諸も亦他ふ出さるもの、
山崎日使 三日名勝志八幡宮寺中讀破ふ云日の
使四月三日、是二郷万代の勤役あり

山崎より辨備を、晚陰ふ及て日の使あり、相列て山崎
の孤村より来る、儀式京洛の大臣より同く主人冠、紫
藤とくけ、舞男の巾子ふ擲と、柿ひ彼亦馬ふ騎あり、二
度神庭と廻りて下馬せり、一面ふ御殿ふ相對し、再拜し
て衣の袖と刷る、**神事記** 日の使ハ八幡宮才一の神事也
治承三年まで猶勅使の義あり、同四年兵乱ふりて退
轉る、芥賣尾屋関戸の院勅裁と申下し、在地の神人れ
と勤むる、問交野の土民、御先の役より、弥陀寺と号ふ
白杖と捧て、鳥羽木津より出る者、年頭馬長あり、神巫
舞人次第司、藏人司先行も、色掌人笛と吹鼓とあり、又
細男といふ二ツの人形あり、あま武内高良の神といふ、此
祭も今絶ともふや、○明月記小建仁二年四月三日、山崎の
民家悉く經營を、毎年祭礼あり、その道小橋と渡り、播
磨大路より八幡ふ泰ると見えり、此昔此祭ハ山崎より

八幡の山下まで大河小橋と渡り、くぐる橋本其遺跡
あり、此使と勤る、日の頭と称し、其人と日の長者といふ、郷
の上首とも其裔と長者衆と云、
山崎祭 八日 雍州府
究めて豪富の輩ありし
志山城

国離宮八幡の傍ふあり、祭る所大山祇の命、延喜式山城
国酒解の神社一座、注云亦山崎の神と号、同書山城国と
標津国との境、小疫神と祭ると云、此社ハ、**山州名跡志** 天神
八王神の社、大山崎、北の山ふあり、祭る所素盞鳥の命の御
子八王子、今土人本居神とも、○**群譜** 慶長記 今日此使ハ童
使といふあり、今式小日の使の所ふ記ハ誤也、明月記云建
仁二年四月八日午刻、水無瀬殿ふ泰上、末の刻出御、この辺
の辻祭二社、**天王社** 御前と渡り、その中一方頭、田樂示
の供奉、副ふ土民ハ此事を営む、云々ことりて思ふや、
ふ土人山崎の神と武塔天神、牛頭と合して祭るわけり、
矢
數 洛東三三間堂蓮華王院といふいふ、人の得長壽院
の辺、同所の池の中社若と觀壯とも、凡此所の矢數、毎
年四五月永日のうち晴天と候ひて、あま射入堂前ふ居て、
今日の昏より翌日の暮ふ至て、通る所の矢數他ふ超過に

と天下 **山官花**

和漢子國會賣子本今知佐の本

一と云、
 三大徑二尺皮粉青白色老るときハ浅褐色中心白く其
 葉梅嫌木の葉に似たり長く尖つて二寸むく面青く
 背淡く冬凋み春生も三四月花をひらく碎けりて小く
 白く單瓣なり野梅の花に似たり衆稍長く無き大衆と作
 るべ但し毎二三櫝生の實と結ぶ狀小連子の如し初め青く
 後黒し堅くして肉白色滑管難談此葉菜類の昔に似れ
 ば名くといふ云々新撰六帖我々人々まき
 らふおのやう白雲ふき山ちこのと云
 女貞山海經云泰山は貞木多しといふ是をあら其葉拘
 骨及冬青ふいて冬と凌きて凋み五月細花を開く青
 白色九月實あり倭名抄女貞和名太豆乃木又比加都波木和漢子國會
 女貞木の葉海石榴ふいて鋸齒ふし故に姫海石榴と名く
 と云俗ふ是を藪椿といふ然る小野椿の藪ふ咲やとて
 初夏の頃花あるわけといふ云々といふ云々この説ハ
 兼三夏物 **魚簍**
 魚簍とむくり之を夏物
 より簍と春と下り簍

と秋とてささとも連句やて其季ふ連る時
ハ上下の断りふ及む三季ふ用ふと貞享式ふいり

五月

山田の御田扇

廿八日は伊勢山田太神宮の
御田植あり今式太神宮

の室前やて神事修行の扇あり是と御田扇といふ是
 と以て田と扇と風情とをもと虫を生む患なりといふ
 産婦も又この扇と求て相向ふ所の柱ふりくも極て
 産安しとて是虫の障もといふ云々べし○五月廿八日とい
 へども日定らば下旬小日とえらとて是と行ふ當日御宜敷
 兼御子羅子これと勤し神田ハ高倉山とて俗ふ天の岩戸と
 りふ所の東の麓豊宮寄ふあり件の人々此所ふ至り御子
 羅子早苗と植るまゆいとをも神人後と修を太神宮の一
 の鳥居やて神樂唄とてハ笛太鼓やて舞ふ長官ハ乗輿
 祢宜ハ騎馬御子羅子ハ雍樹やて高倉山とてまきて鳥居の
 所ふ至る素袍と着る者長六尺むくの大扇と捧て
 泰詣の諸人ふ戴るむ又一説ふ丸山といふ所の土人六人
 女の形とあり伊達漆の帷子と着赤き襷とけ烏帽子と
 いふき黒塗の棒とやり廻し扇やてあきま小内官外官

夏 やま

とわ小同じし、ちきと山田の名せふ高し其扇を撰て泰
諸の諸人ふ興ふ内宮ハ七本骨外宮ハ六本骨あり船を具
る馬の魚鯛と釣る人形の画或ハ鶴龜ホと画き、
あつものあり是と長官宅お其日の朝興る、
藥草

摘つむくの部葉日
大和撫子なみの部撫子
の条ふ註
楊梅やまゐり時珍

曰楊梅その形楊子の如くやて味もい梅ふ似たり故不
名く實と結ふ楮の實の如し五月熟も紅白紫あり紅
ハ白に勝まり紫ハ紅に勝る、
顯大やしく枝細くあり、
魚簍打石と堀木を障
て魚の往來と

通るものより
築の条ふ註
ま四月松尾祭上酉神社
啓蒙

松尾の社ハ山城の國葛野郡ふあり王都西南と去ると三里
余祭る所の神大山咋神三社註式市杵島姫也云公
事根源乱世以来上酉ノ日云々祭式江次才ふ出たり此
祭日吉の神事の如く葵うぐと掛仁明帝美和四年
始て祭るといふ紀事神興七基其内一社毎年白木と
以て新造と云ふと武御輿といふ祭日神幸畢て後桂川

の東ハ捨以皇日兒童再び此神輿と昇るをうして後これと
破き破るその木斤と取て則小神にこれ疫と云ふあ呪
ありとつ武御輿民間小子ボレ仕宮と称ふのこころハ
今日再び遊行を猶ほふてゐるが如し神輿七基ハ月
讀の社標谷の社三の宮ハ宗像の社
衣手の社四大神御旅所七基集西在
當宗祭上テ

○河内国志紀郡當宗の社ハ仁和四年四月始て勸請
公事根源午の日使ハ社本當宗ハ程遠き故ハ一人の
使而社の祭のこめ小下向々宇多御門の御外祖々々當
宗氏ふふふとて仁和五年四月十四日祭りと云ふめ行ふ
姓氏録當宗忌すハ後漢の獻帝
より出四世の孫山陽公の後あり云々
松前渡南郡津
商人産物交易の爲ハ蝦夷松前へ渡るといふ此海丸々各
春の間ハ寒氣強く浪涛懸々あり故ハ四月よりつて

出岸し九月と限つと小歸國
依てわをを夏とてとと秋とて
天蓼和漢三才圖會
藤天蓼ハ根ふふ

山中ふりつ今人家ふてこもと植其蔓ハ蒼黒く拓及び
櫻桃の葉ふ似て皺あり三四月小白花と開く狀梅花ふ
夏
ま

似て小し、實を結ぶ但し雄あり人その雄を取く
醃味醬ふ合れて食ふと食ふ糖常ふきづく食ふ

祭まつりの部神祭
五月 松本祭 朔日 淡海志
江洲太津

松本村の神社あり祭所の神平野大明神也人皇千七代
仁徳天皇の廟あり難波の平野と移し奉るこまに本宮
ハ御昔六七丁南の山狐谷ふありといふ慶長中今
の所小移し神雲一基あり今の傍小精大明神と並祭る

虫 浮旋て止まりど筑紫ふてカイヒチカキ 江東の
俗ゴゴイリといふ按る小是獨樂まといの訛言あり
脊純黒く腹ハ淡赤し関東ふて水スミ又サウトメと
いふ是こ然るふ得て水をまじハ水馬こと思へる草多
去る自合ふ水馬の題あり藻の花を依り野や水まはし
ともありあり是

菰荊 蕪領水中小生む葉蒲葦の
件の取ちういふ
春の末白茅を生む菰の如し即菰菜也八月花と
開く草の如し子と結ぶ菓ふ合て食ふ

菰 菰の如し子と結ぶ菓ふ合て食ふ

植 廣韻天豆ハ菰く小豆ハ菰く和漢三才圖會天豆大低
夏至の十日以前種と下て謗ハ夏至の鳥脚といふハ
既ふ生出る形鳥脚の如くふれハ七月花

とひらき九月花と結び十月とと収む
和漢三才圖會蟻一名醯雞列子小朽壤の上小生ふ雨
因て生じ陽と視て死す雨雅注ふ飛て蟻ひくこきこ
風ふく着つゝときハ雨ふふいふうハ風吹ふすうこき
ハ旋て飛て蟻ひくが如しハ上リハ下て着つゝが如
きときハ雨ふふ云ハ形蟻小似て小く時珍曰甜
翅身皆灰色背窄其大一分小過で甜瓜 瓜の味諸
瓜より甜し故ふ獨り甘甜の称を得るハ王楙曰二
三月種と下し五六月花ひらきハ七月瓜熟むハ美濃國今
巢郡真桑村ハ甜瓜の種

與故ハ真桑瓜と名く

花 時珍曰一名象穀一名米囊一名御米其言の形粟玉の
如し其米粟の如し乃ち穀ふ象て供御とまへし故
ふ諸名あり秋種冬生寒苗蔬ふうして食ふ甚佳し葉
白旨の如し三四月薑と抽で青苞と結ぶ花ひらきこきハ

白旨の如し三四月薑と抽で青苞と結ぶ花ひらきこきハ

け 四月 嬰山栗の

夏 まけ

苞脱も花四端大さ仰蓋の如し罌ハ花中ふあり鬚紫
 とと畏花開て三日即り謝て罌蓋の頭ふあり長さ一
 二寸大さ馬兜鈴の如し上ふ蓋あり下に蒂あつゝ宛然と
 して酒罌の如し中ふ白米の如く極めて細し其花変態常
 ふあり自ら白き者紅の者粉紅の者杏黄の者半紅の者半
 白の者故ふ麗春といひ賽牡丹といふ又錦被花といふ、
蕙 白及 和漢三才圖會蕙蘭 即紫蘭 紫蘭莖を立て
 葉と生え秋蘭ふ似て潤く薄く色淡き白や
 て縦理あり三四月莖の端ふ白花とひらく香ふし又黄紫の
 二種あり云〇按むるふ和俗蕙と称するもの白及の類ふて
 葉大小あり山中ふ生るもの白花黄花あり又盆ふ植て愛
 するものふ黄蕙星蕙あり此根莖の如く矮あり蜀本艸曰
 白及の属あり白及三四月莖と抽出て紫花を開く冬凋
 ゐ根莖ふ似て三角あり白色角頭ふ芽と生えふ和俗れ
 紫蘭と称するもの根莖ふ似るもの
兼三夏物
 ふし黄蕙星蕙ハ蜀本草の説の如し
夏龍夏行 安居 佛者四月十六日より七月十六
 日ふ至て九旬の間禁足安居

既ふらむと結夏といひ既ふ終ると解夏といひ七月十
 六日より十月十六日ふ至ると自恣といふ釈氏西要覽南山抄
 云偏ふ夏月約うにまゝふハ無事遊行ハ出世の業
 と修まると妨ぐふ二ふハ物の命と損を慈ふ違ふと實
 小深し三ふハ所為既ふ非故ふ世の謗と招く三王難題
 四月十五日より天下の僧尼禪刹ふ就て格挂せしむと結
 夏といふ又云と結制といふ蓋し長根の辰ふ方て外ふ
 出てふ恐らくハ草木虫蟻と傷らふ故ふ九月十日安居禁
 足あり七月十五日ふ至て始て盡く散し去ふと解夏と
 いふ西域記ふ十六日ふ作と是とと結夏十六日と以て始
 するハ印度の法あり中国ハ月の晦と以て一月とす天竺
 ハ月の満ると以て一月とす則中国の十六日乃チ印度の
 朔日也〇安居 釈氏要覽南山抄云形心靜攝
 と安といふ要期らふ任まると居といふ云 **夏斷**
夏書夏經夏花 夏行ハ安居也安居ハ出家
 修行の暇と得て私ふ住し
 故ふ安居の間他の化益と専らふ勤て三界萬靈ふ回向
 等も二夏九旬といふ十日と旬といふ九十日と云ふ九旬

五月
削

懸くの甲ふ

元日祇園きぐわんの削掛せうかけと標格ひょうかくとして、甲の加

さしともて是邪氣と被ふ神鬼ありとう

競渡
水馬魂連

云
云々の部飾甲の条と見合をべし

水馬

月令廣義 楚傳 曰競渡ハ越王勾踐ハ不起ハ

歲時記
五月

五五の競渡、屈原と極もんを以て、後世遂に戯とせり

荆楚歲時記
屈原二の日と以て汨羅に死す人舟と以てこれと

極きよくへ今の競渡きやうどはると其遺俗也南方競渡きやうどのもの其舟を

治めて軒轅けんえんをひくむるを飛鳥ひてうといふ又水車水馬みづうまといふ

て車とて、こち武とて馬とて、故小鳥車水馬の名あり。和

漢三才圖會唐人來了長寄寓かうきよして此日相逢あひまひと云ふ

數艘の小舟に乗、旗幟と立て、先と争ふ排龍々々、喚き
いゝ速きものとして勝とも、是競渡あり、蓋屈原の爲に

龍と逐ハ
の意、
梟美、梟
漢史五月五日梟の美
と作て百官賜其西

鳥の故小五月五日これを食ふ古ハ梟の羹
梟の炙と重む蓋其族類を減せんと欲す
獸狩

部 軀符ねんじの
糸不出
六月
解齋けさい御粥ごしゆく
江次才六月十
二月十一日後撰

土月中卯後曉 **公事根源** 神今食の次のいゝこりいゝの
 御うのまゐり座の大床子（まど）をて臺盤（たいばん）一（ひと）脚（あし）どもてて供（く）

あまきこころけふりゑ、和布の御汁とてこゝろ三口食て御
箸とて川云、神今食て、後齋ある八中こゝろのこゝろ

解齋ひがふの御うやなどと供して
ハ神齋かみさいあるへううむとあり、
毛虫けむし
陳藏器曰毛虫ちんざんき繭さか
作つくる形かたち龜かめの如ごとし

小雀癩いぢまうと名く好て果樹の上ふあり、小とも小鷺魚うみこの如く
あぐんあぐんのやう
身面背上五色の斑毛あり毒あつてよく人と刺螫さし螫し老人と

欲るりの口中より白汁と吐凝聚て硬く正小雀の卵の如
其虫癭を以て繭とて中ふありて蛹を成も、蠶の繭蠶の繭

如し夏月羽化^{うけ}り出て蛾^{いも}とあふ、
子^こと葉の間^はに放^{はな}つて蠶^{かい}子の如し、
削水
枕草紙^{あしな}のこゝの
むねげういの

夏
けふ

削氷 けいりゅうい
枕草紙 あしな

何れに入ておとらきかふあり小入る云
○水室の水とけつりくきたるをいふなり

月佛生會

八日 谷佛灌佛龍華會花師堂
甘水佛の産湯 五香水

○九諸寺院灌佛會と修す諸品の花を以て小堂と飾
る是と花師堂といふ其内小き釈迦の像を安置し甘
草水の香水と灌ぐ是と甘茶と云事文類聚佛運統記
周の昭王二十四年甲寅四月八日中天竺国淨飯王の妃摩
耶氏太子悉達多と生云浴佛功德經清淨慧菩薩佛不
白して言く世尊若佛在世及ひ滅渡未來世の中諸の衆生
云何う佛と浴せん佛言く我汝ら為ふ浴佛の法と説ん諸
の供養の中最殊勝とも衆の香湯と為り淨器の中
置き先方壇と作して妙鉢座と敷き上小佛と置き諸の
香湯と以て次第ふくまを浴し香水と用ひ畢て復淨水
と以て其像と淋洗し人各洗像の水と少しぐり取て自
らの頭上小置く初像上小水と淋ぐの時此偈を誦して
云我今諸の如來と灌浴ス淨智功德莊嚴五濁の衆生
垢と離れとめ願くハ如來の淨法身と證せん云云○龍

華會 佛勅下生成仏經時小菩提樹あり名て龍華といふ
慈氏 佛勅翻して大悲尊下小おいて正覺と成ト云云是ハ
龍華樹といふ木の下で弥勒始て正覺と成とあへ給ひ
此處小三度説法の會あり是と龍華の三會といふあり
四月八日ハ釈迦降誕の日とまハ釈尊と浴し奉り當
來弥勒逢奉る結縁とまハ四月八日とまハ小龍華會
といふ
とらふ 深見草 牡丹の異名 和名 富貴艸
抄和名布加美艸

周茂叔愛蓮説牡丹花富貴者也書言故事 多く富貴

不如歸 樹小懸て謝豹思歸樂と云ふこの
音不如 落 雀鳴錫食經 落葉小似て 兼三夏

物 風爐茶 茶湯秘傳抄四月朔日ハ更衣してこ
づ夏うまへとて日ハ三月まで風爐を立て茶を煎す
の茶と服し爐とよきぎけふより風爐を立て茶を煎す
數奇屋の意障子やも簾ふくふ外涼しくも入て

夏 人

客とりとち惣じて凡爐の茶ハ朝茶湯多し通ふハ
晝とりとち久凡爐ハ奈良凡爐と多く用ふるなり

毛吹草 常の俗猶四月 俗より九月まで用ふ
蚊 和漢三才圖會 納子 蝨 蟻 子
俗より九月まで用ふ

蚊 蚊小似て小く脚とまゝ黒色晝
多く出て人を螫腫痛むと最烈し 蚊子木蚊

母草蚊母鳥 五雜俎 嶺南小蚊三木あり
冬昔の如く貴枇杷の如く孰

るとき蚊の塞北小蚊母草あり葉の中ハ血虫あり
化して蚊とあふ江東小蚊母鳥あり蚊と吐て一二升云云

滑稽雜談 和俗蚊母鳥と呼ては鳥 海蘿干

とつ今聞小都々都々と啼むのあり 和漢三才圖會 鹿角菜 和名豆本草ハ東南の海山石厓

の間ハ三四寸鐵線の如く鹿角の狀の如し紫黃色土米
て曝し貨海錯とて水と以て洗ひ醋ハ拌まぜれハ脹

して新きもの如し味極て滑く美也若く浸そ
ときハ化して膠の狀の如し女人以て 五月 鳥車

髪と梳る小粘ありて乱と云 粉團を射 天竺遺事 唐の宮中端午

の糸ふ出 金盤中小釘を鐵妙愛をべし乃チ小角ヲと以て是と
射る粉團ふあゝるものハ食ふと得蓋粉團滑膩やし

て射し都中盛ふ此戲とふも 歲時雜書 端午ハ水
團と造る又白團と名く或ハ五色の人獸花果の狀と雜ハ

最精しきものハ滴粉團と名く或ハ麝
香と加ふ又乾團水ハ入ざる者あり 藤の木祭

五日 神社啓蒙 山城の國紀伊郡深草山の南ふあり祭る
所舍人親王の延喜式ハ載る所の真幡すの神社

二座是之別番神 後小三所の皇子と合せ祭る三所の皇
子ハ早良親王伊豫親王井上親王又祭る所三座舍人親

王早良親王伊豫親王紀事 是日神輿三基遊行社家藤
野井氏甲冑と着し馬ふ乗て供奉も帰路たのく稻

荷の社樓門の西並藤の杜の馬場ふ於て走馬と祈願
ある所の人あまふと又おろく甲冑と着し馬ふ乗

て馳驅とるこ前ふ同じ一説ハ藤の杜ハ早良親王故小
弓矢神と称ふ今日供奉の人甲冑と着まゝこ是蒙古

夏

田曹と著ると、此神事小始る、同日一坊を

紀事 五月廿五日より六月二日お至て富士の行人毎日

河辺ふ出て、**垢離**と申す富士權現の遙拜と見^ま富士を

諸ふねおじとりふその間男女行人とふえ病を祈禱

を索ひ行人そのわらへむ處の紙符を願主ふさつく

祈願の人々より行人ふ交りて垢離と修す藤

長と先達と称ス其会より処と富士小屋と称

子まの部撫子
六月 富士詣

の翁の出

至豆(諸國の)豆山豆山登る。所豆山登る。

その便ふ随ふその麓の領全多く人力の及ぶ所へ坂國

を修ぜむ。四道の麓行人止宿の家あり、これを坊といふ。

山伏先達^{ちやう}、叅詣^{さんぎ}の人々と饗導^{きやうどう}して登山^{とんざん}を日

午坊うまばと出て、その夜明る小及で山上小至る、すさうま行程八

里山腹三四の間大木森蔚くろくろ上樹木より晝

登る不堪を故ふ半夜ふ入て登る土人坂路中間の山

窟小屋と構へんとと篠小屋とふかし風烈しき時

室に入屋至雪水とて茶を煎じられと驚

山上所^レ在^ニ其^ノ石^ハ赤^クなり^ニ緯^ノ所^ニ石^ハあり^ニ度^ニ三里余^ノ池^ノの

常の如く、
この也をみる若し風雨不逢ふと雖も、
石の縁に坐して、
登る。

得ると富士山といふ今略して山上といふべき

定と云ふ後世善授と祈ると以てまづその人と行ふ

ハ道者といふむゝの登る処の坂路の外別ふ沙石の道

已歸るときハこの坂より下る。行人脚底草鞋と襪

みゝて穿^{うら}ぐの如くせむ^{やう}は、是^{こゝ}に^て堪^{かん}むと^{いふ}

て沙石ふ乗じ下ると八九里の間二時むろやて禁

至る、近世山の腰と巡る者ありと云と横行道といふ文極

出山と称スその行程攀躋ふ比を尋常道と倍うて見

險岨堪難いづくもとそれと苦行くるぎやうといふに九山上七月以後

小雪ありて登るころ々々哉諸方より来るも

六月、（わつ）以^{（もつ）}陳^{（ちん）}之^{（し）}一^{（いつ）}說^{（しやう）}、（しやう）富^{（ふ）}士^{（し）}八^{（はち）}人^{（にん）}、皇^{（かう）}七^{（しち）}代^{（だい）}孝^{（かう）}靈^{（れい）}天^{（てん）}、

五、三、海國の地打て海原一町之富士出現も甚奇也

垢離カウリ不フ及キ也ヤ他邦タハツより来るものも、近江の土砂と落おて
 山上カミノエふ登のぼると、近江の人ふ准すんじて平安と得うるといふ、**縁記**
 延暦二十四年託たく曰い我と浅間大神と早はやとこと、平城天皇大
 銅元年社と立て是と祭る、本地大日如來ニギハヤヒ云
 間の社ハ駿河國不盡郡ふりり、**宮記**富士
 權現と号々大山祇女ニギハヤヒ花開耶ハナノク姫ありト云

螢

月令 季夏 腐草為螢 云 註云 暑
濕の氣を得る故に螢として螢とある

舟遊

避暑と
遊ん

爲ふ此遊いとあるに江戸大坂の者、妓女及酒肉と
堆^{たい}方^{ほう}へ日午^{いちご}より舟と逆曉^{さかやけ}ふ歸ふ言舞^{まひ}最^も良^{よし}あり、

風蘭

潛確類書

一名挂蘭名花譜曰小々々蘭ふ似々々枝

幹短くして勁し、砂土を用ひ、竹の簍を取てこれと貯へ
露ある処に懸て朝夕水と洒くと、此物山石の傍に
生も取来て、撥摺の皮と以てこれと包み、こまに樹下及
い簍の下に掛く、凡と好て茂盛を故に、凡蘭と名く、花
葉蘭ふ似て、靱横ふ垂る、五六月花と開く、微香あり、
振舞水 夏、日市井の間、ふ瘠とわして、こまに柄杓及
び茶碗水と添往還、炎暑ふ苦く、ひとこし

て、酒と飲し、是と振舞水とり、五元集

まろくどゆをもと振舞水の下向道、其角

二
四

月
更衣

公事振源 けふハ衣久まれハ宮中所ニ

ら表生絹（うしろはなまきぬ）ハ胡粉（こふ）わて繪（え）とくく壁代（かきしろ）とふ撮（と）ま御畳（ごじやう）あ
どりあさりきと敷（ふ）さまふ御服（ごふく）ハ御直衣（ごぢやく）御（ご）さうの
あやの御（ご）ひとへ御張袴（ごちやうはかま）内藏寮（うちざうしやう）より奉る女房（にようばう）のきぬ
袷（あはせ）のきぬとも衣（え）ぐのむとへうら衣（え）まふしこ裳（も）ハ上臈（うさむら）
薄裳（うすも）ハ上臈薄
色常（いろじやう）の如（ごと）し、
氷と供
延喜式 主水式（しゆすいしき）云九御
氷（こ）と供（とも）するハ四月一日（しがついちにち）記（し）

氷と供

延喜式 主水式云九御
氷と供する。四月一日小祀

して九月三十日小盡云云水と貢く處々同書云山城國
 葛野郡德岡の水室愛宕郡小野の水室栗栖野の水
 室土坂の水室堅本原の水室同郡石前の水室大和國山の
 辺の郡都介の水室河内國讃良郡讃良の水室近江國
 志賀郡部花の水室丹波國桑田
 郡池辺の水室此十ヶ所あり云云
 江州八幡祭

江州八幡祭

卯中

神
社
啓
蒙

法華ノ峯八幡宮ハ淡海國蒲生郡八幡村ニ

いづ、祭る所の神石清水いづみふ同じいづみ社説
条院の御宇勸請いづみ

長徳二年放生会と行ひる寺説慶長年中関白秀次公、この法花う峯ふ城廓と構ふる時上の宮と移し下の宮ふ合と祭る其後

御當家御陣所とある其時今のお山ふ移る、別當願成就寺、往古聖徳太子開基の寺院、江別ふ四十八所あり、其四十八の終ふ此寺と建給ふ故ふ願成就寺の名あり、神社の傍ふありと普門院といふ成就寺兼帶い、やうハ坊舎五十五寺ありしが、織田信長の兵火ふつゝ悉く滅亡も氏子をもく十三ヶ村外ふ新郷とて舟木上田林の二ヶ村と加ふ例祭四月中の卯、夜宮ふ躍り、上の宮祭兩日下の宮祭兩日、その中間一日と御旅祭といふ花表と樓門との間ふ於て、九十三三圓の炬火と立高と六七間より、七度半の使と合圓ふ炬火ふ火と點じ、村々の祭太鼓やも、二圓の炬火と點じ、三社の兒三人と并殿ふ座せり、めこの兒といふめの太鼓とて、并殿の辺ふて拍子躍あり、エイクサ、ヲヤウと拍子、紀事八幡祭の神輿五基、越智川と渡る、五香水、ふの部佛生、廿日、元亨教書、高野花供、弘仁年中紀州

小遊びて勝地と相る、高野山ふ登る、金剛峯寺と創を紀伊国伊都郡高野の峯ふおつて入定の所又曰観賢、と云々表性灵集、見え、聖宝の上ふより、延喜二十一年、醍醐帝の夢中ふ弘法大師奏して曰、我衣弊ま朽め、願くハ天衣とせん、と云ふよりて、教法の徒、尤き者小勅して、紫衣一襲と野山小送る、観賢選ふ中て、山ふ入り入定の扉と啓く、ふ雲霧隔る、かかくむて、儀容と看ひ、観賢礼して曰、少年よ、道と修し梵行玷ふ、泥て遺法と奉じ、歲月と累ある、ふおつてと、黙訴する、須臾やて、真儀漸く見え、霧斂て、月の影る、く如し、観賢順礼して仰き、瞻ふ、髪甚と長し、便ち剃り落して、衣と換ふ、諸衆とて見る、とある、後世疑謗致さん、とて、観賢足目議して、石を重し、固く封ふ、○今高野山宝亀院の住持、代々此事と預る、色色の御衣と奉る、是と花供と云ハ、金堂ふて、坐、法の方の僧、集師会と行ひ、花と供するの日と、大師の、公事根源、御衣とある日と、同日のゆゑとある、是ハ四月、侍るあり、八月も名ハ同じけ、と心をもより、天皇式、徳殿ふ幸も、王御以下床ふつ、左右の御監御馬の奏、夏、こ

木下闇

茂林して暗きとて万葉の
木の晩とあり、木晩このんの暮む聞きこ有あ

柑類の花

て其頭假字の部

ふて見
るべし

鯉

和名抄 鰻鰻和名伊布之 崔島錫食經 鰻魚性伏
沈シて石間イソ小在りの 游覧志 石首魚

毎歲四月海洋より来る、數里を綿亘して其声雷の如く、海人竹筒を以て水底と探り、其声と聞らば網を下し流と截てこれと取るふく

戀鳥

拾遺 伊勢の御うゑ

戀鳥

ほととぎすの異名く
拾遺 伊勢の御うゑ

らゐん此哥より意し鳥
と異名せしちうし、

五月
五綵絲

ちの部
長命

縷の糸
小出、

今年竹ことしぐみ

若竹 時珍曰土中の包筍（さく）各時と
以て出旬（しゅん）目（め）釋（しやく）と云く

竹とあると云云是即今竹若竹あり、六十年ふとい
花咲實と結ふ其竹則枯るを綺といふ竹實と結ふと
籜といふ小あると篠といふ
大あると蕩といふあり
北母の化
本草綱目 地衣草
大明日華本草曰

母の化

本草綱目 地衣草

此乃陰濕陰湿の地、日ひふ晒さらさとして起る苔蘚コササ、石いし蕊すい時珍曰、其狀花蕊オウゴンの如し、○王柏まろく弘陶別錄弘陶別錄石上生す松しょうの如し、

高き五六寸花紫あり○桑花 六の世より
日華本艸 桑の樹のふ

生する白鮮也、地錢花の如し。本邦にも亦屋上庭園
石上樹上ふ多く苔こけを生ず。五月淋雨りんう降時毎小繁茂し
て花の状の如きものを生ず。倭名これと苔の花とのふ

胡麻時こまとき

和漢三才圖會 胡六三色ありとわふ夏至

七月いづゆ實じつ熟じくは、最早いちばん

六月

水餅祝

毛吹草 勝

滑稽難證和俗今日一ふ至して舊臘雪水小割衣する
粉餅或は勝尾或は富士より出る水餅ホを祝ひ食して
今日と呼て氷室の節句と

御舩の御卜

江次第 御舩の御卜六月十二日十日此日官奏あつた
らて弘仁式 神祇官中臣卜部ホと率て六月十日
一日齊とてあつたこと卜ふ九日卜ひ畢て十日こと

と奏す公事根源 神祇官の官人一日より本官ふ

このて是と卜ふ上卿ふあわりて内侍あつて
奏聞も是は主上の玉舩ふ御つちあつたこと

らあひ奏する義あり白鳳 五雜俎六

四年ふとめてあつた

南の凡あつた是 極暑 梁元帝詩云夏

と黄雀凡といふ 煩暑流金燦石 香

蒿散 時珍曰香蒿は夏月解表の薬冬月の麻

黄と用ふ如し氣虚の者尤多く服そ
べらむ今人香蒿の元氣と傷るともあつた有病無病
ふ抱れを藥用て藥小代て謂らくよく服して暑を

避くといふ云〇五元集 香蒿散大

がねふりて雲の峯、其角 香蒿 宗夷司

アて香蒿と種暑月蔬菜とて葉は茵陳 圃と作

ふ似る花紫やて辺ふ連アて穂とあす 心太

とてあつた

この部とてし、 四月 えびま薬

えびす草 芍薬の異名あり 御筆 梶原性

葉と名付たり云 善が万安方ホとらふえびす

べし和名抄 芍薬 須久須利 烏帽子魚

豆相の海辺、鯉先寄りんとするとき、一物流れ来る

大さ二尺をうり、形烏帽子に似て、左右の紐の如き物

あり、その色瑠璃紺や、て光澤あり、是と鯉の魚

ほ、といふ漁者、この物の漂流を、と期とて海上

小櫓と捕へ、鯉の寄ると見る、是と鯉見たり、西三日

まきて果して大ふ鯉と獲ると、烏帽子魚、名

るこ、とて 蚕簿 和漢三才圖會 蚕箔和名衣良

ふあなり、 蚕簿 梶ハ蚕簿と架も柱あり、蚕簿ハ

夏 ね

兼名死云蚕と養ふ器、其上、**枝蛙** あのかぶと蛙の糸をくし、
小施し繭と作りしむる者、

五月 豌豆

和漢三才圖會花鱗蛾の如し形外白く
内小淡紫あり中心黒色其實褐色

六月是と **六月 江戸浅間祭** 江戸浅間の社、浅
草御新場の後、

り、是と浅草の富士と云、又駒込の浅間の社あり、又本所、
目及高田の馬場、又鉄炮洲亦も同社あり、祭る所、これも
駿河ふおち、今日麥藁あて龍蛇と作り、是と條、
つけて鬻ぐもの多し、参詣の人、是と買ひて土産とす、

江戸天王祭

相傳ふ元禄のころ、め大に流疫、
よりて官小請奉りて、神田明神

の社地、小勸請ある處、祇園三社の神輿と出、て街
小渡御し奉る、こより後、毎年祇園会と修す、先大
傳馬町御旅所、神輿一基、五日出興、八日還興、小船町
御旅所、神輿二基、十日出興、十二日還興、南傳馬町御旅
所、神輿一基、七日出興、十四日還興あり、いづれも神輿還
幸の時、そのもの町の町と渡御、社人將束馬よりく、

供奉、鐙三本氏子、是、小随ふ、神輿渡御の町々、二日廢務
也、或ハ門小竹と植る家あり、是忌竹の意なり、下、其外浅
草御藏前、十住、品川、四ッ谷おちも此祭あり、中ちも品川の
神輿ハ、海汀と渡御も、天王祭とハ、牛頭天王の祭との義、
祇園会といふも、天王祭
といふハ、江戸の俗の方言あり、 **江戸山王祭** 十五日

○神社江戸永田馬場あり、祭る所、近江日吉の神と同じ、
別當勸理院僧正、神主樹下采女正、その外社家数多あり、乃
官より神領六百石と附せらる、當社のやへハ、入間郡川越
仙波といふ所より、その地仙臺仙人の住せり、古跡ありしと、
慈覺大師草創ありて、星野山無量寺と号し、天台の灵
地として山王と勸請あり、その後尊海僧正中興し、三余院
と號せり、より入皇百三代、後花園院長祿三年、太田道灌
江戸の城と築くの後、文明年中、仙波村星野山の山王と勸請
して、江戸の城護神とす、その地今の紅葉山ありといふ、

御當家御在城とあり、こより城西の貝塚小移さ
る、明暦圓祿の後、こより溜池の上あり、是今の社地
あり、江戸第一の大社神慶山魏々として、石の鳥居、五十三段の

石階松柏枝をつらねて上久し祭礼六月十五日官祭
 神田明神と九祭礼の町、南は芝と限り、西は龍町飯
 田町と限り、東は傳馬町濱町辺と限り、北は内神田と限り
 とす、神輿三基、祭礼の番組四十余番、各花やし、山鉾の一
 本練物と出ても、神輿渡御の町々、官官より、銭敷と置
 幕と張、毛氈と鋪つらぬ、軒ふ多くの提灯と釣ふ、十五日の
 未明先神渡る、太鼓是ふ添ふ、其次依の造り物ある、引山
 その次諫鼓、鶏の引山、其外の番組、例年の定
 めあり、此祭ふ龍町より、朝鮮人來朝の形ふ出立ち、布を
 造り、大なる象の練物と出さ、近年引山の外、神幸の道
 本山と出て、永田馬場より、御堀端と歴て、龍町御門より入
 上覧所と渡り、竹橋より神田橋、鎌倉河岸と過、橋より
 常盤橋、本町壹町目へ出、本石町三町目、小傳馬町、大傳馬
 町、旅籠町へ渡る、傘鉾、大吹貫、幟屋臺、引山、甲冑の法師
 あり、氏子預る處の諸侯も、又警固の武士とぞし、
 長柄鎧と立つらぬ、群行も、芝場町、葉師堂、別院あり
 の境内にて、神饌と献じ畢ると、八ッ堀日本、
 橋筋を中橋へ、のらふ夫より、本山へ還幸也、
 炎天 暑

の天と
 て 四月 手安天神祭 午の日

○江州野洲郡江辺の庄あり、永原村、北村三ヶ村の氏
 神、鎮座、年月詳らず、明和年中まで、七百余年
 あり、又永保年中より、四百年以前、延久五年、土月
 十六日、永原越前守再建、その後、應永廿六亥年、六月、永原
 越前守雅行修補、又明應七年四月十四日、同氏重秀、改め
 造る、この重秀も、越前守小任じ、廿八万石余領、京極佐々木
 の同流あり、永原小任、依て本居神とす、四月午の日、祭礼、神
 輿三基渡御あり、例祭正月土日より十三日まで、連日、千々
 行あり、巻頭ハ時の地頭の句を定例とす、此所北村李吟、出主
 の地あり、又平清盛の妾妓王も、此地ふ出生、故小土家、奉行
 判物の大繪圖、氏子三ヶ村、小傳来とす、
 又別當實光坊の説こと、祭式未詳、
 三才會 粉團木の高さ五七尺、葉ハ箱根楊柳、似て、團
 く、皺文あり、四月花とひらく、初ハ淡青色、後正白、
 横簇て、團、二三寸、種小粉團といふあり、木の高さ四五尺、
 葉狭く、長し、楮葉の葉に似て、粉團に似て、小く白し、太く半
 夏 夏

五月 天中節 提要抄五月五日午の天中節と云ふ

師と畫 部の部艾虎 天南星 天南星の條に云ふ

三月苗を生ず、荷梗不似て、其莖高二尺以來、葉弱如、兩歧相抱く、五月花を開く、蛇頭不似く、黄色七月實と結ひ、穂とある、石榴の子不似く、紅色○時珍曰一名虎掌、葉の形不似く、因に南星と根圓く

白く、形老人星の如くある故に南星と名く、云云 和名抄虎掌 鐵線花 和名三才苗會

鐵線花、按る小苗宿根より生む、一極小三葉微芍葉の鉄小似て、細く、甚勁し、故に鐵線といふ、俗稱を蔓無く、其葉架小倚て、繁衍四月花を開く、萼の下小六葉あつて、莖と抱く、亦一異あり、其花白色六の瓣平小開て、紫口く、紫色最艶美、其葉綻む、天蠶糸と綴て、總とを不似て、其うち小子あり○千葉鐵線ハ外六の瓣、白して白色常の如し、内の瓣もまゝ白色、千葉短く細く、随いてむらゝ、青き葉あり、外の瓣既小落むハ内の葉むらゝく

六月 天満御稔 廿五日 ○當社ハ摂津大坂西成郡天満あり、祭る所の神天満天

神 揚陽群談社家説小曰、天満宮の權輿ハ人皇ハ二代村上天皇の御宇、天曆年中この地ハ天満山と云ふ、小松茂生す、その梢小美光赫々たる、人々こと怪みて、帝都小告て奏聞と遂く、帝即日勅使と下し、さう時小神託ありて云、難波の梅と云ふハ、築紫系よりく、小来るハ、敬遠覺て、その由と奏を、依て菅原と此地小鎮らふ云云○例祭六月廿五日、遼物車、樂水陸とり小渡り、訖して、神輿夷の御旅所小出、往還川舟あり、數万の提灯群集、遊船多し、
書言故事 合要云、宋の真宗祥符四年、詔て六月六日と天祝の節と云ふ、
天祝節 あ

四月 給 天選秋貞賦 御給衣 給衣無窮云 ○九四月朔日と更衣と云、此日より給を用ひ、端午に至て

布衫と 網鳥 ほろきその異名、藻塩草 是ハ時鳥と細て取て、明年の夏鳴せんと云心て

青葉 青葉の簾 藻塩草 青葉の坐ハ、翡翠の翡翠の簾 坐ハ、四月朔日新しき坐と云

夏 であ

くるありと云一説ふ加茂の葵を四月朔日翠葉ふ

うけらる故青葉の葉と云一説ふ夏山の翠葉と

云云○青藍云元禄年間のこと客の誰れ母所ふ

青葉をとりたるたぐいの作例あまこけま天子の御座

とのこりふといへ扇と賜扇の并句とある余

る説いふづめり

見る**甘水**ふの部仏生会葵祭葵蔓加茂

祭の条下**雨蛙**枝蛙和漢三才圖會皆青くし

雨ふりとあるとき鳴故ふ雨蛙と名く大和本草土

鴨雨蛙といふ最も小あり色青く木の枝ふすむ云是

枝蛙**青むし**枕草紙五月九日のことといへる

て来るを青きうすやうと艶あるまじりのうす敷て

これまじこりふまじりてまねらせと云云李吟

云青ざし青麥とて**蜀葵**草葵クキ葵此三名亦

調じくる菓子あり蜀葵といふ○時珍曰

春の初め子と種冬月まのつくり苗を生を嫩る時

茹ふて五六月まで花さく木槿より大きく深紅浅

紅紫黒白色單葉

千葉の異あるなり**兼三夏物**扇をとり五

担大明以前摺扇多く團扇を用ふ○扇車扇引

扇すまひ以上増山の井ふ出うつうとを云枕草紙

のうより云河海云蝙蝠と見て扇と**汗衫**釈名衫

作すまめなる依て夏の扇の名物ハ袖の

端あらと云**昭潭志**立山縣の里婦縷績よ長せり云

竹と以て衫と為暑服ふ充衫ハ小襦○按ゆる和

俗ハ小襦袢管襦袢**汗巾**長一二尺の布の両端

のふふいなるべし端と縫ひこれを用**暑**

山堂考索陽事と用よる時則日進で北ふ**編笠**

登進て長し陽勝る故ふ湿とあり暑とある

和漢三才圖會**臺笠**今莞と編てられと作る竹の

骨を用いし呼て編笠といひて暑と禦ぐべし**洗**

鱸和俗夏月其肉と魚軒ふ作て洗ハ草の故酒**青**

小食しとと食ふとと洗ハ魚と云

夏
あ

五月雨や傘ふ付る小人形其角ころりあやの 菖蒲

今ハ十軒店尾張町其外便りよき街之是を賣く
ひく沼沢江池ふみ下るちて引心と奇なりめり○ま
りこく草末元の露ゆ五月雨ふまふ。水野のあやの

ひくちり 菖蒲の鬘あやめ 菖蒲と執りたる 菖蒲
賃仕 条下とく

の案 延喜式典藥寮式云五月五日菖蒲生菰黒木
の案四脚亭六両黒葛四升と進み省輔以下

寮頭とわふ執る人進み訖つと 菖蒲の枕あやめ 菖蒲
即退出も輔田とてこれと奏する

やめぐこひと夜むるもの枕ふひすひものさぬ夢のこし
かひ前中納言雅具後水尾院當時年中行事あやめの枕

あつむ一對の八脚枕ふふありうすやう極腹調進を御
枕ふ勾當の内侍よりゆすく其様あやめとなつ五十六す

かふ切て五すむりふあとききこと紙ひ 菖蒲湯あやめ
ぬりあて結いて両方の小口ふさぐとむ

同年中行事 五月五日の条云けふはさうふの御湯あやめ
よへのさうふの御枕一對とすすやうふつとあやめ菰殿紙

ひりりをつらと御湯ふ入る大戴礼 五月五日菰とあや
ふくも沐浴も云是菖蒲と以菰の葉ふたあや 菖

蒲の占 三潮草 女兒の戯ふあやめを結び唱へくの人ち
ひく軒のはめふとくくうわふかきふ

の糸如此のひて一事と祈る願ふ所成るものあやめゆ
ハ蜘蛛あつて網と菖蒲のうへ小曳く云 菖蒲浴

衣 京師の俗端午ハ菖蒲浴衣同帷子と典ふること必
家々ふありと官家ハ菖蒲重くと朝服あつ花

田明黄のうへ根菖蒲とゆへ表白裏紅又襦衣とゆへ表
紫裏薄藤又菖蒲重紅梅と用ふとあやめ五月五

日菖蒲とゆへ処の常の浴衣帷子と菖蒲浴衣 あやめさけ
菖蒲酒 菖蒲酒

新楚歲時記 端午ハ菖蒲の山の洞中ふ生る一寸九節
の香と以て或ハ鏝や或ハ屑と酒ふたけ以瘟疫と辟

く本草 石菖蒲一切の惡と除く端午の日菖蒲とこ
切く酒ふ漬てと飲ひ或ハ雄黄と少ししと如く

棟と佩棟草 證類本草 五月五日俗人棟の葉と取
てと佩まひ惡氣と逐へ〇時

夏 あ

ざるものと粟とを穂大やて毛長く粒粗きもの粟とを穂小やて毛短く粒細きもの粟とを苗とをふまふ穂に種類凡て數十青赤黄白黒の諸色あり早中晩あり三月種るものと上時とを五月熟と四月種るものを中時とを七月熟す五月種るもの青梅 あまのめ 咲くは葉がこれ梅のいろと下時とを八月熟と

杏子

本草綱目 杏ハ葉田くして尖あり二月紅花といはく沙あるものを少

荒布刈

和漢三才圖會 本草綱目ト海藻ハ似たりと按てふ昆布

俗あんずといふ、似て狭く黒色長きもの四五尺縦の縦文あり柔く小粒て株あり堅實やて乾け小刀の櫛とある其葉煮食ふやろ 大和本草 東南の海に生るもの形肥大より夏秋肉多味美あり冬春美あり又室鰺島鰺あり味

六月 芦の神輿

あし みの 一つの部津島祭 熱田祭

神社尾張岡年魚市郡江寄松島千竈の郷あり正殿五座第一天照太神才二素盞鳥尊才三日本武尊才四宮簀媛命 日本武尊才五建稲種命 宮簀媛の兄 大宮司の御神 右五座所より次 是とて 土用殿ハ神跡草薙の宝劔あり又熱田七社と りハ大宮ハ劔宮高藏宮大福田宮日割宮水上宮 源大夫宮是 此外振社末社一百余座あり當社ハ八人皇十二代景行天皇の御宇鎮座其後天智の御時故有て皇都遷奉 還座とて 十九年と經て天武天皇朱鳥元年よりハ高麗より あり抑當社の神事年中數度ありまつ正月十一日辰刻踏 哥の神事大福田の社より始て改所大宮ハ劔又大福田を 終ふ此社ハ倉稻魂と祀る故ハ五穀豐登と祈る神事あり 舞人十二人高巾子一人笛一人陪二人各櫻山吹と挿頭とを同 十四日ハ步射の式十五日ハ步射の的廿二日ハ兩宮の步射会三 月初巳午未の日祈年祭○同月初未の日午刻御田神社の 供御此日鳥喰の神事あり俗ハ鳥祭といふ是ハ神事いふ とにあらざる前ハ大宮祭文殿の前を祝座の長外ハ二人 平餅とりて鳥と呼ぶ此餅ハ鳥のくもさるちハ神事と

夏 あ

をじめびつひの五月五日ハ神輿鎮皇樓門上ハ神幸
 ○六月九日山鉾祭礼あり熱田ハ村よりこまこ行ハ山二輛
 同月晦日夏越の夜あり鈴の社前の川岸においてこれと修又
 ○七月七日ハ大宮の大掃除十一月初寅卯辰の日新嘗祭十月
 廿九日兩宮外院煉拂ひホあり此外諸社
 愛宕の千
 の供御ハ月々數度これ有今要と括略

日詣 廿四日神社啓蒙丹波國桑田郡水雄の北ハあり祭る神
 二座伊勢並尊火産靈神云云神祇拾遺 愛宕權現
 端の御前駒遇提命奥の御前伊舍那美尊紀事六月日
 四日愛宕詣是平日の千度ホ當るといハ俗これ千日詣と

りハ寺僧六坊ありこの日參詣の人ハ酒食と饗食とこと
 坊著といハ火札と買て歸路檜の枝と求め粽と付こと
 肩より歸る檜の枝ハ竈の上ホ挿むくのおくする
 といハ其家火災と免るといハ六坊国毎ハ檀越あり貴
 賤と擇む毎年札と贈て賀と贈るこの使と勤るものと
 中衆といハこの山嵯峨の西ホあり延喜式ホ載る所丹波の
 桑田郡ホ屬ス今ハ山城の國より本殿祭るといハ愛宕
 現垂跡本地勝軍地藏菩薩是則慶俊法師再考勸請と

る所あり當社をじめハ城北の鷹ガ峯
 小江の光仁天皇元年今の地よりつ
 荒和夜 部夏

越の後の条 被草 年中行事 夏引の麻の
 下 麻の葉流 大ぬきとてり

つるのみときまらぬ大藏卿の麻の葉と切て幣とす
 るゆふふとくまの川ハ流もあり被草といハも麻のこ
 麻の葉あててあきハ 宇景秋文暑ハ暑者あり熱して物
 とすの故ホ名く 暑日 煮グこと云云○暑き日と云

ハ六月の季あり暑と 青山嵐 夏木立の梢の緑と吹あり
 むろハ三夏と云ぬ

のまじり一点の雲あり青きくも天氣ホ東風のくもてあ
 たる青東風といハ無類の天氣ハ是と青嵐といハと 赤

草 庵文曰赤草一名山酸漿高さ七八寸あり一莖一葉葉
 吾の如くやうて薄く小きハ夏日其莖葉真紅と云

其苗山沢ホあり故ハ山酸漿と名く 花 主目田 社詩六
 と好む人夏日これと愛して花瓶ホ挿む 月青梅

多千畦碧泉乱と作と 藍菊 和漢三才圖會 四月苗
 意やく風景と云ふし と植て凡七十日むり

にいまと穂とあきく時暗且露来して拔採り曝し乾き云々採る小拔採る力稀やして苅る者多し

麻同苧 和漢三才圖會云麻大苧とも小苧とも

麻とて真苧とも羽州最上の産佳良良瀑と織るものは多し云々陸機草木疏云苧根土中不在て

春ふ至て自生も裁種すること須い苧苧の間或ふ三ふ苧苧諸国と種て歳ふふ苧苧便其皮を剥取竹とて其表と削る厚き所おのづから腹裏の筋の如きものを得て布と絹と○蕪頭曰苗の高さ七八尺葉楮の葉の如くして面青く背白く短毛あり夏秋の間細き穂青き花と著く○櫻麻櫻花のさくころ裁る故の名とも又麻の花の穂ふ似る故と

青番椒 青しといひて夏季とを

青鬼灯 青しといひて夏季とを

青瓜 青しといひて夏季とを

阿古陀瓜 色瓜といふ是江戶までと本田瓜といふ九漬瓜ふ似く長大なり

地酒 諸国名物記豊後国の製云々和漢三才圖會云南都浅茅酒云々毛吹草豊後国麻地草云々又朝生酒と書

或ハ上りり云酒方の書云麻地酒ハ豊後国より出其造法糯米粳米等分ふ合製して冬月寒水と用て是と醸し土中ふ埋め草茅の類とて是と覆ふあり冬春と経て夏月土用ふ至て則土中よりと出さふ既ふ熟せんよりて二ふりの名あり夏月

洗飯 すの部水飯云々紀事六月の飲と賞翫を

雪 早すの時

ハ民間請雨の法と修又是と雨ふといふ民人鉦と太鼓と鳴りて踊躍或ハ笠と戴き蓑と着雨中の粧とて是と祝し諸神と祈る云々

秋隣秋近し秋と待 義あり

四月下帯 御湯殿記五月五日より女房上下帷子といろくふ浴て着し附帯

あり是ハ洞中の御事ハ九俗おも地白帷子下帯と用ふ又四月より用ふ

山王祭 申の日但ニッわんバ

夏 あこ

二の 近江国日枝の神社ハ滋賀郡坂本小有、祭神大己貴尊
 申、（所謂上の）社ハ大宮大國主命（上面）二の宮（麻多羅神）
 及ハ金比羅神（天台山寺龍寺の鎮守小准を）如來聖真
 子ハ幡大菩薩（阿彌）八王子灌頂大法王子（千手）補陀洛
 山と表す、客人の宮、白山明神の灵尊、去來諾の大神、山王の
 行化と助け、北陸と出てこの山小来現ある故、客人の宮と
 以（十一）禪子ハ地蔵の應化ハ大師此山と開き成就の後上
 定心院と創む、敷山東の堂あり、十禪師と置き、九人と
 えりひ得て一人と欽く、安慮と得て、數満（十）禪師の才
 器と歡（十）然（一）てゑる、故ハ社とこの所小建て
 祭供も、（十）禪師とり、賢（普）中の七社、牛御子ハ大威徳大
 行事ハ毘沙門早尾ハ不動氣比（聖觀音）下の王子ハ虚空藏
 王子の宮の珠聖女ハ如意輪あり、下の七社小禪師ハ弥勒龍樹
 惡王子ハ愛染新行事ハ吉祥天岩滝ハ弁天山、末ハ利支天
 叙の宮ハ不動竈殿ハ大日、以上廿二社あり、○三月十八日、山王祭
 の神とこの所ハ於て、伐取（四月三日）至（至）て西教寺の側
 の松の木小寄せけて又山王の社前小置、夜小入（諸人）と
 とき、大津の四の宮小立ッ、祭の日神幸の時、大津より大宮

の拜殿よ返し入奉る、○申の日、江川東坂本の山王祭、午
 の刻過、田樂法師獅子舞、比叡けの人並、衆徒前馳して
 神樂と迎へ、七社の神樂山と下る時、前後とあら（八）鏡（ハ）
 す、（舟）のせ、山門の僧徒、棧敷と構へ、翠簾とさき
 て是ととも、横棧鋪といハ田樂法師ホこの前小於て
 藝とあま、この日京の山王町より、供物と日吉の社小献、前日
 天台の當座主の御室小至て、と加持し、翌日、東坂本に至
 りて供も、又江州膳所の地人御供と献、祭の日、縛船二艘湖
 上小浮め、音楽と奏（て）件の供物と献備（是）御供船と
 け、その船小乗るもの、多くハ猿皮と着て、猿の假面（被）
 猿ハ元來日吉の使令（ま）、その中、六社の神樂ハ、夜小供
 ち、後湖水小撒（つ）大宮一社の神供ハ、神樂の前小
 置、（三）の後神樂船と陸地小寄せ、神馬相（じう）得て、樂
 中の神騎（ま）と本社小入る、といハ、七社の空樂ハ、坂本の
 地人（と）と昇て、神樂屋へ入る、今日山門小屬、その供
 人、其（盛）盛とあらハ、神幸と警固も、俗藝ハ山王祭小礙る
 もの、あれ、寒の語ハ、今日の（と）と、人々と害とあら及
 ぶの語ハ、祭（の）前夜い、ま、八王子の神樂と祭（ら）急

小山坂と下りて七社の神輿各本社七ヶ所の拜殿に居り、
 抑山王祭ハ七ヶ年詣てまゝ一々盡く見つゝしづゝといふも
 古老傳へてり、元二月中の中の日ハ王子三宮の兩神輿とハ
 王子の山上拜殿に昇り、四月末の日に至りて、件二社
 と神輿ハ并に奉ると午の神事といふハ王子拜殿に元来
 山嶮に造り出でて階下遙く低し、神輿半ハ拜殿より半
 拜殿の軒下と越て外に出し、神輿の先の木の棒に柱とて
 相留と待て柱と抜れば、神輿より下り落つる下ハ神輿
 昇數十人並居て中より請取直ち小山坂と下り、誠生死と
 の一時に究む、二と八瀬の土人預て役より所あり、こと神
 輿落るに下りし終りて、兩社と二の宮の拜殿ハ並に奉ると、
 宮の神輿と拜殿ハ并に奉ると、近年末の日の晩といふ
 十禪師の神輿も又同く、未の日二の宮、十禪師、四社の神輿
 と大政所より奉る、同時警固の式あり、大宮、聖真、客
 の宮ハ大宮の拜殿より奉る、此間より各人各自素絹
 紫の刺ぬき五條袈裟と以頭とつゝ、太刀と佩、その余數十
 輩、甲冑と著し、鎗長刀と持て、その所と警固し、神前より武
 器と立つらぬ、終夜警固の勢いとあり、各下山も、此日京

祇園の社より御供と捧げ来りて酉の刺献備ふ、これと未の
 御供といふ暮より及て宵宮落りといふとあり、大政所四社の神
 輿と石垣の際へ出し、石壇の下より柱立て、神輿の先の木は棒
 端と持せ置て、こと又合圖と待て、四社一同に落さんと設け
 おく、神事の役人その所々来集りて、時刻ふ至り、獅子舞
 大政所より来り、二の社三の宮に次第に舞て退く、次に田樂法師
 装束ハ菅笠と被り、藝と施し、神輿と拜を、この時ハ人頭取
 狂言とし、わざとあめ、うはれといふ、田樂笠とぬぎ、立烏帽子
 と着て、さし舞ふ、この舞の扇と奉ると相國ハ神輿と落を
 四社の神輿、昇中とてうけり、先とやらといひ、さる收納所の前
 嵐の言ふ、前後とも相揃ひ是より次第の如く、神輿と並
 大宮の拜殿に幸せ、七社合せ奉る、當日申の日、山門の大衆、棧
 敷への義あり、云々公人甲冑より衆徒と警固を棧敷の前
 ふかし、獅子舞、田樂あり、是ハ宵宮ハ勅使御参向、當日まで
 御滞留勅使への饗應の道意とといふ、八皇七代後三條院延
 久四年四月廿三日始て祭の官幣と立ち、のよし、廿二社迄に
 出、或ハ六十四代圓融院、貞元二年四月廿六日始て上卿并外記
 史諸司と遣はさる、といへり、○九神馬の催し、二番の鐘

應じて、恭詣の輩石の鳥居へ来て集る三塔の公人数
 とつて、未の刻より四の官より神と渡り、磯成東帯
 濱成太官、唐装束にて各馬上七度半の使至り神と渡り
 此間長け 社家春日祭といふあり、社家の拍掌と待
 て、大宮前の森と動きて合圍して、神輿各先とつら
 といひ昇出ても前後の勝負石の鳥居まであり、神
 輿ハ飛ぶが如くハ柳ふいてるうふおいて神輿と船に乗
 せ奉るも又先後とつらとつこの神輿船ハ潮辺七浦あり
 毎至りて出で、是より辛寄の社にて神供の義あり
 七社神輿の駕輿、例年紫齊精進して、今日
 勝負の手柄と褒美と禄と賜ふあり、谷々勝手より
 これと出で、日次紀事ハ七社唐寄より、神馬と陸地還幸と
 いふ誤り、日吉鎮座記祭儀云、卯月の祭礼ハ、神館大
 櫓木と以て神幸の祝詞と奏し、唐寄より先盟の如く恒世
 齋栗の御供料と奉る、神輿と出し祭ると、桓武天皇延暦
 十年と云、又御舟祭始る、近元年中供水以後の例云、七社
 の神輿ハ御供と献るも各七膳献供の式畢て神輿昇り、輩
 ハ唐寄へ上り、陸地と本社へ帰る、西ハ高野矢耆修寺、佛

格寺、田中、山中の人東ハ大津志賀、河野坂本、苗鹿雄、泰、仰木、
 乳母、真野亦の土人也、神輿舟ハ若宮の濱へ着岸、是より上り濱
 とつ所の土人神輿と昇き、炬火挑り、本社へ還御あり、登
 西の日廊の神事といふ者大坂より来て、神輿と奏し終る
 後神輿と 神取 かの部神祭 吉日祭より
 納りあり、三枝祭 拾枝抄い川
 (大和國添上郡率川の阿波神社の祭、或説ハ率川と三枝と
 別社ハ率川の社の南ハ三枝卿子の社あり、諸神記ハ件ハ社ハ
 右大臣是公の建立あり、是より南家の苗裔、この祭と行
 ふ、又一説ハ三枝の花を折て酒樽ふらざる、故ハ三枝の祭と申
 こと、頭取の説ハ三枝ハ、あふきあり、未廣るもバ祝と云
 る、云、公事根源、是公の建立と申口傳あれど、今といふ書ハ
 淡海公の撰とれて、養老年中ハ奏覽せらる、是公の大臣ハ淡海
 公の曾孫、この正既ハ今ハゆれ、是公の再興ハ、東海
 嵯峨祭 中の亥ハ丹波國桑田郡水雄の北、白雲寺、後、古
 権現の祭あり、滑替雜談、例祭神輿三基
 清涼寺ハあらして、祭日の送て迎へ、此地より寺ハ山の
 下ありといふ、神地ハ属も、故ハ清涼寺の櫻川ハ頼して

愛宕山より蓋故あるこの日一基の神興小冠らるる金鳳

ハ愛宕山より下る此金鳳下ると期として神幸と催入

基ハ野山大明神と申て野宮より遷幸と云ふは土

人本居神と云ふこの祭土人嫁と妓女の如く藝をたづ

せ勾欄ふたて舞ひ近 **櫻の實** 和漢三才圖會清

年引山或ハ金針と出 明の前後花とい

らき實と結ふ大小大豆をくり生ハ青く熟まは赤黒し

あり小兒好でこまを食ふ味ハ甘美よく魚毒と解と俗

此子と櫻 **五月** くの部菜毛 **五月の**

坊といふ の余小出

鏡 異聞集唐の天室中楊州より水心鏡と進る背小盤

龍あり五月楊子江心ふたてこまを鑄る背龍願る異

なり後早をこまを祈る則雨ふ 搜神記金錫の性

一あり五月丙子日午時鑄ると陽燧とも十月壬子の日子

時鑄ると陰燧とも○時珍高臺録と引て云陽燧一名陽

符火と日ふとも陰燧一名陰符水と月ふとも蓋銅とて

こまを造るこまを火水の鏡といふ **五雜俎** 唐より以前

ハ楊州より鏡と貢る五月五日と以楊子江心の水と取

こまを鑄る凡鏡ハ他ふし **左近の真手番** の日

水清冽ありハ則佳と云ふ 公事根源

五月三日ハ左近の荒手番四日ハ右近の真手番

五日ハ左近の真手番六日ハ右近の真手番とむしハ左右

近の馬場を騎射のしありしハ名射手なりハ大将の申

ふむしハ云此日隨身褌の尻と折て着る故ハ云ふ

日といふあり荒手番も同じと云ふより真手番正月も

五月五日といふりの日といふよりハ折の略 河海抄

左近の馬場ハ一条西洞院 **寂勝講** 公事根源

右近の馬場ハ一条大宮在 て日と云ふ

四ヶの大手 東大良福 寂勝講の師と云ふと云ふ

證義講師聴衆あり寂勝王經と清涼殿と講と云

元亨釈書 永延皇帝一条 寛弘六年六月十九名徳と云中

ふ延て寂勝王經と講論と云と五日立て式と云と元代或

行ハ或ハ止む今 **五月雨** 梅雨 入梅 **和訓義解**

と後例と云ふ 梅雨 入梅 **五月雨** 和訓義解

とつと雨降るの畧 〇梅雨 坪雅 四五月の中梅黄み

落んとする時水潤土厚して柱礎より汚蒸散りて

夏

雨ふると梅雨といふ故三月雨ふると迎梅といふ
 五月雨ふると送梅といふ○入梅（四時集要）閏人立夏
 の後庚子日逢ふと入梅といふ芒種の後壬子日逢ふと出梅
 といふ雨といふと耕耨のころなり○（紀事）立春後百三十
 五日大概梅雨といふ諸物徴有る此節陸地處より水うちら
 ると涌出る俗に津井穴といふ○（墜栗花穴）（紀事）根州大田郡
 丹生山田の庄原の村に才天の祠のなり毎年水うちら
 涌て期と怒るは是則中將姫の婿白瀑前と祭るのあり
 墜栗花左衛門といふ
 早苗 早少女 たの部田植の
 余下見るべし

柿の花

和漢三才圖會坂樹（日本）賢木（本朝）龍眼木（漢語）
 和名佐加岐正字未詳按之小本朝神社必
 用の木あり字屠の木密と用ふるがごとし葉小く色深
 青やして香あり四時周も小小白花とひらき實と結ぶ
 生い青く熟も紅なり日本紀ふ八百萬の神より天
 の香久山の坂樹と取て天の窓戸の事と祈る以来
 神の縁木
 柘榴は花 （潛確類書）石榴種甚多し下葉
 深紅やて實と結ぶものと宝珠

とろろの花

葉の一種白花とひらく白榴といふ黄花とひらく黄榴
 と（博物志）漢の張騫西域へ使を遣ふ林安石
 國の榴の種を得て歸る故小安石榴と名づく
 ところの花
 多く生え葉ハ樹に似て刺あり葉葉の
 俗名あり

五月躑躅

故小名く和漢三才圖會山躑躅山石榴杜鵑花和名阿伊豆
 豆之今云さつき本草綱目云處處山谷あり高き所の四
 五尺低き所九二尺春苗と生じ葉の色浅緑枝小くして花
 繁し一枝數葉二月始めて花とひらき蓮華躑躅の如くやし
 て石榴の花の如し紅紫五出千葉ありりりありと咲くふ
 品類三百余種に至る四月をしめて開き五月と盛なり俗に
 五月と称す根州須賀の谷より二の谷權現山に至る凡三四里
 たり遠州秋葉山の禁乾川の両辺もより三四里たり躑
 躅杜鵑花甚多し夏
 鷺撫子 かの部撫子
 月ふ満山錦のごとき
 早

夏 さ

和漢三才圖會 松茸ハ九月の交と盛とい他月
とあり九月出るものと俗に早松茸と名く

其味香曰香

鄉子

和漢三才圖會 倭名抄云蠻子名未

10. 20. 5. 11.

佐之酒醋の上にとふ小虫あり梅

をふ酢醃腐肉の中み初め蛆を生きて羽化して小蠅と

身黒く羽黄色大さ一分不_レ過_ニ也眼鏡と以_テ之_ニ

と視る。蠅と異あるところあり然る小蠅の子

一類二種卵生化生異之

李沈愁霖歌云棄破芭異未休滴臘光透長庭沙色恨

無長釵一千仞
割斷頑雲看
暗碧藏玉
くくくくの暗玉と

とてぬ空よりや月より月
六月
西國年表

とつてしるべき人 顯昭
 月 西園寺 顯安

音講 十六日 紀事 六月十六日十七日 西園寺家妙音講

と修せしむ今日種々の珍果と家の翌日

天へ供_レ堂上並ニ衆人相集_リて管絃と催_ス又西園寺

家の外琵琶と彈ひたるの家又此式あり近世故ありて十六

日此と修ス
体源抄
妙音院相國師長公ちやうきやう妙音天と四條

の北室町の東に造りしめしむ。毎月十八日如音講を

と行^く云^く〇妙^{さう}
 二頁^{ふた}の京^{きやう}十九日
 紀事^{きじ}六月十九

座頭の涼

十九日
紀事
六月十九

盲天ハ奇才天ノ座頭の痛
日盲人納涼会ハ是

と涼すずといふ在京けいけうの檢校けんけう及勾當こうどう上首一人清聚せいふ菴あん會かい々

心經と轉讀を、頭人檢校饗應と設け六派の中替者四

人と撰えらて平家と談だんま暑氣甚しく座席狭せう狭せう小食

校の外勾當上首其以下並遠方の人來会せしむ又

其外ハ粗ク二月十日
之々廿一日計
硯具川田

座摩れ御被

太神宮、十五代申力皇^{しんぢくみ}、三^{さん}年^{ねん}、
昂東^{きやうとう}、

聖天子御一五仁功皇居三朝（三朝）歸陽（歸陽）雲入京

不立天皇 廿四^ノ年^ノ夏^ニて 所船難波の岸^ニ浮見石の邊^ニ

寧ろ神璽安鎮の爲齋したまふの地なり神功皇后十

年庚子難波大江の岸田菴の島に鎮座の鎮坐石といふ

祭る所生井の神福井の神細長井の神右の三津井の神

竈の神名波比祇の神阿須波の神二座を加へて五座、次

例祭六月廿二日夏越の大抜あり神薬師旅所ふ渡りあり鎮

座の旧跡、八軒屋の南石町ふあり、今猶鎮座石にう、俗にまこと

神功皇后の憩息石といふ此辺をさへて渡辺大江の岸といふ

今の天神橋一名渡辺橋といふ、大江の岸ふある故小名く南、

城内小属も北ハ免餓野、南北と田菰の島といふ、江戸
 の辺まで當社の境内ありて、未社のまへに、天正年中圓江
 の側には、**延喜式** 坐の社○祭礼當日氏子の
 市民種々の遊り物と出で、社司、西横川の川上ふ床と攝へ
 氏子の形代と、**小蠅声神** 神代卷然ととも彼地多
 流し櫻と修、**小蠅声神** 螢火光く神及び蠅声
 邪神あり、復草木咸能言語あり、云 **奥儀抄** といふあり
 いふ、譬ハ夏のまへのちをみこまて、さうふりき神のゆ
 りあり、いふことあり、**三伏** **陰陽書** 夏至より三の庚
 とて六月よりいふあり、**三伏** 初伏とも、四の庚と中
 伏とも、立秋の後、初の庚と
さうし井 いの部井戸替
 末伏とも、是と三伏といふ、
鯖鈎 時珍白青魚亦鯖、作色を以て名く、大なる
 四月多し、數万浪の爲ふ漂ふ所、**鷺草** **和漢三才圖會** 能登の海上ふ
 と鈎せむ、細せむ、亦獲べし、**鷺草** **和漢三才圖會**
 草あり、春苗と生む、麥の嫩苗の如し、高さ尺より、六月莖を
 抽んで花を開く、正白色形、鷺の如し、故ふ名く、**連鷺草**

といふ、一種あり、高さ五六寸、葉大く、万年青
 の嫩葉に似、花白色、鷺千有餘群飛、小似と云、**櫻麻**
 あつ部麻の、**紅豆** **和漢三才圖會** 十八紅豆長大なる者
 条より、**紅豆** 本草ふ相混して其莢長きもの二
 尺ふ至るといふ者、是あり、夏至の前ふ種と下る、莢長
 又籬ふ延其莢、尺余あり、その子九十八むり、り、故ふ俗
 呼で十八紅豆といふ、六七月莢の嫩き
 ものを煮て食ふ、味甘美、赤白の二種有、**き** **四月**
擬階の奏 **七** **公事根源** 四月七日ら、二月の列
 見の時の成選の短冊と、二首あり、
 て、あゝと、大臣奏聞する儀あり、列見、逆列の時、よこ
 返るあり、よこ返るめれば、短冊と、よこ返る、よこ返る、
 退出、さうなることあり、**頭書** 擬階の奏擬の議
 也、誰々を加階させらるゝと、議する奏あり、**桐**
け花 時珍白桐、花筒と、さう、故ふこと、桐と名く、
 其葉田大、やうて尖り、長く、角あり、光り滑
 やう、と、森あり、最生長し、易し、花と先う、葉と後、
 三月花とひらく、**牽牛子** の、う、白色花心微紅、**其**

木輕虛皮の色粗白し故に白桐と名く。○梧桐一名青如狼狸。○宗奭曰梧桐四月嫩葉小花を開く葉花の如

し。天和本草梧桐又青桐といふ古人詩歌詠せしは是あり世に白桐多く梧桐稀し和名抄梧桐者三月花

紫し琴瑟ふ作るふ金柑の花時珍曰其樹橘小似堪ともゆれ是ありて甚く高大あらざ

五月白花枳穀の花時珍曰木橘の如くやして小く高し五七尺葉橙の如く刺多

し春白花鴨足草一名ゆきの下木芍藥其

名賈耽花譜天竺中禁中初めて木芍藥と重んず四本と得たり紅紫浅紅通白興慶池の東沈香亭小移し植

と云○時珍曰牡丹其花芍羊蹄花羊蹄根時珍曰藥不似て宿幹木小似たり

葉の長さ尺餘牛の舌の形小似たり夏小入し莖と起花と開く實と結る夏至節枯る羊蹄根を以て名る

根長蘆菔小似て莖赤し和訓義解俗名のぬききくといふ夏小至て小黄花をひらく其根大黃小似たり○和

大黃といふ者是あり莖花とも小黃赤の二種あり其實枝ちのり振ア動せその音きくといふ

葦鳥葦原雀葦鷺葦和漢三才論金蘆虎蘆原葦葦葦割蘆鷺鳥以上俗名按さる小

状態の鶯小似て大さ雀の如し青灰の斑色長き尾田沢草の中小在て好んで葦中の虫と食ふ其鳴声喧

故小此兼三夏物切麥ひの部冷麥木布の糸小出

紀事夏日奈良良瀑布ハ講布高宮布木市の類也云云麻布葛布藤布小のいまだ瀑とて生布といふ

木布といふ庄五月儀方と書五雜俎五月五日す布小同し

字と書いふと家の四方小粘競駢くの部葉騎

つとて其年蚊蠅と退く年中行事歌合五月五日豊樂院にて廿日ハ騎射と

射御覽じけるあり是と馬弓といふ天子群臣みち

はめつらと冠ふりて節會の儀式ありし

続金縷といひけるいふやと貞あることと云れ

夏き

祇園の神輿洗

晦日 紀事 五月晦日祇園の社

火災と被^レたを茅^レ被^レといふ夜ふけて神輿洗あり元其式
 神輿三基所謂素盞^ニ島命^ニ大政所と号^ス西八稻田姫少
 將井と号^ス東、龍王女今御前ト号^ス大政所今御前の神
 輿二基ハ神輿屋と出し直^ニ舞殿^ニ入^ル少將井の神輿
 一基ハ神輿屋より南門と出て石の鳥居より松林とまぎ
 祇園町より目病の地藏堂の前と過^リ鴨川の辺に廻^リ
 つゆへ河水ハ神輿と濯^リてこもを洗ふこと神輿洗とい
 つゆ今この義ありといへども旧きよりてこもを称さざりて
 後再び祇園町より西樓門入^リ二基の神輿と共^ニ舞
 殿に安置するの供奉四糸芝居の役者竿の先ハ提灯と
 張外面ハ各姓名と号^ス高く是を舉^ゲ祇園の町々も家
 毎ハ高く提灯と張る又六月十四日祭礼終^リて後神輿
 三輿社頭ハ在^リも同^ク十八日の夜二基の神輿ハ直^ニ神輿
 屋入^リ少將井の神輿ハ今夜の式の如^ク元神輿三基
 黄衣の法師三^人各常^ニ金銀花^をハの部忍冬^の
 こもを預^メて主宰^ス也

瓜

時珍曰胡瓜張騫西域小使^リ種^ヲ得^テ故^ニ胡瓜^ト
 名^ク按^ズもる^ハ拾遺錄云隋の大業四年諱^リと避^テ

玉簪

和漢三才圖會此者葉圓^ク潤^クして末^ハ稿^ノ楠^ノ
 干^ノの形^ハ似^テり故^ニ俗呼^ビてぎわしとい^フ五月花^ト

本草

時珍曰玉簪一名白鶴仙共に花の象と以^テ名^ス
 と命^メる人家栽^テ花草と以^テ二月苗と生^シて最^ニ高^ク

六月

祇園會
 神社啓蒙 二十二社註式ニ人皇六十四代四融院天
 十四日 祿元年六月十四日御靈會と始め今歲よりい^ハと

六月

祇園會
 神社啓蒙 二十二社註式ニ人皇六十四代四融院天
 十四日 祿元年六月十四日御靈會と始め今歲よりい^ハと

六月

祇園會
 神社啓蒙 二十二社註式ニ人皇六十四代四融院天
 十四日 祿元年六月十四日御靈會と始め今歲よりい^ハと

六月

祇園會
 神社啓蒙 二十二社註式ニ人皇六十四代四融院天
 十四日 祿元年六月十四日御靈會と始め今歲よりい^ハと

六月

祇園會
 神社啓蒙 二十二社註式ニ人皇六十四代四融院天
 十四日 祿元年六月十四日御靈會と始め今歲よりい^ハと

行ハ紀事ニ先七日の朝巳の刻大鉾六本各四条通りと東洞院の西ふ出とと渡るといふ六本の鉾各称号あり、其中長刀鉾ハととふ及ぶと毎年魁首ハこの鉾、四条通りと東の方の先ふとふより、此鉾行ぶ時、次の鉾過るとある、西谷鉾と身をも洲濱鉾ハ或は放下鉾と称と、この西の方の終つとふより、故ふこの三本間ととふ及ぶ、この間小鷄鉾、菊水鉾、月鉾、三本船鉾一本並大神山、飛天神山、古平山、太子山、山伏山、孟宗山、琴破山、白樂天山、郭巨山、芦荊山、蟠蜉山、笠鉾山、二本花盗入山、木賊荊山、岩戸山、舟鉾、以上十七本、九鉾一本、後山三本連行、まきのふ、角堂ふ、おいて取とこの間の次の事のごと相傳ふ、長刀鉾の長刀ハ三条宗近う作とくと、民間癒と患ふ、このまきといふとく、病愈といふ、九鉾毎ふ長さ十余丈余、下ふ車輪二ふと施し、左右ふ大縄とつけ、て數十人こもといふ、その年役ふ從小児、この上ふ乗り、首は宝冠といふ、腰ふ羯鼓と繫き、躍るとも、左右侍立の小童、團扇といて、こもと揮揚と、笛、鉦、大鼓、木の物ふて、こもと拍と、九鉾毎ふ一本一箇うしろより、この大

ある物、車ふりせて、こもといふ、京極と下ふ、五条松原通りより、各本所ふ還る、神輿旅所ふ至て神と假宮ふ、とと十四日巳の刻、こもふ山渡る、分一辨慶山、この次鈴鹿山、觀音山、八幡山、役行者山、黒主山、淨明山、鯉山、以上八本、昨日とと所の間の次ふ、因てこもと渡と、九鷹野山、才十船鉾、間ととふ及ぶ、此鉾三条通、西の終、こもより、西ハ三条より、東ハ京極と、歴、四条通、こも過て、本所ふ還る、同日午の刻、こもふ三社の神も、神輿ふ移し、旅所こも、四条通、この西と歴て、大宮通、御供町ふ至て、三社の神輿と安置し、御供と献と終て、後東の方、三条通、こも過、京極と歴、四条通、こもより、木山ふ入る、兩日、前後の祭式古例ある、こもり、畧之、祇園臨時の祭

十五日、諸神根元抄、天延三年、田融院の御宇、六月十五日始て走馬と奉らふ、勅樂東遊、御幣水の使、左少將藤原理無、左右御馬五足あり、左右近衛の官人供奉、この後中絶と、崇徳院、天治以後、毎年相續と、慈覺大師傳、田融院、天延二年、甲戌、感心院と、以て師ふ附と、三十二社註式、天延年中、祇園の社、こも、以て日吉の末社と、ハ、この臨時祭ハ、慈覺

大師寺務の翌年より行々今まゝ北野九度詣あそび

猶祇園宮殿の傍に大師の尊像を置おき九日神社考北野の聖廟天慶三年七月十六日右京七条

坊の婢文子小託して右京の馬場を逮とらふ欲き其女を甚く賤いやして宮構をさるるありて家の側わきに祠を天曆

元年六月九日始て北野に移うつり滑枕耳雜談富世に至て毎

歲今日九度詣と称して南門の外并慶松の邊或は東向

觀音の堂前より神前より往返九度して神拜かみうやりせり

是聖廟此地に遷座の日ありふよきく木耳取きく時珍曰木耳

より九度ハ九日の義を用ふ也きく朽木の上生

む枝葉多く濕熱の氣を生る所木耳木蛾きくといふ○按ずる

ふ此物多く梅雨の前後は生む六月に至て木耳堅く備ふ

此時取きく麒麟草きりんそう漢名未詳高さ尺をこり莖葉景天

に似て小く其葉淺緑ありて鋸齒のこぎり

あり莖の端は花を生む花由ま景天に似て色黄きん

あり夏より秋に至て其花猶あり景天の別種なりきん

瓜うり授州兎原郡田辺村小路村より銀瓜ぎんか参州の産其

こまを outcome 其色黄金の如し

四月雪見草ゆきみくさ

見草名も雪よゆき卯の花の異名あり藏玉お

つげゆきつむゆき鴨足草鴨足の處ふ生人本草綱目蠅臂虎耳

亦石山の上ふ裁高さ五六寸細き毛あり一莖一葉荷蓋の

狀の如し葉の大き錢の狀の如し初生小莖の葉及處の互

の形ふ似たり夏小和名鉾蓋

花とひらく淡紅色室云葉

浴の法七物其七ツを內衣といふ和名由加多比良論語註

明衣ハ布と以て沐浴の衣なり○今ハ夏月平服を所

五月百合ゆき

と以て合成さ或ハ云百合病を治む故ふ名く其葉短く

して潤く微竹の葉に似たり白花四垂の者百合の

百合鬼百合袂百合黒百合博多百合車百合透百合

鹿の子百合ホの數品あり各其頭字の部わわちふれ

ばたづふ六月夕被ふふの部夏被ふ白雨ふ

るべしふの条ふ出

夏ゆめ

月令此月土潤溽暑大雨時行漢字和訓五色線三夏の

雨こと錦雨といふ御今白雨と書ことハ天満の森由巳

法橋山谷詩ふありと申されりむ九執筆の夕顔

時書始し文字之離騷註凍雨ハ夏天の暴雨

和漢才苗会彼岸の山ふ種と下し立夏前後ふ種と移

五六月正白花をむらく日午ハ潤と暮ふ盛故ふ夕顔

と称を實と結ぶ早晚の二種あり

夕顔や秋ハいろくのうづべり翁

冥途の鳥三魂と縛り關の樹下ハ至るハ二の鳥

棲掌一と無常鳥と名づく二と抜目鳥と名づく我汝

舊里ハ化して鷓鴣鳥とあり怪語と示して別都頓宜

壽鳴ん我汝舊里ハ化して鳥鳥とあり怪語と示して阿和薩迦とありハ倭名抄鷓鴣和名保度々

三夏物め小見ぬ鳥こも蟬蟬とつゝ證歌未考飯

鮓毛吹草和州南都飯鮓〇世俗まて夏月とを

賞とて其製多しといとも京の六條南都の製

み四月水屋の能あり四月五日紀事南都

水屋川の南水屋の社あり祭る所の神二座素盞鳴尊

稲田姫より云此祭ハ伏見院の御宇疫病流行ふよりて

始めて行ひしといふハ神樂亦ありたりあや今ハ

申樂四番あり地人能藝と施とて四月四日五日あり御

形の日うの部賀茂祭三月過鳥ほろこき

躬恒抄四月五月六月よりあやハつきとをこの人

〇こみこの雲間と鳴てまゐるくわりの白良のつぎ

まこ鳥都草大和本草細草ハ四月黄花とむ

大伴黒主らく花の形豎豆の花ハ似て色よ

一葉小ありて三ふわりハ仙臺萩の如く蜜柑れ

して小あり實ハ莢ありて兩々相對と

花本草綱目樹の高さ丈餘其葉兩頭小ハ綠色

ありて面光る四月小花とひいろ色白くして甚

香し大和本草其花と兼三夏物短夜

花橘ハ古哥りよえて夏み

明安 月令廣義 夏至の節晝六十一刻三十分夜三十

八刻三十分 古今 夏の夜のあやうとていふは

ときもなりしとふ明るものなり 貫之 水鯪 和漢三

〇寐入らぬふ飯焚家と明安き冬松 才高全

惠曾魚正字未詳按ずるふ鯪類して灰色小黃と帶

頭畧蠅蛇の如し鱗硬く鬣短し下小碧の線丈二三

條あり大サ五六寸より尺半ふ至る 糸切齒 水鯪水鯪

此節と賞とひらきと潮ふひと一夜と越て生哺

用ひ又潮ふ漬ると其儘用ると畿内にて 水鯪 和漢

切流し漬流しといふことと水鯪といふ 三才

備会 海鰻 慈鰻 鰻魚和名波無俗波毛唐音の略

ふ俗小鰻の字と用ふる其で非あり 糸切齒 五月の頃

ハ潮も自然と多し此時磯辺へあると網ひて取るこゝと

と水鯪といふこと又一説小鯪鰻の兩種と大坂より大和へ

送るふ桶の水と湛へ魚と漬る大和川と舟ひて引のゐる

大和の土人鯪と才ふ賞し鯛よりと勝りとも彼水

小浸し大和へ送る 月令 孟夏月 蟪蛄 鳴蟪蛄出本草綱目

蚯蚓出

土龍地龍子 歌女おの諸名あり〇時珍曰術家云蚓

雲と起るべし又陰暗と知る故ふ土龍地龍子の名あり

其鳴と長吟 海松 崔禹錫食經 水

故二哥女といふ 松狀松の如くふ

て葉あり 土佐日記 おむつれくふハ子の日うのまぬ

らむうと松とぞふふのあふのものと 源氏葵の巻 もの

ふあき千ひらの底のふふふこのぬい

ゆくも名はるふふふのふふふ 源氏

すまのし 通俗志 糸切齒 年浪草 ホいふまうハ

水馬虫とす わくうせとふハ蚊虫の事

とて青藍按ずるふ今も關東わてハ蚊虫とすすあし

とてわくうせとの説ふふふふふハ猶まの部蚊虫の

糸すの部水馬虫の糸た 水鳥の巢 浮巢

かひふふふふふふふふ 宇巢 鳥穴ふあると窠といひ水ふふふと巢といふハ本

朝食鑑 菰の集解云菰の葉蒲葦と類して蔓茂

す夏月水鳥此中ふ 六月 御手洗詣 十九 日よ

夏 み

井川
道郷食祭

公事根源 具ハ疫神の祭あり毎
年ハ必行ワルキトシ、近ヅルハ絶

て侍るや、鬼魅の他方より京路ふ入るゝを、路上ふ
供物とそあへて祭る。鎮火道饗の祭と、四角四境の祭と
申す。水け合あひ
通俗志 ふるさとといふは、是より卑
賤の者、夏日炎暑ふ堪へず、水練の

まねびわして大勢集る、其奥ふ乗じ左右ふるこの
 まて五ふ水とあひせうけて、勝負と争ふといふ、
 荷筭かのこ 蕉頌曰、蕉、荷、春、初て葉を生じ、甘蕉ふ似て、
 根、姜、牙ふ似たり、其葉又、舌る、根、直、下り、見

其性陰と好む木の
 水芙蓉
 貞享式此名ハ新撰あり芙蓉と

和漢とわふ秋の部に入るといふも、水芙蓉といふ時、漢ふ
蓮の一名とす、倭ふハ和らけて水芙蓉と讀むとも、芙蓉
ふ水と結びくう、散るといふ詞とをてハ、決して夏う
用ふべきあり、秋の芙蓉ハ陸ふ咲て、凋てちらぬ物ぢうハ
之云云 **掇叢集** 附芙蓉の花のうつくしちる云云
ちると云言とて夏の句とちる、證句とをてい、
水

葵 あひ
 本名葵。又鳥葵と云。水鏡にもいふ。葉
 如くうせと

夏
子
志

水中に生立て、潔く人家近き池にも生ぜど、依て見ゆる人稀。こゝろきと水葵とおぼえたる輩も、この人浮

蓄ハ秋より碧花あり混むべし

四月 白重

桃花葉 白重表裏

白室平絹更衣の時上下ふくまを著、蔓葉は薔き塩ふ依て

授て生も故に薔葉と名く、其莖棘刺多く、其子簇て

生じ、管星の如し、故にふくまと管買と名く、又曰春嫩き

戯と抽んで、既ふ長もちるときハ最と成す、蔓ふ似て莖硬

く刺多し、小き葉尖て薄く細ある齒あり、四五月花さく、

四出、黄心白色、粉紅の二色あり、實と結び簇て成る生

ハ青く熟まれハ紅あり、人家に栽玩ぶもの、莖粗葉大ハ

延長ありと数丈花ハ又厚く大ハ白黄紅紫の數色、百

葉ハ出、六出の中よりハ大和本草野薔薇花白く單ハ

野ハ新樹の条は出す、茂アと茂草といふ木と

蔚林茂、時珍曰三月木端莖中ふ於て、數の黄苞と出、苞中に細

梭欄の花

市ノ列と云ふ、乃花と孕め、之狀魚腹の孕子に如し、是と梭魚亦梭笋といふ漸く長じ、苞と出すときハ花穂と

成も、黄白色、實と結び累累、蘇頌曰芍藥

として大さ豆のごとく、芍藥

最と云ふ、莖の上ハ三枝五葉、牡丹ふ似て狭く長ハ一二

尺夏のまじめ花とひらく、紅白紫の數種あり、子と結

ふ、牡丹の子ふ似て小ハ秋時根と採る、○時珍曰芍藥ハ

焯約の如し、焯約ハ美好き、良草花の容焯約といふ故

小名と云ふ、○董子曰芍藥一名將離、別人とする時、こ

と贈る、○花の宰相といふ、芍藥といふ草、良好草、亦の

異名あり、其頭假字の部、胡蝶花

花あり、四月花とひらく、狀鳶尾の花ふ似て小ハ灰白

色黄の紋あり、實と結ぶ、一種小若莖あり、小ハして長

六七寸、石菖の葉の輩のごとく、花もち小ハ、白及

浅紫畧菖蒲の花ふ似て小ハ美し、愛ふべし、

けの部蕙の、羊蹄根

余ハ註す、の条ハ註す、四手花

夏

田長

たさき ほろろきその異名あり或書にいふ此鳥農桑と催さんとも四月月のうら来ふ田を作らむ

則作

時過る熟せると啼云田長の名長ふゆる

越谷

吾山のへ九諸鳥皆三指只杜鵑の三指ありその

樹上

ふ宿るるさきハ二指前に向ひ二指後ふむハ四手の

田長

ハ是とて名つく或ハ死出とふまのハ井古今

い

くくの田とつれむうほろろきと

あ

この田長と朝れくふ藤原敏行

蜀魂

すの異名

蜀王本紀

望帝其臣鼈靈が妻と淫して乃て位を

禪

て去ぬ時ふ子規ふ故ふ蜀人杜鵑の啼と見て望

帝と

謝豹 五難組 蟲さ差とて死す人といれ足

悲む

謝豹 とて面と覆ふ羞る状のこ此虫杜鵑

杜鵑

と又謝豹といふ 賤鳥 ほろろきその異名あり

あ

づ鳥ハ卯花と 鹿の袋角 和漢三才圖會 鹿茸

あ

づ都と名あり 俗ふいふ袋角茸草

草

の生る良俗ふ以て蕈菌の字とて鹿の角初て生む

本

開くさる蕈に相似たり故ふ然て長と二三寸尖ら

む堅うらむ本草云鳥かて臭へくらむ小白虫ありこ

とと視れども見えむ人の鼻ふ入て顔と虫くふ葉も及

兼三夏物新茶

古茶 紀事 此月茶と 製して諸方の

人童と携へ新茶と領納し然後小壺と山火清冷の地

小寄て盛暑土用の暑湿と避く浴外愛宕山宜とて九

茶と製さるふ前後の次第あり故ふ摘茶の時焙すの

時擇茶の時といふ○古茶とて新茶ふ對するの古新古

とも夏 紙帳 紙とて作るる故帳あり

李とて 紙帳 貧しき者は是とて蚊と避

賣 用捨箱 飛鳥川云むうし夏並くさる紙帳あり

冬ふさるるさきハ紙食といふ物を高ひるさ

今ハさきふさきハ此飛鳥川ハ享保出生の老人の筆記ふ

まハ元文寛保の頃までハ此商人来りてさきハ○向の國

年刻ハ夕立やあち中 蛇鮈 毛吹草 越中の松皮鮫俗

ふと紙帳賣立置 蛇鮈 蛇の鮫といふ龍ふ似る故

鹽鳥賊 南越志 其性鳥と嗜み自ら水上ふ浮ふ飛

鳥是と見て死せりといふこと歌む乃巻

取て水入るると食ふ因て鳥賊と名づいふところハ
島と賊害ハくくせ夏季ふ用ふる邊土山中

をの海濱ふ遠き田舎のこあり江戸大坂水の繁花ふ
ハ生鳥賊春より四五月ふ至て最中ありて塩鳥賊を用

新麥 本朝食鑑 早きものハ三四月熟し
晩きものハ五六月熟し是新麥の候

紫菜 和名抄事 赤波 潜確類書 水中ふ生
す葉鳧葵ふ似て水上ふ浮ふ花黄白子

紫色三月より八月ふ至て莖細く釵の股の如し黄赤色
短長水ふ随て深浅あり名づいて蕪菜といふ歌ふと

紫蕪 時珍曰蕪ハ蘇
粗硬し十二月萌泥中なり

蟪蛄 傳燈錄 仰山洪恩禪師ふ問ふ如
何やて見性を得ん師の云ことハ蟪蛄虫の蚊の睫

五月 續命縷 朱索 條
ありて巢と
作るごとし

達 ちの部長命縷のちゆうふくふ
條下ミミミ 菖蒲刀 黒川道祐曰端午ふ
用ふる處の木刀或ハ

菖蒲刀 其形の相似うと以て萬物ふ准てこれ
と称兒輩腰間ハ横く端午石戦の戯の後ふ多くこの

神水 勝負と和音相近し一戦勝負の義寓さる
金門記 重五の日午の時雨ある時急ふ一竿の竹と破

新宮祭 今日雨ふふときハ來年大ふ熟
三井寺の山中ふ於てとと執る祭所神新羅明神

元亨紀書 新羅明神ハ天安二年田珍師大智禪師
て唐より帰る洋中忽ふ老翁船舫ふ現て曰我ハ是新羅國

の神と誓て師の教法と護持し慈氏の下生ふ至る語
こえむ○三井寺山下の主人ふと新宮祭といふハ大

津所々余多き故ふこれと關祭と誤つてふる者あり關
祭と称さるものハ貴船明神の祭あり貴船の祭關明

神の祭ともふ逢坂山ふありと其説述ふ異ハ拙考ふへし
夏 志

賑給

公事根源 ことはいちき民ふ米塩ふと給ふ
京中の條理小路と分て檢非違使承了て是と

引米塩の勘文ふと申との侍る之大臣陳ふつきて是と

さとし欽明天皇の御宇よりしほる食貧窮の者給ふ

て禮記月令ふ侍るふ也西宮記東の幸ふ受言 諸

寺北の手ハ左近の馬場西の手ハ右兵衛の馬場

鳥毛と革

はの部羽拔 麥門冬の花
鳥の余ニ註

天和本草 葉厚く五月ふ莖立て頭ふ穂の如く、
長く連つたる紫花をひらきて實ある秋熟ス 下

毛の花

大和本草 繡線菊小木あり、最生る臘月
早く萌生ス四月花をひらく、あつまり開き

て盛久し真紅あり淡紅あり、愛ま 越瓜 時珍曰

べし葉ハまろけふ似たり漢名未詳 越瓜地と

以名くるあり俗ふ稍瓜と名つく南人菜花と呼ふ三

月種と下し苗と生じ地ふ就て蔓と別青葉黄花夏

秋の間ふ 新茄和 世人茄子の拌和豆の棒和とい

實と結ぶ 其形状料ふ似棒ふ似る故

白むえ 六月

名とくえきえきとくえき
五音相通あり、の条ニ註と

勝曼叅

朔日 元亨釈書 推古天皇十四年秋七月
太子聖德太子對して勝曼經と講を

太子曰吾昔勝曼夫人くの時、釈迦世尊此經と説く故

小吾よく此經と講を講じて蓮花と兩いふ大サ三八又

義疏と製して世ふ傳ふ○當寺勝曼院の号、太子此道

場小於て又此經と講じくあり故、寺号ふく攝州四天

王寺の西門西北百歩むるあり、本尊愛 神今

深明王毎年六月朔日開帳とまこと愛深叅云

食

江次第 六月十一日神今食 其式 行幸あるとき中
和院ふて行ひ行幸あるときハ神祇官小於て行

公事根源神今 志渡寺祭 十五日ハ讚州
食年ふ兩度あり、十七日迄寒河

郡補陀洛山清光院志度寺 眞言 縁記本尊十二面觀

世立是補陀洛界觀音の御直作ありといふ本尊ハ御

衣木、繼躰天皇十一年近江國高島郡三尾崎山白蓮華

谷より流出湖水漂ふし七十年崇峻天皇御宇湖

水より又宇治川は流出山城國淀の津止る。三月月
 夫より海中に流出漂着せしと数千年推古天皇三十三
 年當浦の高嶋と云小島の磯辺に流す。蘭の竜智
 法といふ者彼木小端光りてを見て引つけ旬月と經て
 觀音大士童子と化現し十一面の尊像と刻玉。暮
 子子の刻小開眼等と終。云云。寺説ふ云この堂は藤
 原不比等公淡海當浦の海人契と結ひ給ひ不替の珠と
 龍宮城よりと返し。云云。海人の死骸と葬り
 し所之故志渡寺といふ。死渡寺といふ天武天皇
 二年辛巳の暮に精舎と建立し死渡道場と名づく抑
 志渡奈ハ房前大臣天平九年丁丑四月十七日薨。房
 前公當浦下り給ふ時庶民慈悲と云王の故に
 庶民その恩沢と報せん為六月十五日より十七日まで三
 日夜の間海人の墓に於て水祭とす。此日諸人交
 易して市とす。云云。と祭といふ房前大臣の薨去ハ
 四月も。云云。農業の障ある故六月祭る。今日國
 主警固の。月令。季夏土潤。海に暑し。注云
 義あり。

溽暑

溽ハ濕あり土の氣潤ふ故小蒸

清水

説文 岩間に出ると隣といふ。清徹の水石間ふりて。御傘清水

とて濕。暑と云ふ。
 ハ雜に結ぶといふ。夏に堰も夏に。貞享式清水ハ
 ひまといふ。詞とて古抄に夏とあせも。水の清
 涼と称も。其詞もと及ばらん。云堰結ふの詞及ハ
 清水とて。夏とて。例の蕉門の新撰とす。
 白梵天。和州田村の梵天。和漢
 種南都とて。ゆり。

ひ四月 翡翠の簾

あこの部青。ひらの部。平野祭。簾の條注。

此祭今絶た。祭る神五座。云云。北野天神の面あり。貞
 觀元年十一月九日始て祭祀あり。寛弘元年四月十日臨時の
 祭あり。廣瀬祭、龍田祭。四日。廣瀬の社。大
 和國廣瀬郡河合

村あり。龍田の社。同國平群郡龍田ふり。公事根
 源祭の日。廢勢あり。年小二度行は。使ハ前日。大

ハ風神より風水の難を除き豊年の祈ふ公より示へ

山王祭より
の部へ

美人草

名花譜花四
瓣色豔明黃栗

小類して小あり
古文前集 曾子固 々 虞美人 草の詩の頭

注云項王亡滅して虞姬自刎ぬ其墓の上の草と人呼

て美人草しきも同く詩小云青血化為原上
兼三夏物

草の一種虞美人草といふ者あり異種

單ひとみ勿み 衣いの裏うらふ 日ひ傘かさ 夏なつ日ひと樂たのむ傘かさ

白紙或ハ青紙と以て

ととと張荏の油と用
令麥いんまき
きつし麥
青箱雜記湯餠えんせん

[illegible]

食をもろとと煎ると皆湯餅といふ貞享式冷麥冷汁この

二品ハ官家の式目小多くハ秋の季とあせむハ察るハ冷の字

の惑ふに夏ハ涼と好む秋ハ冷と惡む天地
令汁煮冷

自然の道理にて此等六夏と決して

夏月、羹と調和して其器に小冷水を浸し、氷の
干魚

卷之五

口
一
前
心
聖
大
聖
目
經

和漢三才圖會 風海鱉 海鱉十頭 相聯 一白鰲 子作

[illegible]

干河豚 同 名 茅 屋 魚

未美 多 雀皮 多 刺 多 了 多 乞 多 不 多 同 多 至 多

夏月あつめ 霍おろ 吐は 是と食フ
 虫至ちゅうし

生ずるまゝと海帶昆布と久しく兩水ハミツを浸す

共よく化して埴と云ふ。埴、石灰、食塩と云ひ、氣の塩を

煙ふかふく點しをひきくへ蒸じ氣き曰い蟾し餘あ多たくく人に家やのの下したのの

蟾蜍 ツグナグサ 處不在久形木きく背上に非在

多し行極めて屋敷へ跳躍してあそぶ場

抱朴子蟾蜍十歲頭上生角あり腹の下の丹書を内

芝と名づくよく山精と食ふ人_ニ食ふ_ニ得_ル

仙いさむらに術家いさむら取用しよひて霧きりをかきして雨あめの初はつりを

は縛と解く今技ある者蟾と
上は憂
笈日記

聚あひ一いっ戰せん、くわんくく指さし使つかををきく、書しよ寢ね、しん壁へきををきく

一、登錄の如翁支考評曰此句はいふ所聞やく翁の

申されしは是ハ只残暑とて承了一候ハ

夏
ハ

と名く樹身光滑高丈餘花辦紫皺附草蔓赤き
莖葉相對五五月始て花さく開謝接實して六七月に至る

三才圖會紫薇俗名百日紅と名く其皮と極く柔く
自ら動故怕痒花と名く大和本草紫薇花と以て百日紅と

鼓子花 時珍曰其花辦とふさふさ状軍中
吹所の鼓子のとく故ふ鼓子花と名く

和漢三才圖會此花牽牛花の如くやれ粉紅色日
干ふ盛んやと且暮入萎む故ふ俗牽牛花と以朝顔と

未草 本草三時珍曰段公路北戸録
此と昼顔と名く 三時珍曰牽牛花の如く

其葉荷の如くして大なり其花葉ふ布て数重夏の昼
ふ當りて花とひらく夜は萎むて水ふ入晝亦るごとく

射干 和俗いつし草と称も上の説の如く木の
時より花萎む故と名く江湖ふ多し

部 瓠花 時珍曰瓠蘆數種あり名状一あり
其實二類各色あり並正二月と以て

種と下も苗と主と蔓と引て延縁も其葉各瓜の葉ふ
似て稍圓やと柔もあり嫩きとき食ふべし故ふ詩云

幡瓠葉采之章之五六月白花とひらく實と結ぶと白色
大小長短各數種色あり大なる者ハ瓠葉と名く小なる者ハ

蔓 和漢三才圖會見藍
浮ふく蔓とて以樂と奏へし 小似て微圓く嫩あ

瓜 和漢三才圖會 瓠瓜俗稱菜瓜五六月小く瓜と主大
さ二寸むう人圓く浅青色味苦く食ふべし熟を

條の田間より出ッ大さ梨のどし其色至て白し故ふ瓠瓜と
名と稱も女兒の瓜と求て少し莖とて白粉と其面ふ

傳思と以て鬢髮眉目口鼻と畫き水引と以て其莖と結
ひ提準て玩具と名く續後集

將造 時珍曰大豆の將造
瓠瓜や袖ふ入てもやもくを至曉

名云將造ハ將より食物の毒と制も
將の暴惡と平らふ如く〇製法畧之

引飯 飯の条出ッ

夏 ひも

冷水賣

江戸の街頭に手桶一荷と
おろし炎暑に冷水と云ふ

も四月

孟夏旬

扇と賜 年中行支歌合 夏冬季あつた
扇の拜 始ふ臣下ふ御酒と云ふ政と云ふ

の年、旬といふつらぎの政の、王と云ふ旬といふ、
の義、内裏あつたしく造らんとし、初ふ南殿で、行、
と云ふ、新所の旬と申ふ、此四月の旬も、内侍、
りし上達部ふと云ふ、いふこと、諸取作法と有る

杜本祭

上の申、河内國安宿郡、國分村、祭、神二
座、齋、大、神、經、津、主、の、命、や、して、香、取

大明神是なり、公事根源、杜本祭、四月上、申、日、神社、河内
國、あり、午、の、日、使、ら、仁、和、五、年、四、月、小、祭、初、る、河内志、杜本の
神社、い、や、人、古、市、郡、駒、ヶ、谷、村、に、あり、式、小、安、宿、郡、小、属、と
あれども、一向、その、所、ま、ず、駒、ヶ、谷、村、と、國、分、村、と、領、つ、き
の、故、に、或、人、云、國、分、村、火、の、谷、と、申、と、ころ、を、當時、杜本の、宮、と
唱、へ、来、り、占、代、杜本、千、軒、と、て、坊、舎、千、軒、あり、て、勅、使、赤、向
け、し、や、申、傳、ふ、その、近、辺、土、中、より、古、宅、と、折、々、掘、出
る、と、い、へ、ど、社、頭、と、申、と、ころ、を、大、木、の、樟、あり、その、木

小藤、つらば、と、い、春、花、咲、く、と、常、ら、め、木、立、の、神、木
と、申、傳、ふ、の、と、ころ、四、五、十、年、以、前、山、田、の、日、法、と、云、う、と、以、て、山
の、持、め、し、善、九、郎、と、い、う、者、件、の、樟、と、伐、り、つ、つ、小、芥、へ、ぬ、け、て
柄、を、り、残、り、俄、小、山、一、面、に、焼、出、件、の、芥、ハ、善、九、郎、の、家、の、う、ち
へ、飛、来、る、程、より、善、九、郎、の、妻、病、死、と、火、の、谷、明、神、の、影、向、と
と、多、う、と、や、と、村、中、騒、動、し、て、り、つ、つ、小、祠、と、建、て、神、樂
と、奏、し、神、慮、と、慰、め、奉、り、ぬ、この、出、り、より、杜本の、宮、の
事、穿、鑿、と、の、所、善、九、郎、方、古、き、書、物、の、證、と、を、き、り、
件、の、善、九、郎、の、節、次、弟、に、死、果、や、う、や、九、歳、の、孫、一、人
残、り、より、て、親、族、と、や、ち、寄、書、物、穿、鑿、し、て、り、出、し
と、と、と、や、その、木、と、伐、り、と、と、と、の、末、孫、今、小、明、神
と、異、名、と、呼、来、り、近、年、國、分、村、の、技、師、い、う、ん、所、と、云、え、り、
信、仰、し、奉、り、小、社、の、上、に、覆、ひ、と、ま、つ、い、九、月、九、日、御、酒、燈、明
と、捧、げ、て、祭、る、と、い、〇、此、喜、式、杜本祭、夏、四、月、冬、十、月、並、上
の、申、の、日、と、祭、る、と、い、え、り、い、う、と、云、き、神、社、あ、ら
今、考、ふ、き、物、あ、り、善、九、郎、より、取、出、せ、る、筆、記、い、う、あ、事
う、記、あ、り、ん、見、ま、す、
諸、葛、かの、部、加、茂
祭、の、条、に、出、
文、字、摺、花

大和本草 莖の長さ尺ふさぐも葉八百合のどくくして狭し
四五月は花をひらく紅白色花連ありて小一莖十餘つ
らありひらく紫葉の
五月 **とやのひ草** 或人
とし園ふ植て賞説也

云標こと **藻荇** 藻舟 藻の花 時珍曰藻ハ
證三未考 水草の文あ

るに潔淨潔浴をうけし故ふること藻といふ三種あ
了葉の長さ二三寸兩々相對也即馬藻也葉細くやしく
絲及い奥の鰓の状の如くやして節々ふ連り生む即水

藻あり俗ふ鰓草と名づく和漢三才圖會 時藻水藻和毛
毛三曰毛波海人船ふ乗こ出て繩と以て腰ふ **餅梅**
繫き水ふ没てこれと煎取て田ふ投給と養ふ

名義未詳梅子ハ梅雨の時熟と其肉黄熟して更ふ滓
なり液多きなり疑らるは是と餅梅といふくや和俗果穀の
類の粘るものと呼で **揉瓜** 越瓜胡瓜といふ縦小切劈横
餅と此といふ 小割て塩と糝てふこと洗ひ

水と去て醋ふ和して **世** 四月 **千團子** 大
食ふことと揉瓜といふ

○一本小千誕子小作江州三井寺の鬼子母神へ今日諸
人恭詣もこの神一千の子ゆると以て享る餅一千と供ひ
る故小千せきく一名いさくのね **五月 赤靈符**
團子といふ **石餅** いの部とくじ

抱朴子曰或人共ときくもの道と問ふ答曰 **蟬** 初蟬 格物
五月五日と以て赤靈符と作り心前小着 **空蟬** 論蟬

兩翼隊長くして腋の下にあり或は以為口あり脇と以て鳴
者之種類多し枚舉する小違ありは畧之○空蟬とこの
蟬といふは又かゆいもの
とくじ古あとも多し **石竹** きの部撫子 **梅檀** の
余二洋子

花 棟くきの部 **石菖** 時珍曰石菖水石の間ふ生る葉小
るもれハ石菖蒲人人家砂と以てくこと栽ること一年春ふ
至て剪洗ふ愈前ハ愈細ふふ高サ四五寸葉莖の如く
根匙の柄の如し粗き者亦石菖蒲之甚しきことハ根の長サ
二三分葉の長さ寸さるふことと錢蒲といふ是ふハ接ひ

小雁仙神隱書云石菖蒲一盆こ几上置夜の
間書と視る時煙と収て目と害するの患あり **六月**
夏 せす

高会其性剛強して倒橋の間小懸るふ日と經て猶活を
景天草の強と一 **大和本草** 此草と軒ふくれば馬宝

内ふ入ら **五月 住吉の御田植** 廿八日 榎陽群
談 援州

住吉神田と植る以て神事と行ふ相傳ふ神功皇后三韓
と征しより歸陣のとき長門國より植女とて五穀
農業のことと世に廣くてもあるの **李乳守の遊女** と
了ぬことふりて遊女今早とと女とつとむといふ **紀事**
追加泉州城乳守の妓女のうち約あるところの奉公年
季明けより三人来りてとと植今日神殿と植てのち
妓院の暇と出すといふ云云住吉の御田古き畠といふ
て紅深の千早ふ似ると著し赤き袴ふ市女笠といふ
く是古代の姿の残る今ハ **水馬虫** 漢名水黽
た植る真似とあるの云々
其身細長く五六分むりの黒き虫長き四足あつて
身ハ水につく水上と駈ると馬のとし依て水馬と名
つく畿内西土より塩賣江東の兒童シラシホといふ筑
紫ぞくメカタといふ其臭地黃煎の臭之関東ケボツ

ホウ〇其色黒赤はて鯉節ふ似る故ハ鯉虫といふ説
此虫味甘く錫ふ似る故ハ錫賣〇今江戸の云々

アノホウ **忍冬花** 忍冬ふの **透百合** 和漢三才
部とて

黄紅の數種あり上に向ひてゆく **末摘花** への部紅
花辦鮮明にして美く奥洲より出づ

注 **李子** 八閩通志 食貨部云李子其品一ありて白李亦
黄と名づく實清く脆し五六月熟も熟暗李ハ

皮肉共紅く味甘く夏熟も琥珀李
ハ皮紅く肉黄く味微渋し秋熟も **六月 住**

吉の御夜 同火啓 摂州住吉の社僧御夜を修する
晦日 **紀事** 六月小まゝに二十九日を用ひ

大まかに晦日と用ふ當日毎羊神輿と昇の輩住吉の松原
宿し潮小浸り垢離とあり今朝神輿と官前ふ寄る社
僧祝詞と誦して神とつしあつて後社司六七十員騎馬
あつて奉供も既ありて神輿疎の御旅所ふいふ是より先
社僧六七輩素絹と著し茶磨笠とて馬を騎馬とて神ふ
先づもて坡ふいふ即神と旅所ふ迂して又祝詞と誦す

露草

糸切齒下學集小銭朝露草と出さ一名銀銭花と云ふ花の形猪ふ似て小く色白く

青くももつ底小黒紅のきわみあり葉ハ三出五出やして西瓜の葉ふ似たり高さ二尺むろ朝ふ開き夕ふ

草石蚕

異名と甘露子土蟬滴露地瓜子といへ五月根と堀煮して喰ふ味百合の

如く根老蚕の如し故ふあづく

る

四月 盧陀草

月令博物 卷及び四

李部類示さるる四月の部ふ出さ、是ハヘルウカ唯ルウカといふ秋のこじめ花さき秋の季子とある天和本草ヘシルウカ近來紅夷より来ふ是紅夷ルウカより葉ハ細くして莖のむく木のごとく三四月黄花とひらく四出するて一片の間おのく一蓋と出さ花の心小實あり岩梨の實ふ似たり夏実のふその年子とまけハ来年花咲実ふその葉莖根おのく枯むこの草常のルウカの性ふ似て性猶さるる常のルウカより惡臭甚し

四月 車前草の花

秋の部

た 四月

橙の花

喜祝ふ用ふると以て正月の部あり載ふりこの條ハ小注あり

ね

四月 鼠りちの花

藪椿と

な 五月 刀

豆の花

秋の部

む

六月 葎茂る

和漢

面会本綱蒲故墟道の旁ふ生む二月苗と生む莖小細き刺あり葉節小對して生む一葉五尖微莖疎ふ似て細き齒あり九月細き紫花を開く子と結ふ

五月 苧衣白の花

秋のうの部苧衣白の花の条下小注あり

四月 草下毛

大和本草木やも下毛あり花ハ相似たり初夏細き紅花を榮く

一葉小群開くこと敗醬の如し

苦草

此詞 四季

部の部ふ出せる下毛ハ木下毛あり部類よりそり青藍按さるる苦草ハ苦草の誤りくきハワタの欠畫せりありとて受ふ費し

夏 遠ねなむうくやあさ

初学の或ひと解く但し苦草はの部入注しよるゝ見見るる

五月

蛇状子

本草啓蒙 蛇床子古説やうこと云ふ自別

似て食ふべし子の太き如し

六月 金龜子

北戸録曰甲蟲也五六月草蔓ふ生る南入收て以粉ふ養ふ本草蟲之類の附録ふのせう人婦人白粉の器中ふ入ぬ雄ハ緑色光あり雌ハ灰色光あり形状

飛蟻ハ長し翼あり額ふ兩角ありて長し六足

の俗王

あ四月 青木の花

花紫藍色ふ

ハ桃の葉より大あり實と結ふも青く熟

あつめ汁

五日より豆焼豆腐干餅を煮て汁の物と汁ふ焼て食ふれとあつめ汁

六月 蘆茂

あけりあひて江の水細き芦間うねる

兼三

夏物曝

きの部木布の糸下小注を

水の珍ハ麥とあがさど水飛て製

五月

神曲製

本草 主治水穀宿食癥結積滯と化

月六日或ハ三伏の日白麴斤 蒼耳の葉の汁野蓼の葉の汁各三升汁と

禾杏仁泥升 蒼耳の葉の汁野蓼の葉の汁各三升汁と

花四葉ありて白し葉の臭

甚るし家園ふ植れハ繁

茂して後ハ除きまの 篤信翁曰駿州甲川の山中の

六月 日向葵

天和本草一名西番

云向日葵ハ漢名之葉大ハ莖高し六月ふ花う頂上

夏

みしひせ

只日小つくとほつと賞まゐるのし
猿蓑 日の道や葵傾く五月雨芭蕉

世 四月 錦

葵 あひ 大和本草 冬葵ふ似て別く冬葵ハ葉ふ岐ありて
あひ 五ッふこころ錦葵ハ葉四として岐あり錦葵と

其花紅紫白數色あり四五月小開く錢の太さの如し
実とらゑて翌年莖高うらむ花さく三年とやまを

莖高う枝多 せんち 千日紅 せんじつこう 花鏡 木の高さ二三尺莖
くして悪し 淡紫色枝葉婆娑冬夏

深紫色と開く花千瓣細碎、四整ふて鉢のとし
この月日生きて冬小至て葉萎むといふとも花萎む

婦を採て鬘小簪
最も能久耐ふ

増補歳時記 草夏之部終

